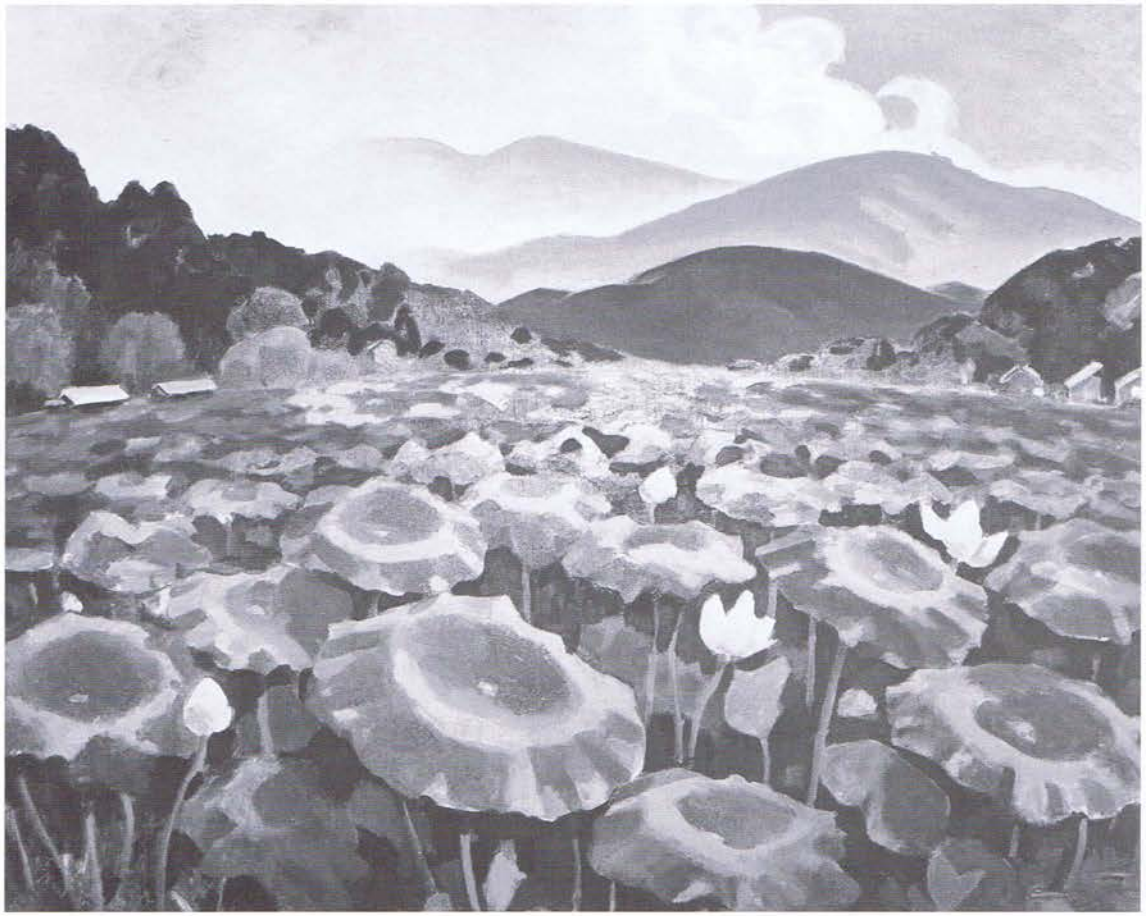
創立50周年記念誌

こさか

金沢市小坂公民館

創立50周年記念誌

こさか



金沢市小坂公民館

表紙のことば

昭和四十九年に公民館新築の記念として、当時の二木由郎館長から小坂を描いてほしいと依頼された先生が、以前スケッチした四季の彩りも美しい医王山の山並みを小坂から望んだ、忘れられぬ初夏の蓮田の風景を大きく描いたものだそうです。

現在は金沢星稜高校や大学、そして新しい住宅が立ち並び、当時を偲ぶものが無くなった今、公民館玄関ロビーに飾られた大作を『蓮のふる里』の思い出として表紙に使わせていただきました。

作者　南　万三　先生

昭和十九年四月～同二十一年十月　小坂国民学校校長
昭和五十六年四月　金沢市立城北児童会館　初代館長

金沢市小坂公民館　五〇周年記念誌　目次

発刊のことば　小坂公民館創立五十周年を迎えて　小坂公民館館長　石見　義之 …… 1

祝　辞 …… 2
金沢市長　山出　保
金沢市教育長　石原多賀子
金沢市公民館連合会会長　小寺　昭久
小坂校下町会連合会会長　駒崎　稔
石川県議会議員　中村　勲
石川県議会議員　米澤　賢司
金沢市議会議員　山田　初雄
金沢市議会議員　田中　仁

回　想 …… 6
小坂公民館二代館長　二木　由郎
小坂公民館四代館長　坂本　作二
小坂公民館五代館長　辻　久雄
元小坂公民館運営審議会委員長　島村　隆

小坂公民館歴代館長 …… 8

小坂公民館の組織・運営 …… 9

特別寄稿　公民館への思い …… 15
小村美智子　村池　久一　竹川　良一
谷村　玉枝　上出外喜雄

江戸時代の近在絵図・行政区域の変遷 …… 18

小坂校下の沿革と概要 …… 19

小坂公民館の歩み …… 25

あの日あの時　思い出のアルバム …… 33
成人式＊文化祭＊社会体育大会＊スポーツ大会
地域めぐり＊三世代間交流事業＊敬老会
立志のつどい＊女性学級＊健康づくり教室

小坂校下町会位置図 …… 48

校下各種団体・町会紹介 …… 49
小坂校下町会連合会＊小坂地区社会福祉協議会
小坂交通安全対策協議会＊小坂校下防犯委員会
金沢市立小坂児童館＊小坂校下老人会連合会
小坂校下女性会＊小坂校下少年連盟
金沢市第二消防団小坂分団＊小坂校下母親クラブ
小坂第一町会＊小坂中町会＊小坂三ッ屋町会
小坂親和町会＊東金沢町会＊御所町会
大樋南親町会＊神谷内本町会＊神谷内西町会
神谷内中町会＊神谷内葵町会＊新葵町会
三池町会＊高柳町北親会＊神宮寺二・三丁目町会
イトーピア町会＊神宮寺みどり町会

資料編

小坂公民館略年表 …… 78

歴代役職員・歴代各部長 …… 88

社会教育功労等表彰受賞者 …… 100

あとがき

小坂

金沢市民憲章

金沢を愛するわたくしたちは、兼六園の四季のいろどり、犀川・浅野川の清い流れ、山や街の豊かな緑、かおり高い伝統文化を誇りとし、希望と活力にみちたはたらく基盤と、創造性あふれる教育・文化の華さくまちづくりにつとめます。

1．ひらこう　世界と未来に　心の窓を

1．めざそう　いきいきと明るい　くらしの創造を

1．まもろう　美しい心と　ふるさとの自然を

1．つなごう　みんなの力で　まちづくりの手を

1．きずこう　個性ゆたかな　あすの金沢を

発刊のことば

小坂公民館創立五十周年を迎えて

小坂公民館館長　石見　義之

小坂公民館が、昭和二十七年四月に開設されて、このたび創立五十周年を迎えました。

その間金沢市当局におかれましては、公民館運営に対して格別のご指導、ご尽力を賜り厚くお礼申し上げます。当公民館では地域住民の要望に応え、又地区の特色を出しながら公民館活動を実施してまいりました。この五十周年を契機に私達は、先輩の足あとを残して行くと共に、公民館の歩むべき道を考える一翼を担えればとの思いを込め、記念誌を発刊し、地域住民の皆様にご覧いただくことにいたしました。

設立時は、小坂小学校の一室を事務所として借り、青壮年、婦人層を中心に将来に亘る社会教育の重要な拠点となるとともに、地域住民のコミュニティの窓口として利用されていたそうです。

昭和四十九年十二月、現在の小坂社会文化センターが建設され、公民館と児童館が設置されました。その後、老人憩の家が併設され、子供から老人まで地域の人々の出会いの場として利用されるようになりました。公民館の活動がここまで継続出来たのは、歴代の館長さんを始め、町会長、各種団体長のご協力のおかげです。そしてボランティア精神にのっとり、大変貴重な時間を公民館事業に費やして下さいました公民館役職員、委員の皆様方にも最大の敬意と御礼を申し上げる次第です。

これからの公民館は、青少年の健全育成という分野にも取り組み、地域の生涯学習の場、コミュニティ活動の場として多様な行事を企画していかなければならないと思います。又地域に伝わる伝統、文化を若い世代に継承するという仕事も大切だと思います。

この五十周年を大きな節目として、さらに地域に愛される公民館づくりに努力したいと思います。関係各位のなお一層のご指導、ご鞭撻を、お願い申し上げます。

最後になりますが、記念誌発刊にあたり、ご祝辞、写真提供、寄稿をいただきました皆様と、編集に携わられた方々に厚くお礼を申し上げ挨拶といたします。

祝辞

今後もコミュニティ活性化の拠点に

金沢市長　山出　保

小坂公民館が創立五十周年を迎えられ記念誌を発刊されますことを心からお祝い申し上げます。

半世紀にわたり、小坂公民館が生涯学習とコミュニティ活動の拠点として果たしてきた役割は誠に大きく、歴代の館長、役職員をはじめ、地域の皆様方のご尽力に深く敬意を表したいと思います。

小坂公民館は昭和二十七年四月に発足し、昭和四十九年十二月には現在の地で、公民館、児童館併設の小坂社会文化センターとして新築され今日に至ります。

古くから蓮根やくわい、花卉園芸が盛んだったこの地域も、国道を中心に新しい住宅団地が造成され都市化が進んでまいりました。

こうした変遷を踏まえ、公民館が中心となって「明るく平和で住みよい」地域社会づくりに力を注ぎ、新旧住民の融和やコミュニティの再生に成果をあげてこられました。

少子高齢化社会の到来により近隣住民が助けあい支えあう心の通った地域づくりが今こそ大切になっています。小坂公民館が今後も、地域の社会教育、コミュニティ活性化の拠点として、大きな役割を果たされることを期待申し上げますとともに、小坂地区のますますの発展を祈念いたしまして、お祝いの言葉といたします。

地域の教育力向上の中核に

金沢市教育長　石原　多賀子

小坂公民館が創立五十周年を迎えられ、ここに記念誌を発刊されますことに心からお祝い申し上げます。

半世紀の長きにわたり小坂公民館は地域の社会教育の拠点として多彩な事業を展開し、地域の発展に大きく貢献してこられました。

現在も、各種団体との連携を密に、子どもの頃から地域の個性を知り愛着心を深める「地域めぐりウォーク」や、三世代が交流して思いやりの心を育てる「小坂さわやかフェスタ」、毎月全世帯配布の、公民館だより「ゆめ小坂」の発行など、ユニークで熱心な活動を行っておられます。

二十一世紀を迎え、次代を担う子どもたちの育成が社会全体の重要な課題となっています。地域の教育力をより高めるため公民館にはその中核を担っていただきたいと願っています。

小坂公民館が今後も地域の社会教育、コミュニティ活動の拠点としてますます発展されることを期待申し上げますとともに、今日まで公民館活動にご尽力いただきました歴代の館長、役職員の方々をはじめ、地域の皆様に、心より感謝を申し上げ、お祝いの言葉とさせていただきます。

祝辞

小坂公民館創立五十周年誌 発刊に寄せて

金沢市公民館連合会会長　小寺昭久

小坂公民館が創立五十周年を迎えられ、その記念事業の一環として記念誌を発刊されましたことに心からお祝いを申し上げます。

貴公民館は、昭和二十七年四月に開設され、青年学級や生産物研究発表会などを開催して活気ある第一歩を踏み出されました。以来、この地区も都市化が進み、新旧住民が混在するようになり、住民の間に生活者感の違いが覗かれるようになる中にあって、地域住民の「ふれあいの場」、「学びの場」として、また「地域を高める施設」として公民館がその機能を十分発揮され、「明るく平和で住みよい」地域づくりをして今日を迎えられました。

「石川県県民運動」、「マナーを良くする市民運動」などに参画し、八ミリ映画「小坂とレンコン」の製作、近くは「小坂さわやかフェスタ」に代表される三世代交流事業や地域に愛着をと「地域めぐりウォーク」などの特色ある事業を実施して来られたのですが、その姿がこの記念誌に詰まっていて大変嬉しいことです。必ずや今後の活動の大きな支えとなることでしょう。

最後に、今日まで公民館を盛り上げてこられた歴代館長、役職員各位のご熱意に深く敬意を表し、公民館が地域住民の期待に応えてますますご発展されますようお願いしてお祝いのことばといたします。

小坂公民館五十周年記念誌 発刊によせて

小坂校下町会連合会会長　駒崎　稔

小坂公民館が創立五十周年を迎えたことを記念して、このたび記念誌を発刊されますことに、心からお祝いを申し上げます。

公民館は、戦後の復興と民主化が緒についた昭和二十七年に小坂小学校の一隅を借りて、地域住民のために教養の向上、健康の増進、情操の純化を図り、生活文化の振興、社会福祉の増進に寄与することを目的に設立されました。それから二十年を経て、公民館活動を更に活発に展開するため、昭和四十九年に現在の公民館が建設されました。

以来、小坂校下の社会活動の拠点となり、公民館の各種事業により、地域社会の発展に大きな役割を果してこられました。

この間、公民館の運営に献身的にたゆまぬご尽力を頂きました歴代館長をはじめ、役職員並びに多くの関係者各位に対し、改めて敬意を表し、感謝を申し上げます。

さて、この半世紀の間に、私たちは便利で快適な生活を求めて、大量の生産・消費・廃棄を行い、自然環境の汚染及び破壊をしてきました。一方、自由かつ平和な社会の中で、人道愛・互助の精神、または自然を大切にする意識が希薄になり、心の豊かさを見失っている心配があります。

希望の多い新世紀を迎えましたが、環境保全をはじめ、高齢者福祉、子ども達の健全育成など、地域社会が協力して取り組む課題は山積しています。

公民館が担う社会教育の役割と重要性は一層大きくなっています。このため、過去の業績をふり返り、その足跡をとどめておくことは、誠に意義深いことであります。

なお、記念誌に校下各町会並びに町会連合会の歩みを編集されますことは、これまた意義あることで、喜びとするところであり謝意を表します。

最後になりましたが、今回の記念誌発刊を契機として、公民館関係者皆様のご活躍により、小坂校区の地域社会がますます発展しますことを祈念いたしまして、発刊にあたってのお祝いの言葉といたします。

祝辞

記念誌発刊に寄せて

石川県議会議員　中村　勲

小坂公民館創立五十周年並びに記念誌の発刊を祝し、心からお慶びを申し上げます。

小坂地区のコミュニティセンターとしての小坂公民館の半世紀を越える今日までの充実した素晴しい活動を、地域に住む一人として誇りに思うと共に、歴代の館長、運営審議会委員、各町会長、学校長を始め各種団体、公民館委員、職員の皆様、また公民館に深い愛着を持っておられる地域住民の皆様方のご努力、ご協力、尊いボランティア精神に心から敬意と感謝の意を表する次第です。

戦後もはや五十六年を経過致しましたが、その間教育の荒廃が進み、道徳心、公徳心、愛国心の欠落した子供のお手本にもなれない、恥を知らない大人が急増し、子供より大人の教育が先決とまで言われる本当に情けない社会になりました。

然し、かかる時代なればこそ地域のコミュニティセンターとして、明るい住み良い社会づくりの為、公民館の果たす役割とその使命は益々重要になってまいりました。

地域住民に愛され、地域住民に密着した公民館として、何事にも感謝の心を忘れず他人を思いやれる優しい人間の形成に資するよう、社会教育の充実や高齢社会における生涯学習の場としても、大いにその力を発揮されますよう期待して止みません。

最後になりましたが、小坂地区の更なる繁栄と小坂公民館の躍進を強く願うと共に、関係各位を始め地域の皆々様のご健勝とご多幸を衷心より祈念申し上げ、お祝いのご挨拶と致します。

小坂公民館創立五十周年記念誌発刊を祝して

石川県議会議員　米澤賢司

このたび、小坂公民館がめでたく創立五十周年を迎えられ、その記念事業の一環として記念誌を発刊されましたことを心よりお慶び申し上げます。

貴公民館は、戦後の荒廃混乱した社会情勢の中にあって、中核的役割を果たすため、「郷土の人達が楽しみたい時に楽しみ、学びたい時に自由に学べる施設」として、昭和二十七年にその礎を築かれて以来、地域に密着したきめ細やかな活動によって地域の社会教育の拠点として重要な役割を果たしてまいりました。

この五十年の間、社会経済情勢は様々に変わりましたが、歴代役員の皆様方が、それぞれの時代に対応した課題に取組み、工夫をこらした事業を実施されるなど、地域コミュニティを運営する底力として、誠に大きな存在でありました。

ここに生活する者の一人として、改めて感謝を申し上げる次第です。

さて、近年、私達の生活は、かつて経験したことのない少子・高齢化の到来や高度情報社会の進展等によって、大きく変容しようとしております。

先人から受け継いだ生活様式は変化し、地域の連帯感も希薄になる中で、人々は新しいライフスタイルを求めて模索しているように見えます。

このような状況の中、石川県においては、教育行政の基本方針の一つである「生涯学習の振興」について、「人々が生涯にわたり、いつでも自由に学ぶことができる体制の整備と魅力的で活力ある地域づくりの推進」を重点施策の目標に掲げ、「心の教育の充実」を学校・家庭・社会が相携えて推進しようと呼びかけているのも貴公民館に寄せる期待の現れでありましょう。

さらに魅力的で活力のある地域づくりに向けて、ご一緒に進もうではありませんか。

終わりに、小坂公民館の、これまでのご尽力を讃え、次の五十年のスタートに向けて、益々のご発展を遂げられますことを祈念いたしまして、お祝いの言葉といたします。

祝辞

発刊を祝して

金沢市議会議員　山田初雄

小坂公民館が五十周年という節目を迎えられ、このたび、記念誌を発刊されたことは大変意義深く、編纂に携わられた皆様の御苦労に感謝申し上げるとともに、五十周年記念誌の発刊を心からお祝い申し上げます。

昭和二十七年に小坂小学校の一室に事務所を置き、創立されて以来、今日まで小坂地域の生涯学習の拠点として、また地域コミュニティの中心として重要な役割を果たしてきたことは、皆様御承知のとおりであります。

本地域は、恵まれた自然を生かし、レンコン栽培や花卉園芸などが盛んでありましたが、モータリゼーションが進む中で一時期は国道沿いに工場や事業所が進出いたしました。その後、工場等が郊外に移転し、その跡地には住宅が建ち並び、住宅団地も造成されてまいりました。

こうして新しく転入した住民と古くからの住民との間の地域社会のコミュニティ醸成に本公民館の果たした役割は重要なものがあります。

一方、教育改革の一環として、時代を担う子どもたちの健やかな成長のためには、学校・家庭・地域が連携して取り組んでいくことが必要といわれており、地域の教育力の充実が一層重要となってきております。こうした中、地域の教育の中心となる公民館の持つ役割はますます重大であり、今後の公民館活動に期待いたすものであります。

最後になりましたが、これまで御尽力いただきました館長さんをはじめ職員の方々に深く感謝を申し上げるとともに、小坂公民館の一層の発展を心より祈念いたし、お祝いの言葉といたします。

蓮のふるさと—発展のとき

金沢市議会議員　田中仁

この度小坂公民館が創立五十周年の節目の年を迎えられたことに、心からのお慶びを申し上げます。

昭和二十七年当時小坂小学校の在校生は五百十八人で、その後五十年間に三万三千八百人余の卒業生を輩出し、今日の小坂校下を創ってこられました。十年一昔ともいわれますが、五十年間にわたって校下の歴史を築いてこられた諸先輩にあらためて感謝の念を強くいたしております。

都市は南進時計回りに発展をするといわれており、いよいよ北部が抱える各種の事業に日が当たることになります。金沢市の北部に位置する小坂校下も、東金沢駅の整備、東部環状道路の整備、三池の区画整理事業、小坂・御所線の整備等々、基盤整備が進み校下として大きく発展をしていくこととなります。

一方で、私達の校下をさらに住み易くするためには、地域コミュニティの確立が欠くことの出来ない必須の課題であります。

少子高齢社会が到来している今日、「いいね金沢、蓮のふるさと、小坂まち・人と人、心と心をつなぐ」との公民館が指し示す地域づくりに向け、一層の努力をして行かなければとの思いを強くいたしております。

最後に、公民館活動を通して校下各種団体が一致協力し、安全で住み良い明るいまちづくりに邁進されることを御祈念申し上げ、お祝いの言葉といたします。

回想

追想

元館長　二木由郎

小坂公民館の創立五十周年おめでとうございます。

顧みますと、昭和四十五年の春まだ浅い日に、公民館運営審議委員長の島村隆様をはじめ校下の方々七、八名の訪問を受けた。

時候の挨拶もそこそこに、開口一番「ご承知と思うが、館長の坂井善雄様が余儀ない事情で退任され、主の無い館の運営は的を得ず困っている」とのことを話された。

「ついては、今、館は小学校に間借りしているが、将来独立館の設置も含めて館長を引き受けてほしい」とのことであった。余りに重大な問題なので「少し考えさせてほしい」とお帰り願った。

私は大樋が出生地で、二十八年に小坂町中で機械工場を建て当地にご厄介になっていたが、四十一年に金市町に新しい工場を建て、これがやっと軌道に乗ったところであった。

新しい事に挑戦することに魅力を感じたとは言え、今思えば無謀に等しい決断だったが、町内会あげての物心両面での支援を戴けるとの話で浅学菲才の身でありながらお引受けした。

四十五年二月一日付の就任は、汗顔・若気の至りで、五十歳を過ぎたところから苦難が始まった。

小坂町有識者の集まりの八日会に、館建設のための土地の話しを述べたが音信なしでした。そんな時、今は故き山田保様が、自分の貸屋の裏に金腐川の河川改修の残地があり、現地は三日月形であるが四角に調整すれば宅地になり、これならば安価で払い下げを受けられそうだと提案をしてくださった。地獄で仏とはこのことと飛び上がる程嬉しかった。それから、県土木部金沢出張所と市の社会教育課への往復の日が続いた。

土地買入れの趣意書作成、そして募金、土地取得の手続き、そして整地、区画割案分等、今思えば大変な仕事をこなしてきたと思う。

しかし、小学校間借時にはユニークな計画も実行の段階でいく度も挫折した事を思うにつけ、新しい建物で思う存分活動できたことの喜びは何にも代えがたい思い出です。

館敷地の収得、そして新しい公民館の建設と、地域の皆様の暖かいご支援と、県市の特別なご配慮を賜わりましたことに深く感謝し、今後ますます小坂公民館が地域の中心として発展されんことをお祈り申し上げます。

追想

元館長　坂本作二

小坂公民館が校下の皆様に支えられ、五十年という節目を迎えられた今日、ここに記念誌を発刊されましたことを心よりお祝い申し上げます。

昭和二十七年に小坂小学校内の一室で開設し、戦後の復興途上の社会情勢の中、地域の社会教育活性化と住民相互の融和と親睦をめざした取り組みは、生涯学習の推進と変わった今も変わらず重要な役割を果たしていると思います。

昭和四十九年、現在地に新築された公民館も私が館長に任命された時は、内部の施設や外観に汚れが目立ったため、運営審議会の皆様や公民館役員に計り、昭和六十二年外観リフレッシュ工事を行いました。

建物の色をどうするかずいぶん悩んで、暖かくやさしいイメージのクリーム色を選び施工したのが一番の思い出です。

二十一世紀を迎え、地域住民が心豊かな生活ができる生涯学習の場として、また、人と人とのふれあいを大切にするコミュニティの場として更なる事業の実現が期待されます。

今、新しく始まっている東金沢駅周辺の開発で新しくなる東金沢駅舎、同時に行われている三池土地区画整理事業や日本電工跡地の開発など大きく変貌するであろう小坂地域の未来に希望と夢を求めると、今後、ますます公民館活動の重要性が望まれ、その活動を通して安全で住みよい、活気あふれる明るい町づくりに発展されますことを祈念申し上げます。

最後になりましたが、小坂地区のますますの発展と関係各位の皆様のご努力とご苦労に深く敬意を表し、追想のことばといたします。

回想

地区をあげて国体をお手伝い

前館長　辻　久雄

小坂公民館創立五十周年を心からお祝い申し上げます。

ひと口に五十年と言うけれども、この五十年の歴史の重みが現在の公民館の中に脈々と続いていることを感慨とともにみることができます。

私が青年学級の運営に関与したのは、坂井初代館長時代で、小学校の礼法室を借りての時でした。今とは施設の面で隔世の感があります。

私が館長を任命された時、城北地区の公民館の当番があたり、又石川国体の行われた年で、その国体に協賛して、弓道会場の武道館、馬術会場の県馬事公苑で、お茶席の接待や城北地区の獅子頭展を地区の方々のご協力で運営した事が思い出されます。

館長を務めた六年間、式典行事として成人式後のアトラクションで、校下で活動されている芸能の披露を行ったこと、中学二年生を対象とする立志のつどいを北鳴中学校（千坂校下と合同）で行い、金沢に在住の外国の方々や、全国青年の主張大会で優秀な成績をあげた方を招き講演会を持ったこと、文化祭では、平素公民館で行われているいろいろな教室の展示や舞台発表を取り入れたこと等が想い出されます。

施設の面として、事務室と応接室の開放、調理室の設置等を運審の方々のご努力により改築できた事等深く感謝申しあげます。

六年の間、諸行事、諸事業を楽しく遂行できたのも校下の方々、役員や委員、諸団体の皆様方のご援助、お骨折りのお陰と深く感謝申し上げます。

今後公民館が校下の活動の核として、益々発展されることを願っています。

生涯教育の場としてより活用を

元運営審議会委員長　島村　隆

公民館とはどこにあって、どんなことを行っているのか、全然知らないで昭和三十年の始め神谷内の町内会長を引受けた時、公民館の委員を出して欲しいとの引継ぎを受けて何人かの名前を学校の方に提出したものです。

町内会長である私もその一人として勉強をかねて、公民館の会合に出席したところ地域社会活動として幅広いものがあって驚いたものです。

当時は小学校の職員室に主事が一名だけであとは館長（当時小坂町の坂井善雄さん）等の献身的なお世話で公民館が動いていました。私は教養部担当で新制中学卒の若い人達のグループに労働基準法の問題点などを説明し、社会人になった若者達二十人ばかりに少しでも参考になればと夜、学校の教室で毎週話をし、戦いに負けた日本が一日も早く立ち直ることを念じていたことを思い出します。

それから市議会、県議会に関係するようになって、運営審議員として平成二年三月まで関係し、公民館活動が大切であり重要なものであることを体験しました。

この間金沢市は小学校区毎に単独の建物を建てて、より充実した活動が要請されるようになり悲願の独立館が昭和四十九年に完成したことが思い出されます。

一世帯二万円位の負担をお願いし今日の公民館が完成したのですが、苦労も多かったことを思うとこの公民館を生涯教育の場として、大いに活用され五十年を契機に益々発展されることを念じてお祝い申し上げます。

小坂公民館歴代館長

常に地域の発展を願い活動

初代館長
坂　井　善　雄氏
昭和27年４月１日
～昭和45年１月31日

２代館長
二　木　由　郎氏
昭和45年２月１日
～昭和56年３月31日

３代館長
吉　田　孝　二氏
昭和56年４月１日
～昭和61年３月31日

４代館長
坂　本　作　二氏
昭和61年４月１日
～平成２年３月31日

５代館長
辻　　久　雄氏
平成２年４月１日
～平成８年３月31日

６代館長
石　見　義　之氏
平成８年４月１日
～現　在

小坂公民館の組織・運営

金沢市公民館連合会

城北地区公民館連絡協議会	
馬場公民館	浅野町公民館
森山公民館	夕日寺公民館
千坂公民館	薬師谷公民館
森本公民館	花園公民館
三谷公民館	湖南公民館
旭日公民館	小坂公民館

平成13年度年間行事

（金沢市小坂公民館）

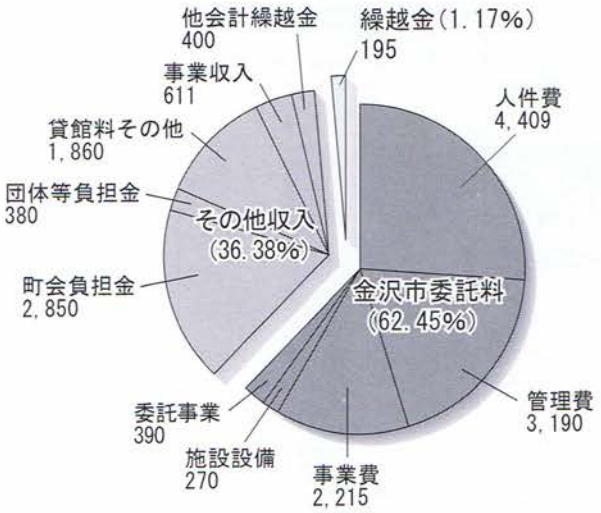
公民館運営審議会	4月26日（木曜日）	小坂公民館
公民館委員会総会	5月2日（水曜日）	小坂公民館
校下ソフトボール大会	5月20日（日曜日）	北鳴中学校
ニュースポーツ大会	6月3日（日曜日）	城北市民体育館
ブロックソフトバレーボール大会	6月10日（日曜日）	森本市民体育館
三世代間交流グラウンドゴルフ大会	7月8日（日曜日）	小坂小学校
立山登山	7月29日（日曜日）	立山
ブロックソフトボール大会	8月5日（日曜日）	森本中学校
校下グラウンドゴルフ大会	9月2日（日曜日）	粟崎ゴルフ広場
公民館運営審議会	9月6日（木曜日）	小坂公民館
地域めぐり（小学校PTA共催）	9月8日（土曜日）	小坂公民館
校下社会体育大会	9月23日（日曜日）	小坂小学校
校下文化祭	10月28日（日曜日）	小坂公民館
小坂校下自主防災訓練	11月18日（日曜日）	小坂公民館
避難訓練・大掃除	12月9日（日曜日）	小坂公民館
校下成人式・新年互礼会	1月14日（祝日）	ホテル日航金沢
校下ボウリング大会	2月3日（日曜日）	サンサーカス
立志のつどい	2月16日（土曜日）	北鳴中学校
金沢市公民館フェア	2月23日～24日（日）	市文化ホール
ブロックボウリング大会・懇親会	3月10日（日曜日）	馬場公民館
公民館創立50周年記念式典	3月17日（日曜日）	金沢都ホテル

直接事業
- ◇ 蓮の実女性学級　年間7回開催
- ◇ 健康づくり教室　年間7回開催
- ◇ パソコン教室　5月～12月までに10講座開催

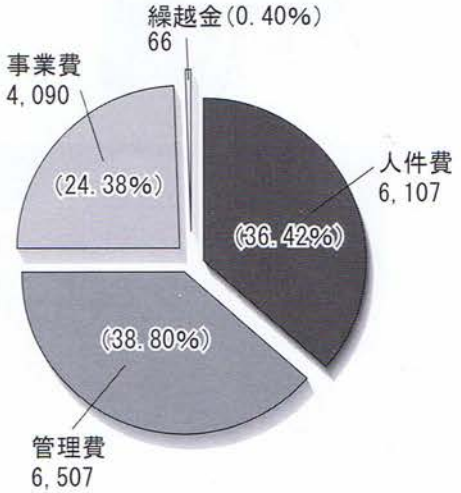
平成13年度収支予算

（単位　千円）

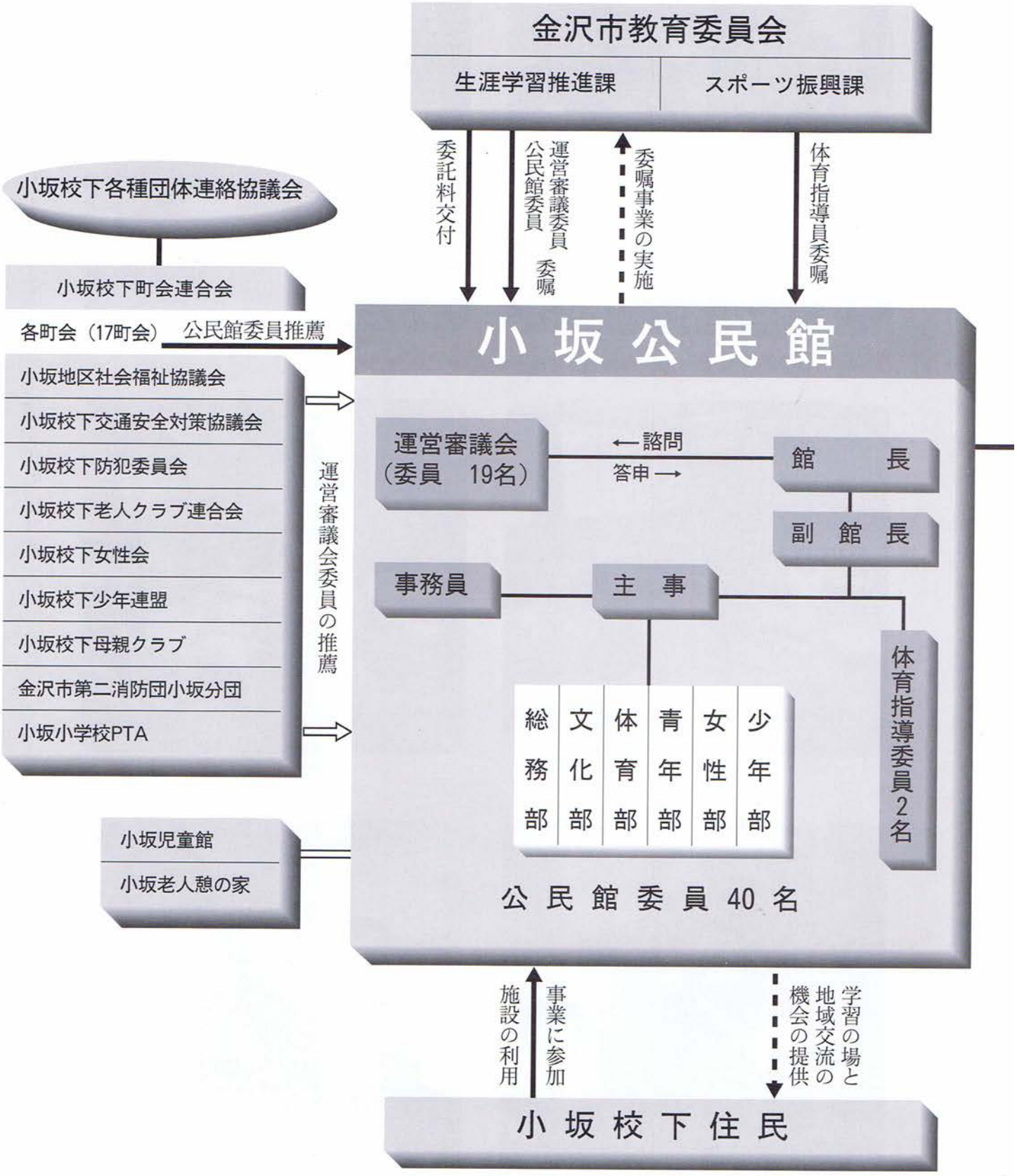
歳入の部（合計金額 1677万円）



歳出の部（合計金額 1677万円）



小坂公民館　運営組織図


金沢市教育委員会
生涯学習推進課
スポーツ振興課
委託料交付
運営審議委員
公民館委員　委嘱
委嘱事業の実施
体育指導員委嘱
小坂校下各種団体連絡協議会
小坂校下町会連合会
各町会（17町会）
公民館委員推薦
小坂地区社会福祉協議会
小坂校下交通安全対策協議会
小坂校下防犯委員会
小坂校下老人クラブ連合会
小坂校下女性会
小坂校下少年連盟
小坂校下母親クラブ
金沢市第二消防団小坂分団
小坂小学校PTA
運営審議会委員の推薦
小坂児童館
小坂老人憩の家
小坂公民館
運営審議会
（委員　19名）
諮問
答申
館長
副館長
事務員
主事
総務部
文化部
体育部
青年部
女性部
少年部
体育指導委員2名
公民館委員40名
施設の利用
事業に参加
学習の場と地域交流の機会の提供
小坂校下住民

珠算教室　大　野　外世子 先生
◇毎週３回　火・木・土曜日

習字教室　余野木　翠　泉 先生
◇毎週　金曜日

筆ペン教室　小　倉　清　子 先生
◇毎月　第１・２・３火曜日

水墨画教室　中　村　海　石 先生
◇毎週　木曜日

パソコン教室　山　下　恵　美 先生

カラオケ教室　丘　野　　潤 先生
◇月２回　第２・４水曜日

楽しく学んでいる各種教室紹介

俳句教室　南　典二先生
◇毎月１回　第３土曜日

読書会　山本弘子先生
◇毎月１回　第２土曜日

大正琴教室　西　孝子先生
◇月２回　第１・３水曜日

こども作法教室　六斗紀子先生
◇月１回　第４土曜日

フォークダンス
しろはすフォークダンス友の会　茶谷良子さん
◇毎週　木曜日

囲碁　囲碁愛好会　七海勇一さん
◇毎週　日曜日

小坂公民館予算の推移

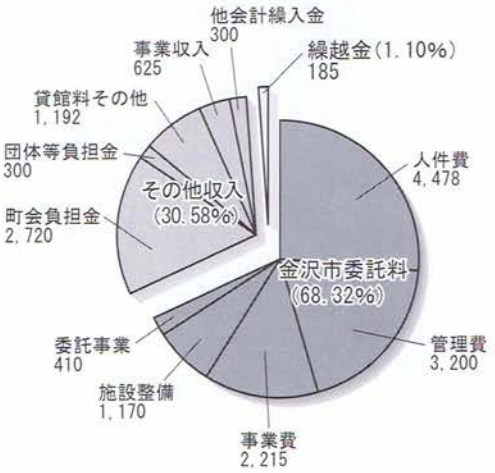
（単位 円）

年　度	予算金額	年　度	予算金額
昭和27年	177,000	昭和52年	4,535,000
28年	194,000	53年	4,980,000
29年	317,000	54年	4,611,000
30年	292,000	55年	6,241,000
31年	277,000	56年	5,802,000
32年	334,000	57年	8,169,000
33年		58年	8,106,000
34年	415,000	59年	8,732,000
35年	395,000	60年	8,780,000
36年		61年	8,519,000
37年		62年	14,582,000
38年		63年	9,571,000
39年	625,000	平成元年	10,200,000
40年	665,000	2年	10,600,000
41年		3年	10,710,000
42年	865,000	4年	10,350,000
43年	907,000	5年	20,100,000
44年	923,000	6年	13,870,000
45年	1,055,000	7年	14,501,000
46年	1,241,000	8年	14,400,000
47年	1,464,000	9年	14,600,000
48年	1,540,000	10年	14,500,000
49年	1,617,000	11年	15,070,000
50年	3,739,000	12年	16,790,000
51年	4,329,000	13年	16,770,000

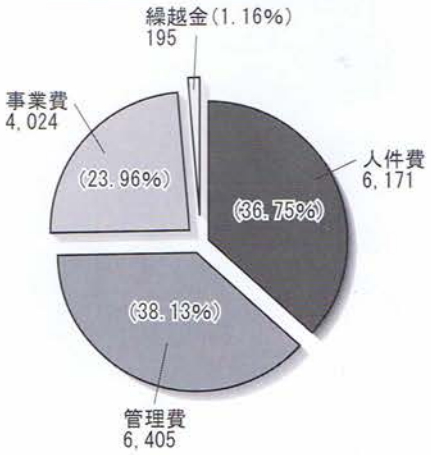
平成12年度収支決算書

（単位 千円）

歳入の部　（合計金額 1679.5万円）



歳出の部　（合計金額 1679.5万円）



特別寄稿

――公民館への思い

小坂公民館五十周年の追憶

小村　美智子

人は住む場所により慣れ親しむ土地の暮しが明るくも暗くもなる。

春は柳が芽ぶき、桜吹雪の川面を渡る風が心地よい。四季の移り変わりの素晴らしい田園に住み、心に豊かさを感じる。

当時、小坂小学校の一室に古びた机三脚を置き「小坂公民館」と表記されていた。初代館長は坂井氏、二代は二木氏、主事は牧野氏事務員は田中様で、婦人会の仕事も含めての執務である。

私は昭和三七年の春、前会長の三東様より突然、婦人会長を依頼され、併せて農協婦人部への参加も求められて返事に困る。校下婦人会の会長という大役に、ただ戸惑いを感じ、子供が小さいことを理由に一たんは断わるが、みんなの協力を条件に引き受ける。

何事も勉強と教わり、手始めに新潟県の災害見舞の手伝をする。婦人の皆様、殿方のご理解とご協力により、忙しい中に五年の歳月が過ぎる。校下事業を関係機関と協力して歩み育てて来られたことに感謝すると共に、地域活動の推進に当って、人それぞれの考えをまとめていくことの難しさに苦労したことが思い出される。

校下一円が農村なので働くのみの明け暮れに、若い女性は身体の休まる時がなく心が痛む。あちこちに団地ができはじめ、町内も少なからず新しい息吹きが感じられるようになる。そこで役員と相談の上、校下婦人会の研修旅行と称して「琵琶湖めぐり」を企画。大勢の参加に戦後初めての団体の旅を満喫する。夏は盆踊り、秋は社会体育大会と汗と涙の助け合いで成功。時の流れの中で人との出会いを大切に、多くの温かい配慮に感謝して婦人向上に努めた遠い昔が思い出される。共に力を尽し、今は故人となられた方々を偲び、改めてご冥福をお祈りすると共に、公民館の益々のご発展にこれからも協力していきたいと思う。

献身的な仕事ぶりに敬意

村池　久一

あらかじめいただいたメニュウを、審議決定をしただけに、特段に記述することは無い。ただ、何時も気掛りだったことは、校下の社会教育の中心で期待される公民館の予算が、あまりにも少額で予定しており、広範な数多くの行事が今一歩ふみ込めない感がする。

それでも金沢市の校下公民館は、全国的に見ても類似都市の例を見ないすばらしい自主的な地域活動であり、民間保育所とともに私達の誇りである。

特に私が常に敬意を表してきたことは、常勤の主事さんのあの献身的な仕事ぶりである。薄給にもかかわらず自由な時間の拘束が多い仕事だけに、是非待遇改善を切望しています。

ただ今私は、自分の健康と社会貢献の為にと家庭菜園に精を出している。今年から仲間とご一緒に『楽しいベランダ菜園』の会を作り、トマトの鉢栽培を行い、特に老人ホーム・障害者施設や保育所にお分けしている。

厚志が集まり環境整備

竹川　良一

私が公民館主事として勤めたのが、昭和五五年四月から三年間でありました。

勤めだして暫くしたころ、小金保育園が新築移転する整地の残土が、沢山でるとの事で、公民館と金腐川の間の潅漑用水の廃溝をこの残土で埋め立てられるのではと、二木館長の考えから、金沢市土木事務所に問い合わせ申請手続きをし、許可を受ける。が、今度は保育園の残土がそんなに出ないといわれる。そこでやむなく山王開発の社長さんにお願いしてみる。「館長の言うことだったら分かったよ」と、早速埋め立てて下さった。

次は、駐車場に約八〇坪の借用地があり、ここも土留めをして奇麗にしたいとのことで、地主さんにお願いしてくれと、館長の指示が

でる。地主さんは、「あの土地を公民館が買ってくれれば良いのだが、金がないなら、土留めをしてもいいよ」と言われ校下の業者に土留めを依頼し完了した。舗装工事は丸建道路のお偉いさんにお願いし承知して戴く。

環境も一変した昭和五六年の文化祭に「創立三〇周年の記念植樹をするから準備をしたい」と館長に言われる。「老人憩いの家」の右角に「松・竹・紅梅」の植樹を出島造園さんに快く引き受けてもらう。

翌年の三月、館長が「辞職したい」と、申し出られる。二木館長は、公民館の環境を綺麗にして次の館長へと引き継ぎたかったのだと、そう思ったものでした。

もうあれから二〇年ですか……。公民館環境整備に係わりあいを持った一人として改めて当時の業者の皆さんにお礼申し上げます。大変お世話になり有り難うございました。

合　掌

（発刊を前に平成十三年十二月六日永眠・ご冥福をお祈りします）

公民館と私

谷村　玉枝

婦人会の一会員として、公民館に行く様になってから、かれこれ三十年になります。その間、副会長から会長になり、五年間、各町会から推された部長さん達と、一ヶ月に一度の定例会、婦人学級での料理、手芸、講演会等には、必ず行きました。

公民館は地域の交流、学習などには、なくてはならない大切な存在です。

私達婦人会役員は、文化祭、運動会、三世代交流等、大きな行事のある時は、準備の為に夜遅くまで頑張ったものでした。

数多い想い出の中でも、平成三年の夏に行われた三世代間交流のお餅つきの時のことは、忘れられません。ラジオの〝日本列島ここがまん中〟の番組で、ラジオカーが公民館まで来て、実況中継したのです。歌手の原田悠里さんが、お餅つきにあわせて、唄ってくれました。初めての体験で、インタビューに応えながら、汗びっしょりになったことを想い出します。

会長を退いた今でも、時々、公民館へ行きますが、執務室も厨房もすっかりきれいになり、より集まりやすく楽しい場所になりました。

地域のコミニュケーションの場として、これからも、ますます公民館を利用されます様、皆様にお奨めしたいと思います。

小坂公民館創立五十周年を機に、今後の更なる発展を、地域の皆様と共に、ご祈念申し上げます。

思い出「少年連盟の組織づくり」

上出　外喜雄

私は、永く公民館委員や育成委員として、多くの公民館事業に参加させていただきました。

中でも強く印象に残り、今も思い出されるのは昭和五四年度金沢市公民館大会で、研究発表をさせていただいたことです。

この五四年度より、これまでの公民館大会とは形が異なり、各地区の公民館が研究発表をするとの事でした。その発表者第一番目となり「環境浄化と健全少年の組織作り」と題して発表した時の緊張感を今もって思い出されます。

この五四年度以前、数年間にわたり校下少年連盟の組織作りを小学校ＰＴＡの役員の方々や公民館少年部の御協力を得て完成させた事を、約一五分間ぐらいにまとめて発表したものでした。

多くの先輩がおられる中で、自分が小坂公民館代表となったことを今も深く感謝しております。この経験があったからこそ、永く公民館委員を務めさせていただけたものと思い、本当に感謝の念でいっぱいです。

どうもありがとうございました。

江戸時代の近在絵図

〈加越能三州細密図（部分）天保11(1840)年　金沢市立玉川図書館蔵　加越能文庫〉

行政区域の変遷

小二又村・伝燈寺村・夕日寺村・神宮寺村・談義所村(鳴和町)・牧村・長屋村(東長江町)・御所村・小坂村・三池村・山上村(山の上町５丁目)・卯辰村 ―― 小金村[1]

神谷内村・柳橋村・横枕村・法光寺村・百坂村・金市新保村(金市町)・新保荒屋村(荒屋町)・福久村 ―― 坂井村[2]

大衆免村(元町)・浅野村(浅野本町)・浅野中島村(京町)・乙丸村・高柳村・田中村 ―― 中口村[3]

宮保村・疋田村・千木村・千田村・今村(今昭町) ―― 金川村

〔明治22(1889)年〕

小坂村 ―― 金沢市に編入

〔明治40(1907)年〕　〔昭和11(1936)年〕

（　）内は昭和11年に金沢市に編入時に町名が変更になった。

①藩政期には小坂組と金浦組の十村組に属していて、その一字ずつを採って名付けられた。
②小坂庄と井上庄の通称を折衷して命名された。
③藩政期にこの地区を「中口」と通称していたことによると言われる。

小坂校下の沿革と概要

近代に入る以前は「おさか」と呼ばれ、現在でも地元では「おっさか」と称されることがある。奈良時代末期（西歴七七〇）の文書に表わされている他、諸説があるらしく、昨今は新説も唱えられている由。

以下、文献を引用する。

小坂村　同庄内

往古は今の中町・尾張町辺りに村家ありて、此辺すべて小坂庄内なりとぞ。故に今金城の追手先を小坂口というも、往古の遺称なりと云う。金沢の城府追々広ごりたるに依て、今の地へ追出されたる由。

「加賀志徴」

八ツ塚山古墳

〔古墳時代〕

浅野川と森下川の間の谷頭丘陵で約十群、百基を超える古墳が確認され、原状をよくとどめるものに、御所八ツ塚、野間神社裏山、小坂、神谷内、法光寺などの古墳があり、古墳時代の政治勢力の拠点が金沢北郊にあったことが明らかになった。尾根上に築かれたこれらの古墳群は古墳前・中期四～五世紀代にわたり、例外なく方墳から円墳へ移行するが、三〇メートル以上の墳丘は知られておらず、小坂町背後の丘陵で発掘された一号墳は径二五メートルを測る群中では最大級の円墳であったが、六〇～七〇メートルの大円墳や前方後円（方）墳に長大な石室をもうけ、幾内の大王から首長権承認のあかしとして授けられた中国鏡をはじめとする数々の宝器類を副葬している、他所のクニの大首長のものとはひらきがあり、金沢北郊では五世紀前半ごろ、十人川水系の地縁集団を率いた小坂一号墳の被葬者のような小首長が自立・競合する状態であった。

〔古代〕小坂郷

奈良末期に見える郷名。越前国加賀郷のうち。宝亀五（七四）年一二月二四日の調田庭継解の紙背の、年紀を欠く優婆塞貢進文に「越前国加賀郡小坂郷戸主道公人守戸口□」と見える（正倉院文書）。ただし「和名類聚抄」の加賀国加賀郡八郷のなかには現れない。現在の金沢市小坂町に比定される。郷域は金沢市街の北部、金腐川の河合、谷頭から中流域の沖積平地を中心とし、卯辰山の西麓平地に延びていたと考えられる。推定郷域内に小坂古墳群・御所八塚山古墳群・神谷内古墳群・東長江横穴群のほか、田中遺跡・乙丸遺跡などの集落跡が集中し、北接する加賀郡井家郷とともに、北加賀の国造勢力が律令期に越前国加賀郡（のちに加賀国加賀郡・石川郡となる）の郡領氏族となった道君（道公）の本拠地と目される。郡司としての執務を続けた越前国加賀郡の郡家（郡衙）の正確な位置は不明だが吉原町か三池町のあたりと言われている。（香我の譜）

三池を郡家の訓読み「ミヤケ」の転訛と考え、加賀郡の郡家や郡家神社があったとする（加賀志徴）、現在山王と通称される日吉社がある。

〔中世〕小坂荘

鎌倉期から見える荘園名。加賀国河北郡のうち。現在の金沢市疋田町を北限とし、西は浅野本町、東は清水町、南は橋場町付近までを含むと推測され、浅野川中流の北岸および金腐川中・上流域を荘域としていた。元久元

(一二〇四)年八月の九条兼実譲状に、九条家領として初見（九条家文書）。永仁七(一二九九)年三月五日の亀山法皇願文に「寺領事遠江国初倉荘・加賀国小坂荘・筑前国宗像荘」とあり、九条家から二条家に伝領されていた小坂荘が、押妨南禅寺に寄進されているが、まもなく正安二(一三〇〇)年七月二五日、伏見上皇院宣により二条家に返付された（以上南禅寺文書）。当時の二条家当主は兼基であり、地頭は海老名氏であった。すでに仁治三(一二四二)年に下地中分がなされていたが、海老名氏の蚕食は止まらず、嘉暦二(一三二七)年八月二五日の関東下知状では、興・浅野両保をめぐって領家雑掌信智と海老名忠国が争い、両保の一円支配を目指した海老名氏の敗訴に終った（海老名文書）。この海老名氏も南北朝期には地頭職を失い、建武四(一三三七)年四月二一日の足利尊氏袖判下文に「加賀国小坂荘内大志目村海老名五郎左衛門尉惟則跡」と見え、代わって仁木義有が同村の地頭職を入手した（仁木文書）。

室町期に入り、「康正二年造内裏段銭并国役引付」には、四貫九百廿文春日社領賀州小坂庄西方段銭」と見え、小坂荘の西半分が春日社領であり、興福寺大乗院門跡の管理下にあった。しかし二条家は春日社領の小坂荘西方の支配に介入し続け、明応四(一四九五)年知行は近来有名無実化していると大乗院尋尊が嘆じ、翌年には雑掌罷免運動を展開し、殺傷事件にまで発展した（尋尊大僧正記／大乗院寺社雑事記）。やがて天文四(一五三五)年一〇月一五日、二条家が当地の知行回復命令を本願寺証如に依頼して、断られており（加州本家領謂付日記／真宗教団開展史）、同六年五月一四日には、知行回復を意図する前関白二条尹房が自ら小坂荘に在荘している（天文日記）。なお南禅寺も天文五(一五三六)年閏一〇月六日瑞雲庵知行として「小坂一分方地頭職」を保持しており、知行申付を本願寺に依頼している（天文日記）。

〔近世〕小坂村

江戸期から明治二二(一八八九)年の村名。河北郡のうち。加賀藩領。寛文一〇年村御印の村高九六二石、免六ツ七歩、山役三九八匁・蝋役四匁。幕末の村高八二九石（加能七郡高免）。文化期の百姓軒数六四・人数二九〇、ほかに百姓下人数五四、頭振軒数三九・人数一〇九、米のほかに大麦・小麦・菜種・草花・藍・麻・蕎麦などを産し、農間に笠縫・布賃織が行われた（本岡三郎：続金沢近郊の変貌）。神社に草野比売神などを祀る野間神社があり、式内社と伝えられる。明治五(一八七二)年石川県に所属。同年小坂小学校が開設され、同二九(一八九六)年大字談議所に移転した。明治二二(一八八九)年小金村の大字となる。

〔近代〕小坂村

明治四〇(一九〇七)年から昭和一一(一九三六)年の河北郡の自治体名。小金・坂井・中口・金川の四ヶ村が合併して成立。合併四ヶ村の大字を継承し、三一大字を編成。村役場を大字小坂に設置。大正九(一九二〇)年の戸数一、一一一・人口六、四二〇。主産物に蓮根・慈姑・百合・菅笠・瓦など。明治三一(一八九八)年北陸本線が開通し、大字小坂に小坂信号所設置。

昭和一一年金沢市に編入。その際大字談議所は鳴和町、大字長屋は東長江町、大字山上は山の上町五丁目、大字金市新保は金市町、大字新保荒屋は荒屋町、大字大衆免は元町、大字浅野は浅野本町、大字浅野中島は京町、大字今は今昭町となり、残余の二二大字は金沢市の町名に継承された。

〔近代〕小坂

明治二二(一八八九)年から昭和一一(一九三六)年の大字名。はじめ小金村、明治四〇(一九〇七)年からは小坂村の大字。明治二二年小金村役場設置。同年の戸数一七三・人口七〇五。同三一(一八九八)年に北陸線が富山まで全線開通し、昭和二年に設置された小坂信号所は昭和四(一九二九)年、東金沢駅となる。明治四〇年小坂村役場設置。大正四(一九一五)年当地にあった鳳至郡剣地村光

琳寺の支坊跡に、真宗大谷派行雲寺が金沢市彦三から移ってきた（河北郡誌）。当地の表与兵衛は明治三二（一八九九）年の耕地整理法の公布に先行して明治一九（一八八六）年より田区改正を実施し、石川郡の高多久兵衛とともに石川県における耕地整理の先駆者となった。

農産物にレンコン・クワイなどがあり、レンコンはその表与兵衛により改良種の導入が企てられ、加賀レンコンと称され県外にも販路を広げた。昭和一〇（一九三五）年の戸数一五五・人口七〇七。同一一年金沢市の町名となる。

〔近代〕小坂町

昭和一一年から現在の金沢市の町名。一部が昭和四一（一九六六）年、大樋町・鳴和一丁目となる。同四五（一九七〇）年の世帯数八〇九・人口二、九三二。

以上、「石川県地名大辞典」による。上述のことがらをもとに年譜とした。

年譜

宝亀五（七七四）年
・優婆塞貢進文（正倉院文書）に「越前国加賀郷小坂郷の表記あり

弘仁一四（八二三）年
・越前国より分割して加賀国の創建
・野間神社、小坂庄の鎮守神として勅使派遣をうけ、翌年社殿造営

元久元（一二〇四）年
・九条家領として初見（九条家文書）

正安二（一三〇〇）年
・小坂荘が二条兼基家に返付された（七月二五日）

延慶元（一三〇八）年
・伝燈寺、後三條天皇の勅命で宝亀山麓に伽藍造営

建武二（一三三五）年
・二條大納言師基郷が加賀国司に任ぜられ、一五年間治政。居館が置かれたところが現在の「御所町」

建武四（一三三七）年
・地頭職仁木義有となる

暦応二（一三三九）年
・伝燈寺が光明天皇の勅願寺として造営される

長享二（一四八八）年
・富樫晴貞が一向一揆のため伝燈寺に逃れて自刃、堂宇も焼失

天文六（一五三七）年
・前関白二条尹房が小坂荘に在荘（五月一四日）

天正八（一五八〇）年
・小坂村の金沢城の正門前（尾坂門とも云い現大手町）の住民が大樋口に移転。上述の「資料」によれば、小坂荘は広大で現在の大手町、尾張町にまで及び、金沢城の大手先を小坂口または小坂下とも称した。佐久間盛政（一一年迄の三年余の在住）が尾山城を治めていた時に、城域の拡大のため移転させられた。（加賀古跡誌）

寛文元（一六六一）年
・十村御所村源兵衛、扶持人十村となり、一町六〇歩の扶持高となる

寛文六（一六六六）年
・京都の楽土師長左衛門が大樋村に移る

延宝四（一六七六）年
・前田綱紀（五代藩主）、蓮根の種子を尾張国からとりよせ二ノ丸庭園に移植、繁殖後小者嘉兵衛に与え、小坂で栽培

文政四（一八二一）年
・大樋村が金沢に編入となる

明治五（一八七二）年
・小坂村小学校が民家を借りて開校（現在の小金保育園の場所）。教師三名、三教室、児童百名。その後、談議所（現大樋町）児安神社裏、更に元金沢市役所支所に移り、大正一一（一九二〇）年現在地に新校舎落成

明治一七（一八八四）年
・小坂・御所に戸長役場が設置される（六月）

明治一九（一八八六）年
・表与兵衛（小坂村）、全国に先がけて耕地整理を実施

明治二二（一八八九）年
・小金村、坂井村、金川村、中口村が生まれ、小坂は小金村の大字となる（四月）
・市町村制の施行で金沢区が金沢市となる

明治二五(一八九二)年
・市街地を七区分制にもどし「七聯区」が復活。「廃藩置県」によって明治四(一八七一)年に原型は成立したが、再三区分は変更され、明治三〇(一八九七)年に廃止された
明治四〇(一九〇七)年
・小金、坂井、金川、中口の四ヶ村が合併して小坂村となり、小坂（現大樋町）に役場を置く（八月一〇日）
昭和二(一九二七)年
・北陸本線小坂信号所が設置され、同八年に東金沢駅として開業
昭和九(一九三四)年
・北端国道（現一五九号）、一、一六〇mが開通。春日町～大樋町の旧北国（陸）街道の西側に平行して建設され、国道八号となる。北端国道とか当地区間では軍馬通りとも称された
昭和一一(一九三六)年
・小坂村が金沢市に編入（四月一日）
昭和一五(一九四〇)年
・市内電車が東金沢駅まで着工（六月）
昭和二〇(一九四五)年
・市内で最も遅く鳴和～東金沢間に単線での電車が開通（五番、青電車）（一二月）
昭和二二(一九四七)年
・小坂中学校が小学校に併設される（四月）
昭和二三(一九四八)年
・小坂農業協同組合が発足。事務所を小坂町西二四（東金沢駅前）に置く（四月）
昭和二五(一九五〇)年
・鳴和に中学校校舎建設。小坂中学校は鳴和中学校と改称（四月）
昭和二七(一九五二)年
・小坂小学校の職員室に事務所を置いて小坂公民館が発足。初代館長坂井善雄氏、主事谷村邦子氏
昭和二八(一九五三)年
・小金保育園（百々小一理事長）が小坂町に開園。平成十四(二〇〇二)年に五〇年を迎える定員六〇名（三月一七日）
昭和三五(一九六〇)年
・山野外嗣夫さん（小坂町、日大生）ローマオリンピックに水泳高飛込で出場、快挙に大勢の地元有志で壮行会が行なわれた
昭和三六(一九六一)年
・金腐川の改修が始まる（六月）
昭和三七(一九六二)年
・御所町に実践第二高校が開校（四月）
昭和三八(一九六三)年
・東金沢～談議所都市計画路線の一部開通（九月）
昭和三九(一九六四)年
・東金沢駅前通りの拡幅により小金橋も四車線用に架設（三月）
・東金沢駅前の派出所が統廃合のため小坂中に移転、平成六(一九九四)年機構改革で東警察署小坂町交番となる（四月一日）
・六月二六日～七月四日に集中豪雨。堤防決壊一〇ヵ所、家屋の浸水、田地の冠水、橋梁流失。小坂小学校は二回の臨時休校
・小坂農業会館（現、金沢市農業協同組合小坂支店）を大樋町二―五に新築（六月）、平成一四（二〇〇二）年三月に小坂町西一〇五（東金沢駅前通り）に移転の予定
・山野外嗣夫さんが東京オリンピックに二度目の出場（一〇月）
昭和四〇(一九六五)年
・小坂地域に新住居表示が施行される（三月）
昭和四一(一九六六)年
・小坂小学校改築竣工なる
・市内電車　鳴和～東金沢間が最初に廃止される（一二月）、橋場～鳴和間も撤去（一二月）
・金腐川の新五ケ年継続改修工事着工（四月）
昭和四二(一九六七)年
・御所町に金沢経済大学が開学（四月）
昭和四五(一九七〇)年
・小坂地域の国勢調査結果　世帯数三、八六六戸、人口一四、九八六人
昭和四六(一九七一)年
・実践第二高校が星稜高校に名称を変更
昭和四七(一九七二)年
・東金沢保育園（村池久一理事長）が三池町に開園。定員一二〇名（四月一日）
昭和四八(一九七三)年
・昭和四一(一九六六)年着工の金沢バイパスが完成、国道八号になり北端国道は一五九号となる
・日本電気冶金工業金沢工場の閉鎖（三月）、

跡地六九、四二五㎡（約二一、〇〇〇坪）には順次公共施設や住宅が建設される
・三池橋の改修成る（三月）
昭和四九(一九七四)年
・公民館及び児童館の新築落成。名称を小坂社会文化センターとする。敷地一、二一五㎡（約三七〇坪）、延床面積五二三㎡（約一五八坪）、総工事費六、九四〇万円（一〇月二六日）
昭和五〇(一九七五)年
・かみやち保育園（島村隆理事長）が神谷内町に開園。定員一二〇名（四月一日）
昭和五三(一九七八)年
・石川県立武道館が小坂町西に開館。柔道場三面、剣道場三面、弓道棟を備え、八、五四〇㎡（約二、五九〇坪）の運動広場を有する（一〇月二二日）
昭和五四(一九七九)年
・御所町に星稜女子短期大学が開学
昭和五六(一九八一)年
・市立城北児童会館（児童センターと玉川図書館城北分館の併設）が小坂町西に開館（五月四日）
昭和六二(一九八七)年
・市営東金沢テニスコートが三池町の北陸線西側に一二面でオープン、駐車場八五台分、駐輪場四〇台分も設けられていたが、平成一三(二〇〇一)年東金沢駅舎移転のため五面に縮小された
・浅の川総合病院が春日町から小坂町中八三に新築移転。敷地一四、六九〇㎡、五〇〇床（六月）
昭和六三(一九八八)年
・北鳴中学校開校。鳴和中学校から別れ、小坂小と千坂小を通学区域（一部を除く）とし、小坂町北九五番地に誕生、市内で二三番目。二〇クラス、生徒数八六五人（四月）
平成元(一九八九)年
・都市計画道路疋田～御経塚（のち上荒屋）線に先駆けて上金川橋が架けられる（三月）
平成三(一九九一)年
・学校法人浅の川学園金沢看護専門学校（西東利男校長）が小坂町北六二に開校。職員一一名、生徒数九七名（四月一日）
平成五(一九九三)年
・金沢社会保険健康センターのオープン。市内で二つ目は全国では初めて（一月）
平成七(一九九五)年
・芳斉が手狭になったため、金沢公共職業安定所（通称ハローワーク）が鳴和一丁目のNTT資材倉庫跡に移転（竣工二月、業務開始三月）
・小坂南地区土地区画整理事業が完成。平成二年に開始、総面積七・五ha、総事業費一四億円。白蓮公園も作られた（五月）
・都市計画道路　神谷内～疋田（神谷内区間）線の供用開始。金沢外環状道路　山側幹線の接続道路として残されていた区間が完成（一二月）
平成八(一九九六)年
・都市計画道路　小坂～御所線が開通（七月）
平成九(一九九七)年
・都市計画道路　春日町～東長江（御所区間）線の完成。金沢外環状道路への接続道路として、さらに慢性的な交通渋滞をきたしている県道清水～小坂線のバイパスとして、重要な路線と位置づけられている（五月）
平成一二(二〇〇〇)年
・三池・高柳地区土地区画整理事業が五ケ年計画で始まる
・古　章子さん（神宮寺みどり町会、金沢学院大）がトランポリン競技でシドニーオリンピックに出場、六位となる
平成一三(二〇〇一)年
・小坂交番の管轄区域に高柳町北親会（従来は千木町交番）と、神宮寺二・三丁目（従来は森山交番）が編入された
・東金沢駅舎の移転工事が始まる。橋上駅で東西口に駅前広場が計画されている。一四(二〇〇二)年秋完成予定
・日本冶金跡地の宅地（二五〇余戸）造成工事の開始。スーパーマーケット、ドラッグストアも建設の予定

小坂公民館の歩み

一、公民館の創設とその背景

終戦を機に日本は旧体制を打破して、新しく自由で平和な民主主義社会の構築を目ざした。新憲法の下で教育基本法（昭22・3・31）第七条社会教育に公民館・明記）続いて社会教育法（昭24・6・10）(注1) が公布された。これを受けて金沢市公民館設置条例（昭24・9・8）が制定され、小学校下（校区）毎に地区公民館の設置促進がなされることとなった。これに先立ち金沢市では昭和二四年六月「各校下毎に公民教育委員会を組織する」規則を設け公布した。小坂校下でも各町内会から委員が委嘱され小坂校下公民教育委員会を組織して活動が始められた。金沢市での公民館の設置は昭和二二年(注2) に始まり、この時すでに数館が開設されていた。

戦後の混乱期から少しずつ落ち着きを取り戻した昭和二七年、公民館未設置の三〇校区に金沢方式(注3) による地区公民館が設置された。(注4)

（注1）社会教育法　第五章　公民館（第二〇条～第四二条）一部抜粋

第二〇条（目的）

公民館は市町村その他一定区域内の住民のために、実際生活に即する教育・学術及び文化に関する各種の事業を行い、もって住民の教養の向上、健康の増進、情操の純化を図り、生活文化の振興、社会福祉の増進に寄与することを目的とする

第二二条（公民館の事業）

公民館は第二〇条の目的達成のために、おおむね左の事業を行う。（以下省略）

一、青年学級を実施すること

二、定期講座を開設すること

三、討論会、講習会、講演会、実習会、展示会等を開催すること

四、図書、記録、模型、資料等を備え、その利用を図ること

五、体育、レクリエーション等に関する集会を開催すること

六、各種団体、機関等の連絡を図ること

七、その施設を住民の集会その他の公共的利用に供すること

（注2）昭21・7文部次官通牒「公民館の設置運営について」が出されてから、公民館を拠点とした新しい社会づくり運動が全国的に進められた。金沢市では昭22・8・9の森山公民館の開設をはじめに昭24の市条例公布までに、中央公民館を含めて六館が設置された。

（注3）金沢方式とは、金沢市が公民館を設置し、管理運営していく上で採用する全国でも特色ある方式である

①ほぼ小学校区毎に公民館を設置

②地域住民の自発的参加による事業運営

③公民館経費は、市からの委託料と一定割合の地元負担とでまかなわれる（市七五％地元二五％）

④役職員の選任は地区に委ねる

この方式は昭和二七年に始まり今日まで続いている

（注4）昭和二七年には地区公民館が一挙に三八館に増えた。

サンフランシスコ条約（昭27年）が締結され、独立国家として歩み始めた年で、それまで禁止されていた町内会が復活された。幸いにも金沢は戦災を免れ、戦後も町会組織が温存されていたので、こうした地域住民の潜在的校下意識が「全市の校下に公民館を設置する」という施策に反映されたものと思われる。

二、小坂公民館の発足と諸活動

昭和二七年四月小坂公民館は小坂小学校内に事務所を設けて発足し、初代館長に坂井善雄氏が就任した。七事業部会（総務・教養・図書・産業・厚生・生活改善・視聴覚教育）を設置し、総予算一七七、〇〇〇円でスタートした。年間行事として、青年学級・婦人学級の開設、社会体育大会、敬老会、成人式、生産物品評会、青年産業研究発表会、野球大会、スクエアダンス、そして館報の発行（年二回）等が挙げられる。

当時の公民館の多くは学校等に併設されていて独立専用の施設を有するものは少なかった。行事の多くは館外で行なわれていたが、その活動は地域の振興に大きな役割を果たした。

○青年学級の開設

公民館活動の特色として、成人教育、中でも青年教育に大きな力が注がれた。将来の日本を背負う青少年育成の見地から重要視されたものと思われる。

小坂青年学級は昭和二七年に開設された。昭和三〇年代に入り、内容がさらに充実されて学級活動は活発となり、公民館の大きな一事業として定着していった。こうした活動は地域住民に新しく生まれた公民館の存在意義を理解させる上で大きな働きをしたと言える。

因みに青年学級規則（昭29・4）には次のように規定されている。

一、実施機関　公民館
二、実施時数　年間おおむね一五〇時間
三、学習内容　職業、家事、一般教養の三科目
四、学級主事　公民館主事もしくは学校教職員

さらに、努力目標として三つの柱が挙げられている。

一、近代民主主義の発生並びに発展の歴史を学ばせる
二、国際事情の理解を深める
三、人間は共同で社会生活を営むものであることを認識せしめ公共心と責任感を養う

○青年産業研究運動（青産研）

青年団を中心とした「一人一研究運動」は当時進められていた生産運動に大きく貢献した。研究発表会、生産物品評会、展示即売会等の開催は、直接生活と結び付き、その活動は地域社会の振興と発展につながるものであった。当時（昭和二七年）の記録では、小坂地区に五グループ、会員六〇名、経費四八、〇〇〇円、蓮根病菌研究、水稲蚤研究とある。

その後の社会の大きな変貌（高校進学率増、高度経済成長、若者の都市集中化等）は青年達の意識を変え、活動の内容までも変化させた。昭和三五年頃にはこの運動は姿を消し、公民館を活動の場とした青年達の活動は青年学級を中心としたものになっていった。

○婦人活動

公民館活動を支える重要な団体として、青年団と共に婦人団体を挙げることができる。

婦人指導の努力目標（教育要覧、昭29）に

① 政治的教養の向上を図る
② 自主性の確立を図る
③ 生活改善運動の促進

の三つが挙げられているが、この中で当時最も力を入れられたのが③生活改善運動であった。

公民館を中心に、調査、資料作り、研修及び実践が盛んに行なわれた。事業面では公民館祭の共催（昭二八年～）洗濯講習会（昭二九年）料理講習会（昭三〇年～）映画鑑賞会、ダンス講習会（昭三二年）等が挙げられる。又盆踊りには大きく貢献した。

小坂婦人学級は青年学級と同じく昭和二七年から開設された。その後、各種の学級や講座が開設されて、生活改善運動は衰微し、当初の目標に沿った婦人教育としての婦人学級が定着した様に思われる。

○視聴覚事業（映写会）

戦後～昭和三〇年代、視聴覚教育活動の大きな部分を担ったのは公民館であった。文化映画の巡回、貸出は公民館活動の大きな柱でもあった。

映写会は当初ナトコ映画(注5)中心で宣伝性の強いものであったが、娯楽の少い当時としては興味深く住民に希望を与えるものであった。映写会はその後、内容が充実されると共に参加人数が急増した。昭和二九年頃には、全市内で年間の参加数が一〇万人を超えた。

しかし映写会は、その後各家庭にテレビが普及し始めて急速にその参加数が減少した。昭和四〇年代に入ると各種の機器開発が進み視聴覚事業の内容は大きく変った。

（注5）GHQが我が国の民主化を進めるために視聴覚教育を重視。アメリカのナトコ社で制作。映写機器一式が貸与された。

三、昭和四〇年代（成長期）

昭和三〇年代末から公民館を中心とした郷土振興運動・健民運動（昭三九年から県の提唱で組織的に展開）がはじまり、地域の特色を生かした実践活動が進められた。

昭和四一年、坂井善雄館長が第七代市公連

会長に就任し、市公連組織を強化して広域対象事業の実施、公民館活動の多角化推進に努力された。またこの時期公民館活動費が増額され公民館は成長期を迎えた。昭和四二年には県健民運動実践公民館の指定を受け、郷土の美化運動「川をきれいに、団地に花壇を」に取り組んだ。この年、青年学級・婦人学級・社会体育大会・敬老会・成人式・町対抗球技大会・少年球技大会の定例行事を充実させると共に、園芸講座の開設・生花展・巡回映画会を実施した。

四〇年代後半、活動内容の多様化に伴い、公民館は学習センターとともに地域のコミュニティセンターとしての役割を果たす機関として地域住民から寄せられる期待も大きくなった。機能の充実、現代社会の要請に応える新しい公民館のあり方、併せて独立公民館の必要性や建設が検討されるようになった。

この間、公民館の組織面では、事業部会が一部名称が変わり、総務・一般教養・社会体育・交通安全・老人福祉・青少年育成・婦人教養の七部となり、運審委員が町会長を含めた各種団体長に編成替えされた。（昭四五年）

行事では、青年学級・婦人学級・高齢者学級・家庭教育学級・剣道教室・交通安全教室・歌唱教室・生花教室・講演会・親子バレー・水泳大会・写生大会・囲碁麻雀大会等多くの行事が企画されるようになった。

四、独立公民館の建設

待望久しかった小坂公民館の建設は、念願の建設用地の取得から始まった。

昭和四七年九月「公民館敷地取得の趣意書」が配布され、翌昭和四八年三月一五日、公民館建設についての会合が開かれた（公民館建設委員会・準備会）。同年、一〇月二四日に建設委員会臨時総会が開催され、会長に二木由郎（小坂公民館長）、副会長に棒田二作（連合町会長）住田節子（婦人会長）の各氏

公民館敷地取得の趣意書

校下の皆様には、いよいよお健やかにお過しの程大慶に存じあげます。と共に、公民館の運営につきましては何かと絶大なご協力とご指導ご鞭撻を戴きますことを有難く深く感謝いたしております。

つきましては、金沢市には、各小学校下に一般型の公民館が設置され、全市約五〇館の公民館があります。設置当初は小学校又はその他の機関内に併設されていましたが、近年独立公民館が建設され、現在では併設館はあと数館を残えるのみであります。

当小坂公民館も創設以来すでに二十数年を経過いたしましたが、未だに独立館を設けるに到りませず小学校併設の憾であります。申すまでもなく公民館が地域融和の機関として、校下発展の講場として、又なたでも気軽で自由に利用できる施設としての憩いの場、社交の会場として又、教養を高める研修場としての多様にして重要な使命にかんがみ、遅きに失することを痛感しておりました次第であります。

幸い、独立公民館設置については、かねてから、校下各階層の方々から度々ご要望される建設のご要望を寄せられ有難くご配慮を戴きましたが、敷地取得難のため今日まで実現を待ずしておりましたところ、数年の敷地にさきたまたま金岡川改修の廃川敷（県有地）の払下げを得られる見通しとなりましたので、先般来、公民館運営審議委員会、町会連合会、町会長会議等におはかりし、ご了解を得ましたので、重ねて校下挙げてのご協賛ご協力を仰ぎたくご懇願を申しあげます。

この敷地はご存知の方も多いと思いますが、三角地上民約一五〇米の奇形にて約六八坪のナマコ型の土地で、払下げ後には隣地地主各位のご協力により、方形地に区画整理するご内諾を得ております。

当初無償払下げを形がったのですが改修用地が有償であるため、払下げ基準もあり時価の半額程度で、時期は十月中旬ということでありましたが、地元出身の県議、市議、金沢市のご和賀等のお骨折り（買収価格程度）の有償となる見込で、地代、区画整理費等の基金概算は別紙のとおりといたしました。

校下各町会及び各様には何かと出費多端の折柄誠に申し兼ねますが十二月二十五日を期限として、一戸当り一、五〇〇円見当のご協力を懇願申しあげる次第でございます。

尚公民館敷地は税務、所有権の継承関係もありますので、金沢市採納といたします。建設については昭和五十年度を目標として校下各位のご意見を拝聴の上構想をまとめたいと存じます。建設資金は金沢市二分の一、地元二分の一の例がありまして毎年計画的に建設基金の積立を図りたいと考えております。

何分にも土地の取得が先決の問題にて、何卒よろしくご了承の上ご協力願いますよう伏してお願い申しあげます。

昭和四十七年九月

敬具

金沢市小坂公民館長　二木由郎

小坂公民館建設趣意書

校下の皆様にはいよいよご健勝のこと大慶に存じます。日頃より公民館の運営につきましては多大のご支援とご指導を賜り厚くお礼申し上げます。

さて、小坂公民館の建設は昭和二七年公民館開設以来の宿願でありましたが、建設用地の取得難が隘路となり、遂に開設公民館として今日に至りました。幸いご各皆様のご熱意と県・市のご配慮により金腐川沿いに用地を求めることができました。

念願の敷地が取得できましたので早速、公民館建設委員会を発足させ協議の結果、現下の物価事情なかんずく建設費の異状な急騰の折から速急に建設を促進することになりました。

ご承知の通り公民館は地域住民の生涯教育の場としての役割を持ち、青少年から老人層まで巾広い学習の場として、また、みなさんが集い、談論し、読書して、お互いを尊重し交友を深める憩いの場としての集合の場であることはもとよりですが、いま建設する公民館の構想は、鉄筋二階建で延面積約五百五十坪メートル（約百六十九坪、将来三階増可能）児童館を併設し、遊戯室・図書室・青少年談話室を備えて学童の校外育成、青少年の社会交流に資すると共に、厨房・談話室・集会室・舞台付集会室を設けて、町会連合会、婦人会、老人会、地区社会福祉協議会、交通安全対策協議会、少年連盟、防犯委員会、消防後援会、小学校ＰＴＡ等校下の諸団体を収容して地域連帯意識を深めると共に、その機能は住民の生活要求に応えるコミュニティー・センターとして地域社会共同の問題処理の協議の場として高い必要性を持つものとしたいのであります。

建設に関しまして総費用は建物・電気・水道等設費用を含めて四千三百五十万円予定しており、その内、国・県・市の助成は、公民館助成、児童館助成、青少年談話室助成を合わせて計二千三百五十万円程を期待し、残り二千万円を地元負担金として地域の皆様より浄財のご寄付をいただきたいと存じております。

募金の期間は四十九年一月から五十一年十二月までの三ケ年として分納して頂きたいと存じますが第一年度は事業工資金の関係で、地元負担金二千万円の半額一千万円の醵出を頂きたいと存じます。

各町の皆様方のご実情によりご協力をお願い申し上げます。

尚この計画は建築費坪当単価二十五万円の予測であります。何かとご支障もございましようが校下最初で最大の事業に絶大なご支援、ご協力を賜りますようお願い申し上げます。

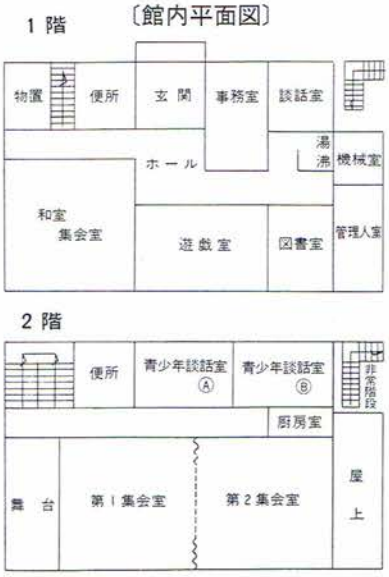
昭和四十九年一月

発起人

小坂公民館長　二木由郎
県議会議員　島隆
市議会議員　村久
市議会議員　神村一男
小坂校下連合町会長　棒田利二作
小坂校下婦人会長　住田節子
小坂校下老人クラブ会長　林
小坂地区社会福祉協議会会長　竹
小坂校下交通安全対策協議会　林
小坂消防分団長　田中
小坂消防後援会長　加古
小坂少年連盟　多門千秋
小坂小学校ＰＴＡ会長　山田初雄

（順序不同）

〔館内平面図〕



を選出し、会館建設のための募金（約二千万円）を昭和四九年三月末～同五一年一二月まで四期に分けて集金することを決議、昭和四九年一月「小坂公民館建設趣意書」を作成配布し、校下の最初で最大の事業として、各町会各位に支援、協力を願うこととなった。

◇建設の概要

名　　称　小坂社会文化センター
所　在　地　金沢市小坂町北三一二番地
設置体系　金沢市小坂公民館
　　金沢市立小坂児童館
　　総合館として地域諸団体を収容
構　　造　鉄筋コンクリート二階建
　　全館暖房、一部冷房
面　　積　敷地面積　一、二一五・七七五㎡
　　建築面積　二七八・六七〇㎡
　　延床面積　五二三㎡
　　（公民館部分　三三八㎡
　　児童館部分　一八五㎡）
建　設　費　五、九五〇万円
　　本体工事費　四、六八二万円
　　付帯工事費　一、二六八万円
土地造成費　七八〇万円
備品費・他　二一〇万円
総工事費　六、九四〇万円
着　　工　昭和四九年五月一日
完　　成　昭和四九年一一月二三日
設計監理　金沢市土木部営繕課
　　高柳設計事務所
施　　工　共栄建設株式会社

小坂文化センター（公民館・児童館）の新築落成の記念式典は、昭和四九年一二月二六日真新しいセンター二階集会室で、岡良一金沢市長をはじめ来賓多数臨席のもと盛大に挙行された。

明けて昭和五〇年移転作業を終え、宿願の独立公民館として、夢と期待に満ちてスタートすることとなった。かくして、地域住民の生涯学習、コミュニティ活動の場として新たな拠点が誕生した。

○補足（その後の整備工事等）

昭和五二年　児童館三階遊戯室増築工事
〃　五五年　老人憩いの家増築
〃　五八年　駐車場舗装
〃　六二年　公民館全体改修
平成　三年　浄化槽ブロアー取替
〃　四年　煙感知器取替、竹垣補修
〃　五年　事務室、談話室改装
〃　六年　ホール机新調　運動用具整備
〃　七年　ホール椅子新調
〃　八年　火災報知機取替
〃　九年　屋上防水工事、和室座卓新調
　　男子便所自動ハイタンク改修
〃　一〇年　給水管改修
〃　一一年　誘導灯取替
〃　一二年　空調機入替
〃　一三年　周囲竹垣取替

五、昭和五〇年代

小坂社会文化センターの新築・落成に伴い公民館は、小坂小学校から現在地に移転した。これを機に、公民館活動の更なる充実発展を期して、組織・運営・規則等の改変、整備が進められた。結果、事務局に事務員を配し、主事の補佐と事務の効率化を図る。各事業部会は七部会から五部会（総務・文化・青少年育成・社会体育・婦人教養）に統廃合された。

（注）社会体育部→体育部（昭五一年）
　　青少年育成部→青年部と少年部に（昭五二年）
　　高齢者部会設置（昭五七年～平二年）
　　婦人教養部→婦人部→女性部（平六年）

また新たにセンターの使用規則・使用料金等が制定された。年間行事面では、従来の公民館祭を更に充実させて小坂校下文化祭とし、新たに中学生を対象とした立志の集い、町会対抗の駅伝競走等が加わった。又指定事業や委託事業にも積極的に取り組み、せゝらぎ学級（県）高齢者学級（市）親と子の公民館活動（国）や青年セミナー（委託）の活動記録が残されている。更に各種団体の活動の充実、発展が図られ、これら外郭団体の協力と相まって公民館活動の内容が一段と充実したものとなった。

○当時の主な活動

高齢者サロン（高齢者学級）、ヤングサロン、婦人学級、健全少年まちづくり事業、盆踊り、文化祭、敬老会、成人式、立志の集い、立山登山、社会体育大会、ソフトボール大会、バレーボール大会、卓球大会、子供球技大会、囲碁・麻雀大会、駅伝競走、ハイキング、ボウリング大会等

教室では、剣道、珠算、習字、版画、ダンス、民謡、詩吟、料理、三味線、読書、親子対話、交通安全等をあげることができる。

また、校下の歴史探訪や文化遺産の掘り起しに関する取り組みや、親と子の読書・工作・スポーツ等の諸活動が企画・運営された。この時期八ミリ映画で、小坂特産「松花」のできるまで（昭五一年）れんこんと小坂（昭五三年）が制作された。作品は金沢市視聴覚教育作品発表会で上映され、好評を博している。

予算面では市の交付金が増額され、予算総額が急増した。昭和五一年度の総予算は四三二万九千円（内市交付金は公民館二〇二万八千円、児童館八四万一千円）となった。

各種団体では、小坂校下少年連盟の再発足（昭五〇年）小坂校下団体連絡協議会・会則制定（昭五〇年）小坂校下連合青年団再結成（昭五二年）小坂児童合唱団結成（昭五四年）、時を同じくして小坂少年連盟より、ピアノ一基（四二万円）とトランシーバー一組の寄贈がなされ

昭和51年度

○石川県優良公民館で表彰される
○成人式実施状況

期　日	昭和52年1月15日 13：00～15：00
会　場	小坂公民館
	該当者　111名 （男子65名　女子46名）
出席者	61名 （男子24名　女子37名）
出席率	55% （男子37%　女子80%）
内　容	式典、懇話会
記念品	アルバム
経　費	146,020円

開館30周年記念（メモ）

昭和57年度

○記念盆踊り大会（小坂小グラウンド）
　8月21、22日　18：00～22：00
　うちわ、タオルを作製、配布
○社会体育大会（小坂小グランド）
　10月3日　9：00～16：00
○文化祭（小坂公民館）
　11月6日
　・余技作品展
　　13：00～17：00
　・ダンスパーテー
　　18：00～21：00
　11月7日
　・余技作品展
　　10：00～16：00
　・各種団体合同表彰式
　・記念講演会
　・記念植樹
　・煎茶席
　・児童合唱会
　・カラオケ大会
　・マジックショー
　・即売会（野菜等）
　・模擬店

公民館だより	月末発行	2,800部
館報「こさか」	8月25日発行	3,000部
盆踊り大会	ポスター	50部
社会体育大会	ポスター	50部
	プログラム	3,000部
文化祭	ポスター	50部
	ちらし	2,800部

た。

昭和五三年度には児童館三階遊戯室の増築が行なわれた。金沢市の人口が四〇万人を突破・兼六園有料化（昭五一年）、市民憲章の制定（昭54・6・13）・市立図書館開館（昭五四年）等話題の多い期間であった。

昭和五〇年代後半に入り、老人憩いの家が増築（昭五五年）され、昭和五六年には親子クラブの発足、昭和五七年四月から児童館での学童保育が新しく開設される等センターの施設利用が急増し、公民館の存在価値が一段と高められた。一方スポーツ面で、長らく続いた剣道教室が諸般の事情により昭和五六年九月で中止（昭四三年より継続）となり一抹の寂しさが残った。

昭和五五年度の公民館利用者数は八〇四回で二五、一一四人（公民館主催事業三九一回一二、五一〇人、貸館事業四一三回一二、六〇四人）であった。

この期間新しい町会の発足や町会合併が行なわれて、昭和五七年五月末では校下の町会数一八、各種団体数一一となり運営審議委員会は、三〇名を超える委員数となった。

昭和五七年は開館三〇周年にあたり、各種行事が記念事業として盛大に行なわれた。広報活動、青少年健全育成は市の指定事業、バレーボール振興は市委託事業とし、記念盆踊り大会、文化祭、体育レクレーション、成人教育、高齢者教育、婦人教育、成人式等は公民館の自主事業として予算総額八、一六九、六一三円を計上し、多数の参加を期して実施された。

因みに、主な開館三〇周年記念事業（対象校下民一般）の延参加数は、盆踊り大会四、五〇〇人、社会体育大会四、四〇〇人、文化祭三、六九四人と報告されている。

六、昭和六〇年代

小坂公民館創立三五周年記念（昭62・4・1）を迎えるに当って、臨時運営審議委員会（昭61・1・20）が開催され記念事業に関する審議がなされた。結果、

一、全体改修工事を行う

予算　一、六五〇万円、工事期間　昭和六二年四月～五月、改装積立特別会計

二、各部事業を記念行事として、内容の充実を図る

文化祭、成人式、敬老会、各種教養講座、社会体育大会、ソフトボール大会、綱引き大会、立山登山、麻雀大会、子供球技大会、親子ボウリング大会、講演会、他

三、その他

電話機の交換、等

また、公民館の休館日は全館月曜日に統一され昭和六一年度より実施されることになった。

○小坂文春

昭和六一年七月一八日、地域の文化活動振興に道を開く事業活動として「小坂文春」の創刊号が発行された。小坂町の歴史、文化遺産の紹介、みんなのページ、特別企画として「のびゆく小坂その周辺」などが掲載されている。

○昭和から平成へ

昭和六四年一月、昭和から平成と改元され同年四月一日、金沢市制百周年の記念太鼓・旗行列が行なわれ協賛した。

七、平成年代（社会教育から生涯学習へ）

平成二年度には婦人学級が国庫補助事業に取り上げられ、また三世代間交流事業として「小坂さわやかフェスタ」がスタートした。それに伴い活動内容がより地域性を帯びたものとなり更に活発なものになった。

翌三年八月には城北ブロックスポーツフェスティバルが企画・開催された（小坂公民館担当）。同年九月には第四六回国民体育大会夏季大会、一〇月には同秋季大会が石川県で開催され、野点席の設営、獅子頭展等で協賛した。

平成六年婦人部が女性部と改称、運審委員が各種団体と町会連合会から各々代表五名選出に変更され、委員数が二〇名以下となった。

同年は国際家族年にあたり、公民館としての各種行事にはその主旨を生かした取り組みがなされた。又関連行事については、広く校下一般に呼びかけ、その参加を勧めた。

この間社会教育から生涯教育へと時代は変遷し、生涯学習で又学校週五日制で公民館に寄せられる期待は次第に高まって行った。こうした中で長らく続いた所管の市社会教育課が生涯学習課に改備された（平4・4・1付）

○まち推進事業

平成五年度から「まち推進事業」の取り組みが始まった。初年度は、小坂さわやか夏祭りと校下史跡めぐり、平成六年度はグランドゴルフ大会、親子グランドゴルフ大会を企画（両大会は以後毎年開催されている）、平成八年度は史跡めぐりと文化祭&特産品祭り、平成九年度、一〇年度は地域めぐりと文化祭&特産品祭り、平成一一年度には八塚山探訪と小坂さわやかフェスタ、平成一二年度は華麗なる獅子舞の競演と世代間交流グランドゴルフ大会が実施された。

なお、昭和五八年に始まった「小坂っ子夏祭り」は平成五年度より対象を広げ、三世代間交流事業として内容を充実させ「小坂さわやか夏祭り」と改称し、広く校下一般参加のイベントとして今日も親しまれている。（注、平成一一年度より小坂少年連盟の盆踊り大会が少連の夏祭りとして復活された）

○自主防災会の設立

阪神淡路大震災（平7・1・17発生）以来防災意識が高まり、平成八年度に校下自主防災会が結成された。平成一〇年八月二三日小坂地区市民震災大訓練が北鳴中学校グラウンドで実施され、以後毎年、自主防災訓練が実施されている。

○施設の整備と制度の改変

平成年代に入り会館の建物や設備に老朽化が見られその対応が求められるようになった。その補修工事や整備が年次をおって計画的に進められて（前記）今日に至っているが、昨今の地震対策で建物の耐震性が問われようとしている。

職員に関する規則・制度の面でも改変が行なわれた。新しい公民館の就業規則（変形週四〇時間制）の実施（平五年）補助事務員の制度改正（平六年）互助会制度の変更（平七年）等が挙げられる。

○新世紀に向けて

創立以来半世紀、公民館を取りまく社会環境は大きく変貌した。

かつて緑の広がっていた田園や山麓の地が今は開発が進み、道路網の整備・拡充、宅地造成、企業（工場等）跡地の団地化、公共施設の整備、加えて家屋や店舗の新・増改築による町並みの一新等まさに今昔の感がする。平成一三年は厳しい不況下での年明けとなったが、北陸新幹線工事の進捗に伴い、東金沢駅舎の移築とその周辺の整備、三池高柳地区の土地区画整理事業、日本冶金工場跡地の団地化など近辺の様相は、さらに大きく変わろうとしている。

生涯学習の時代を迎えた今、小坂公民館は地域性を生かしながら、地場産業を大切にし、貴重な歴史・文化遺産の保存・伝承に一翼を担い「明るく住み良い、夢ふくらむ小坂」を目指して地域の住民と共に日々活動を続けている。

今後更に身近かな地域情報の発信基地として、また二一世紀に生きる地域住民のニーズに的確に応える、充実した公民館活動を求めて歩み続けることだろう。

創立五〇周年の節目にあたって、公民館の将来あるべき姿を、今一度模索し更なる発展を期待したい。

あの日あの時 ― 思い出のアルバム

成人式

最初は小坂小学校の講堂で開催された成人式は広い講堂の中、ストーブで暖を取りながら「権利と義務」をしっかりと考えたものである。

昭和五〇年の成人式は、新築なった公民館の二階ホールで開催され、岡良一金沢市長自身が来賓として出席、祝詞を頂戴した。ベビーブームの年代に入って、参加人数が増加し続け、公民館ホールでは手狭になり、昭和六二年からはホテルの宴会場を利用せざるを得なくなり都ホテルを使用することになった。

公民館ホールからホテルの宴会場へ移ることにより、式典後の懇親会が盛大に行なわれるようになった。

この頃には他の公民館もホテルで成人式を行うようになり、金沢駅周辺は成人式ラッシュとなり、都ホテルでも時間をずらして他の公民館が行い、同じ時間帯にセントラルホテルやホリデイ・インでも開催されるといった塩梅であった。

金沢駅前に全日空（ANA）と日航（JAL）のホテルが相次いでオープンし、平成九年からは、新築間もないホテル日航金沢に会場を変更した。

式典運営は、新成人の代表によって進められ、緊張感漂う中、厳粛に進行し、臨席いただいた来賓や恩師の方々から素晴しい式典であると絶賛を博している。

文化祭

公民館の目的達成の為の各種学習の発表の場や、公民館を中心に活動する各種団体が協力し合って表彰を行う機会として重要な行事である。

公民館を地域の方に知ってもらう良い機会と考え、前夜祭でダンスパーティやカラオケ大会を開いたり、講演会を催したり、時には集会場のある町会に出向いての出前講演会をしたこともある。

館内では各種団体の合同表彰式の後、学習発表会・各種教室や児童館利用の児童達の力作の展示や不用品即売が行なわれ、一階から三階まで楽しく見てまわることが出来、人波が途切れることがない。

老人憩の家では山本弘風先生による皇風煎茶礼式の煎茶席

が設けられており、ゆっくりとしたひとときを楽しんでいる。

館前には数多くのテントが張られ、色々の店がオープンしている。地元産のレンコンは一番の人気商品で用意されたものがまたたく間に買い求められ、毎回品切が続いている。又、餅つきが始まると周囲には二重三重の輪が出来、つきたてのお餅を買う人の長い列が出来、あっという間に完売してしまう。

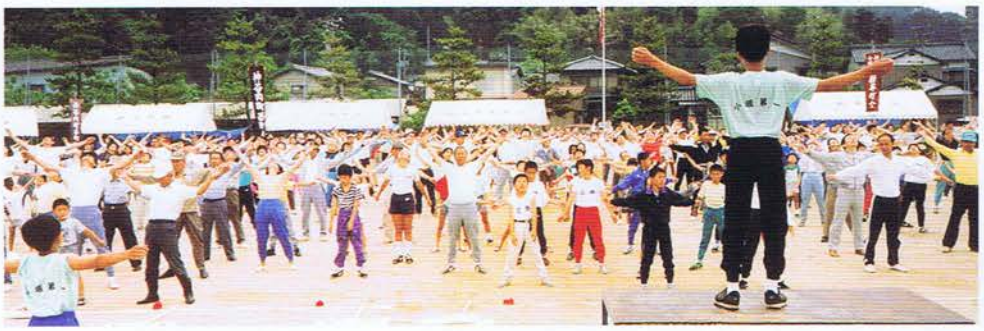
テントの一つには「希望が丘」も出店しており、健常者と交流をしながら、園生が作った野菜や作品を直売し、互いに理解を深めて心のバリアフリーを実践している。

社会体育大会

公民館発足時から続けられている行事の一つである。小学校に事務所があったこともあり、小学校のグラウンドを会場に行なわれている社会体育大会は「社体」の愛称で親しまれ、小坂校下住民がスポーツを通じて、親睦と団結を感じる場である。

最初の頃は、小学校の運動会を午前中に行い、午後からは運動会を応援に来ていた大人達や小学生も参加しての「社体」を行っていたのであるが、世帯数の増加に伴い運動会とは別の日に行うようになったが、会場はそのままである。（小学校のグラウンドが改修等の為使用出来ない時に限り、星稜高校や北鳴中学校に変更された）

思い出のアルバム
あの日あの時



競技内容も剣道教室の野試合や棒たおし等当時の世相を思わせるものから、次第に聖火競走や大縄とび等、時代を反映した種目が取り入れられるようになり、近年では高齢者の「鶴の恩がえし」学童と父母の「親子作業競走」一般の「資源回収レース」小学生は学年別に体力に応じた種目等、誰にも参加しやすい内容と、町会対抗種目「八人九脚・仲良し競走」「玉入れ」等町会住民の協力を必要とする内容を多く取り入れ、一日を幼児から高齢の方までが楽しみながら、団結の心を養えるものになっている。

スポーツ大会

地域の人達の健康推進・体力増強を目ざし各種のスポーツ大会が開催され、参加者は心地良い汗を流しながら、健康の有難さを肝に命じ、親睦を図っている。

バレーボールは九人制で始められたが、市が推奨するニュースポーツとして、やわらかく大きいボールを使用するソフトバレーボールとなった。打球のスピードもゆっくりで、やわらかいボールを使うので突き指の心配をせず参加出来るようになり、数多くの愛好者を作り出している。

卓球もバレーボール同様、ニュースポーツを取り入れ、ボールサイズが一まわり大きいものを使用する「ラージボール卓球」を採用しており、

少し練習すれば、経験者とも打ち合えるようになり、参加者の底辺拡大につながっている。

グラウンドゴルフは平成五年から、町会対抗の一つとして取り入れられたことにより、またたく間に各町会に浸透した。用具がスティックとボールでルールも簡単、コースは芝で手入れがゆきとどいていて、同行者と話をしながらプレーが出来、一廻りすると二時間位の軽い運動になるなど良いことづくめでファンが急増した。

町会対抗試合の選手選びに、各町会の担当者はうれしい悲鳴を上げている人気の種目として定着している。

思い出のアルバム

あの日あの時

地域めぐり

小坂小学校ＰＴＡとタイアップした行事で、小坂に住みながら、地元の歴史的建造物や由来、それにまつわる言い伝え等を知らない人、知らない事が沢山あると思われ、せめて地元のことは知っておいて欲しいとの願いがＰＴＡと一つになり、始められた。小坂校下を大きく四つに分け、毎年一つの地域を歩いてめぐり、地域の方に説明して頂き、理解を深めて行くことの繰り返しで、地元への愛着を深め、地域愛を高めている。

特に平成十三年度は、変わりゆく東金沢・三池地区として、高架化工事で消えゆく東金沢駅舎と、区画整理事業の進行で消えてゆくレンコン田を中心に見て廻り、時の流れと共に変わりゆく郷土を心に鮮明に写しとることが出来た。

思い出のアルバム
あの日あの時

三世代間交流事業

老いも若きも参加出来る行事として、公民館を全館使って始められたのが、「小坂さわやかフェスタ」である。当初は夏休みの平日昼間行なわれていたのだが、平成五年に少連が行っていた「小坂っ子夏まつり」と同じ夏休み期間中の行事であること、子供も対象とする行事であること等、目的が重複する行事であるので、一つにまとめて行うこととなり「小坂さわやか夏まつり」と名称を改め、少連との共催行事として親しまれてきた。

平成十一年、夏休み中に盆踊りをとの声が高まり、少連主催で盆踊りをすることになり、公民館では「小坂さわやかフェスタ」を夏休み前に行うことになった。

平成十二年度からは、小坂小学校グラウンドを会場に、「さわやかグラウンドゴルフ大会」を開催し、高齢者、児童及び保護者が一つのチームとして一緒にプレーをしながら、交流し理解を深めることが出来る行事になっている。

思い出のアルバム
あの日あの時

敬老会

地域に住んでいる先輩達のご苦労に感謝する催しとして、敬老会が開催されてきた。

年に一度、地元の高齢の方々が一堂に会し、楽しい一日を過す行事である。卯辰山のヘルスセンターを会場に毎年秋に開催されてきたが、時の流れと共に会場の名称が、サニーランドと変更され、又県立動物園に内容が変ったのを機に、会場は高柳町のルネス金沢に移った。湯に浸かり、旧交を温ためながらの楽しい会食は引き続き行なわれている。

平成六年主催者が変更となり公民館から、現在では「社会福祉協議会」主催になっているが、高齢者の楽しみは変ることなく続いている。

思い出のアルバム
あの日あの時

立志のつどい

『立志のつどい』とは、十四歳の少年・少女がみずから将来をのぞんで志を立て、次代の社会を担うものとしての誇りと自覚を持ち、さらにこれを実践するための健康な心身をつくることを目標に、青年への新しいスタートに立つ日を「立志の日」として祝い励ますものである。

公民館が現在地に建設されたのを機に始められた。

当初はそれなりに参加者があったが、少しずつ出席者が少なくなり悩みの種だった。昭和六三年に北鳴中学校が開校したのを機に千坂公民館、北鳴中学校と話し合い、平成二年二月十七日(土)北鳴中学校の二年生全員が出席して行われて以来、毎年二月に各方面の講師をお招きして行われている。

思い出のアルバム
あの日あの時

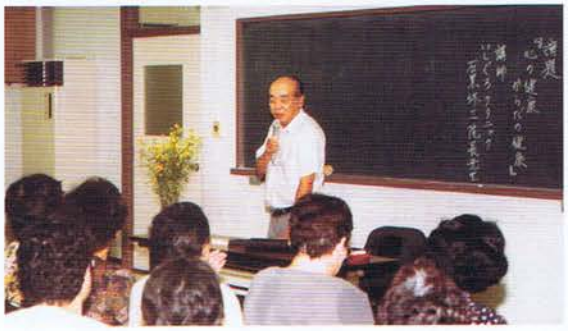
女性学級

「楽しく学んで、豊かな心を」テーマに年六～七回開催している。学級活動も歴史は古く、昭和二七年には婦人学級活動が始まり、昭和五一年「せせらぎ婦人学級」の学級名で県指定を受け発表した記録がある。平成二年には国庫補助の指定事業を受けるなど、公民館活動の中でも一番活発に活動しているところである。

学級名は婦人学級から平成六年女性学級となり、活動内容も自分たちの趣味だけでなく、健康教室や地域の開発、将来像を聞いたり、また、百万石のルーツを求めて卯辰山寺院群や野田山、金沢城公園、兼六園などの散策、遠くは高岡瑞龍寺、飛騨古川の巧や大聖寺の名刹・実性院、そして長浜城までも観て歩き、豊かな心を育んでいる。

思い出のアルバム

あの日あの時 ― 健康づくり教室



平成六年の春、当時の元町保健所の保健婦さんが来館、「みんなで楽しく、健康について学びませんか」との誘いに共鳴して、小坂ポカポカ運動教室を開設した。

以後、九年までの四年間、みんなで一緒に身体を動かしながらいろいろと健康について学んできた。

ところが同十年に、金沢・健康を守る市民の会のモデル地区指定となり、自主的運営から経費の戴ける運動へと変容したのである。

名称は「健康づくり教室」に変わり、内容も充実、参加者数も多くなり、楽しみながら健康について考え、そして行動する公民館行事の中でも大切な教室に育っている。

指定が終了した十三年度は水中ウォーキングなどを取り入れながら八回開催した。

小坂校下町会位置図
神谷内中町会
神谷内葵町会
高柳町北親会
新葵町会
神谷内西町会
神谷内本町会
小坂三ツ屋町会
三池町会
北鳴中学校
小坂親和町会
小坂公民館
小坂中町会
東金沢町会
小坂第１町会
小坂小学校
イトーピア町会
神宮寺みどり町会
鳴和中学校
大樋南親町会
神宮寺町会
御所町会
400m

校下各種団体・町会紹介

小坂校下町会連合会

かつては農業小坂を自認していたこの地域も、昭和11年に金沢市に編入以後、時代の進展とともに旧国鉄東金沢駅を起点とし、旧国道八号線沿い等に工場や事業所などの進出が相次ぎ、地域は目覚しく変容した。

しかし、近郊の都市化と共に工場等が次々と移転して、一時期は空洞化を心配されたが、折からの建築ブームでこれらの土地に住宅が建ち並び、田畑にも住宅団地が造成され、一気に都市化が進んだ。

こうして新しい地域住民が移り住んだ当初は、新旧住民の間に地域社会での生活者感の違いが多少は生じたが、校下の町会組織が一致団結して「明るく平和で住みよい」地域社会づくりの推進強化を図ることを目的に昭和39年に本会が結成された。

近年では、校下各種団体の連携強化を重視し、平成８年12月には災害に強い地域社会づくりを目指して、校下自主防災会を組織し、今年には、赤十字奉仕団も立ちあげ住民相互の福祉と互助精神の心を育てて行きたいと念願するところである。

この地域の市街化が進行したとは言え、山あり、河あり、そのほとりに蓮葉の緑が目に映える、自然に恵まれた地域である。今後とも、住んで良かったと皆さんに喜こんでいただける地域社会づくりに向けて、町会組織が住民のニーズに合った多様な事業に、さらに協調して取り組みたいと念願している。

〔歴代会長〕

初　代	昭和39～42年	出島　敬識
２　代	昭和43～54年	棒田　二作
３　代	昭和55～63年	高林　直松
４　代	平成元～５年	石見　義之
５　代	平成６～至現在	駒崎　　稔

小坂校下各種団体連絡協議会

昭和50年４月から小坂校下の町会長並びに各種団体の代表者をもって組織され、以後校下及び地域住民にかかわる諸問題について討議、情報交換を行い、住民相互の理解と連帯感を深め、地域の発展に寄与してきた。

しかし、各団体の活動が活発になり、事業の増加にともないしばらく休会していたが、平成８年に再度組織の強化を図り、現在は年２、３回開く会合で各種団体の連絡も密になり校下の発展に大きく貢献している。

〔13年度役員〕

会　長	駒崎　　稔
副会長	石見　義之・神保外巳雄
監　事	村松　松雄・清谷　暁外
会　計	小竹　　譲

小坂校下自主防災会

小坂校下の住民が、隣保共同の精神に基づく自主的な防災活動を行うことにより地震等の大規模災害による被害防止及び軽減を図ることを目的に平成８年12月12日市内20番目の自主防災会が結成された。

平成10年８月23日には、北鳴中学校グラウンドで市民震災大訓練を約1,000名の住民が参加して行われ、以後毎年１、２回防災訓練や研修会等を開催して「まさか」の時に備えている。

〔13年度役員〕

会　長	駒崎　　稔
副会長	石見　義之・神保外巳雄
	村松　松雄・清谷　暁外

小坂地区社会福祉協議会

民生委員児童委員制度が出来てから80有年になる。岡山県に産声をあげた済生顧問制度から大阪に方面委員制度ができた。これらが現在の民生委員児童委員制度の前身である。当時の活動は、救貧、授産対策が主な仕事であり行政の補助的機関であった。又社会福祉協議会は昭和26年に発足し、今年は50周年の節目の年である。私が民生委員・児童委員に就任したのは昭和40年であり、それ以前の内容はあまり詳しい記録はわからない。

制度そのものは出来たものの社会福祉協議会（社協）イコール民生委員・児童委員会（民児協）との考え方が強く、民児協が福祉のすべてを受けもっていたが、福祉活動も次第に多様化してきた。車にたとえれば両輪の如き関係だとの指導を受けたものである。

60年代に入り福祉の分野では次第に高齢化、少子化が進み核家族化、各々の障害者の問題、一人ぐらし老人の増加等で到底民児協だけでは対応出来ず地域全体での協力体制が望まれる様になり、地域の各種団体凡てをネットした社協の組織が作られた。その関係は、社協はハンドル、民児協はエンジンといわれる様になった。社協は方向性、民児協は実際活動の中心といわれたものである。その理由は社協傘下の各種団体の特殊性として支援する団体と支援を受ける団体とが共存し助けあいをしている点にある。支援する側、される側がお互いに参画し協力して地域福祉の向上に努力する所が特長である。

社会福祉事業法は社会福祉法に、民生委員法も昨年改正になった。老人問題、児童問題も深刻なものになり、障害者にもノーマライゼーションの理念のもと住みやすい環境に改善が叫ばれており各種のバリアフリー化も重要になった。一人ぐらし老人に対しては地区のまちぐるみ福祉推進員の協力、女性会、老人会の元気な方の仲間への支援も頂いており今や地域総ぐるみで支え合う時代になり社会福祉協議会の役割が非常に重くなってきている。痴呆の方には成年後見制度、地域福祉権利擁護事業もスタートした。

公民館も設立50周年、何か関係深いものを感ずるところである。この機会に社会福祉協議会の概念的な事を書かせて頂いた。何か自分の可能なボランティア活動でお互いに地域社会に貢献する時代になり、また求められる社協である。

『ふくしはしくみの仕事、しあわせとは困るものがなければよい、自分が生きていてよかったと思うことと口惜しい事が多かったとの差がしあわせであったかどうかであると聞きました。自由と平等に博愛が加わってはじめてふくしだと言われております。』

社会福祉協議会会長　神保外巳雄

小坂交通安全対策協議会

この会は、小坂校下内の交通事故防止運動と交通安全思想の普及高揚を図り、交通事故のない明るく住みよい町づくりを推進することを目的に昭和46年９月１日に設立され、現在もいろいろと活動を続けている。

歴代会長

田中　古一
　　昭和46年９月～昭和56年３月

長東　茂雄
　　昭和56年４月～平成５年３月

山内喜代志
　　平成５年４月～現在

◇小坂校下運転者友の会

（昭和48年３月16日会員381名で発足）

校下の住民で、現に免許証を有し自動車を運転する人で安全運転憲章を確実に守れる自信のある方なら誰でも参加でき、各種の教室や講習会を開催した。そして、10年以上無事故無違反の優良運転者を校下の文化祭の合同表彰式で表彰、平成３年まで表彰を続けた。

◇小坂交通少年団（昭和59年９月23日結成）

金沢東署管内で第１番目、金沢市で７番目に発足し、交通安全教室やカーブミラーの清掃や飛び出し禁止の黄線引きなどの活動を続けている。

歴代育成会会長

長東　茂雄
　　昭和59年９月～昭和61年３月

山内喜代志
　　昭和61年４月～平成６年３月

高林　建二
　　平成６年４月～平成７年３月

田原常四朗
　　平成７年４月～現在

◇小坂町交番連絡協議会

（昭和59年12月19日結成）

小坂町派出所が東金沢駅前から昭和39年に現在地に移転し、この建物が古くなったため取り壊し新築されたのを契機に発会式を行う。

歴代会長

二木　由郎
　　昭和59年12月～平成３年５月

苑原　松夫
　　平成３年５月～平成９年５月

坂本　作二
　　平成９年５月～現在

◇金沢東交通安全協会小坂支部

（昭和63年10月11日設立）

◎平成４年度に蛍光桃太郎旗を小坂町交差点から神谷内町交差点まで50本立てての交通安全の呼びかけは、県内ではじめての事業である。

◎平成９年９月に神谷内町交差点に交通安全広告塔とその横に1.8mある大きなタヌキとカエルを設置した。

『事故にあわずに無事かえる』との意味である。

歴代会長

二木　由郎
　　昭和63年10月～平成５年３月

長東　茂雄
　　平成５年４月～平成13年３月

山岸　　弘
　　平成13年４月～現在

小坂校下防犯委員会

防犯委員会は地域の防犯及び防火体制を組織化し、安全な町づくりを目的に昭和30年５月に結成された。以来46年有余の永きに亘り今日に至るまで校下全体の安全と防犯のための活動をしている。

夜回りの開始にはじまり、青少年不良化防止のための駅や公園の巡回、連続神社放火発生時の警備等、防犯防火の意識高揚に努めてきた。その功績が認められて、昭和46年10月石川県防犯協会連合会長より団体表彰を受け、平成６年６月には中部管区警察局長賞を受賞した。

公民館の創立50周年を迎えるに当り、心を新たにして名誉ある小坂校下防犯委員会の名を汚さぬよう、これからも安全で安心の町づくりに誇りをもって頑張りたい。

平成13年度　役員

委員長	飛鳥井久雄
副委員長	中村恵次郎
〃（会計）	野崎　義則
常任理事	山内喜代志・長東　茂雄
	坂本　作二・田中　隆夫
	長田　龍夫・高林　健二
	延村　茂憲・駒崎　稔

平成13年度　事業計画

４月　春の全国防犯運動に参加
５月　金沢東防犯協会通常総会
６月　小坂校下防犯委員会定例総会
　　防犯パトロールの実施（６月～11月）
７月～８月　夏期集中防犯運動の実施
　　交通推進隊と合同夜間パトロールの実施
９月　地域安全運動市民大会
11月　情報の交換と巡回の反省会
12月　年末年始特別警戒防犯活動の実施
３月　常任理事会の開催

金沢市立小坂児童館

小坂児童館は公民館が独立と同時に併設され、昭和50年４月１日市内８番目の館として産声を上げた。開設当初は児童館の目的や役割が良く解らず戸惑いもあったが、公民館事務員（児童館兼務）が採用されてから徐々にその任務を果たせるようになった。

又、昭和56年には日本電工跡地に城北児童会館が設けられ、校下内に二つの児童館が誕生し子ども達が安全に安心して遊べる場所が増えたのである。

◇ロングランの16ミリ映画会

ファミコンが登場し映画はどうかという感があったが難なくクリアーし、ほっとしたのも束の間、今度はIT推進ということで国をあげてパソコン導入が図られ、児童館にも設置され驚異を感じた。しかし、個人が楽しむゲームとは違い集団で見る映画は楽しさと、暗い所で見るので集中力がつき格別と根強い人気である。

◇七夕折り紙教室・クリスマス会

七夕は６月下旬か７月上旬に、クリスマス会は12月中旬に行われる。

城北児童館と重複する事もあるが、普段一緒に遊んでいる仲間意識があるのか当館の行事に人気が集中！嬉しい悲鳴である。

◇主な年間行事の紹介

１年生おめでとう会・母の日、父の日プレゼント作り・一人暮らし老人へ（暑中見舞い、年賀はがき、一緒に遊ぼうよ）・親子バスハイキング・児童館フェスティバルなど

◇クラブ・教室の紹介

〈母親クラブ〉

昭和56年４月１日結成
児童館の縁の下の力持ち
各種事業の企画やお手伝いにお母さんパワーを発揮

〈こさか児童クラブ（学童保育）〉

昭和63年４月１日開設
事業は上記事業とほぼ同じ
クラブ対象児童におやつ支給

〈かんがるー教室〉

平成３年４月開講
２歳児の親子対象に楽しく遊ぶこと
当初は毎週火曜日開催
平成13年５月より
火・木曜日の２回開講

小坂校下老人会連合会

◎クラブ数と会員数

4クラブ　男163名　女196名　　計359名

◎役員構成

会　長　　小　坂　金　行
副会長　　林　　登喜男（教養担当）
　　寺　本　　進（健康担当）
　　谷　村　秀　夫（奉仕担当）
　　加　藤　ソトエ（女性会担当）
事務局　　安　田　三　郎（会計担当）

◎単位クラブと会長

小坂校下老人クラブ　　小　坂　金　行
新葵町新寿会　　松　下　利　夫
神谷内老人会寿会　　村　田　喜久松
御所町親和会　　上　山　久　男

1　沿　革

(1)　歴代会長

初代　　林　　伊一郎
二代　　掛　場　与　一
三代　　東　　一　臣
四代　　小　坂　金　行

(2)　女性部代表

初代　　加　藤　ソトエ

(3)　沿革の概要

小坂校下老人クラブの結成は、昭和46年で、小坂校下13町会の有志により120名前後の会員で結成された。老人クラブに対して助成金がでるようになり、3ヵ月毎に活動状況報告を行っている。その後校下に4単位の老人クラブができ、それぞれ盛んに活動を行っている。

2　現在の活動状況

小坂校下老人クラブは、校下内最大の老人クラブで、未組織11町会を一括した老人クラブである。

(1)　**活動組織**　会長、副会長、会計、監事、理事、顧問等の諸役をおき、活動組織は、総務、教養、健康、奉仕、女性会等を設け、それぞれ役割分担をして積極的に活動を展開している。他の3単位クラブも自主的に活動を行っているが、当老人クラブの活動にも参加することを認めている。

(2)　**主な活動状況**

恒例の行事である総会、追悼法要、研修旅行（1泊2日）、日帰りバス研修旅行、グラウンドゴルフ大会年2回、ゲートボール（4月～10月）地区連盟に入会、お茶を楽しむ会（月1回）、工作教室（年4回）、法話会（年3～4回）、奉仕活動（公民館周囲の除草清掃2回、花壇の花植え1回、小学校の校庭の溝泥上げ1回、道路の空缶拾い、公民館内の年末大掃除）。友愛訪問事業として各町会役員を動員して、満88歳の高齢者宅を訪問し、高級毛布を贈呈、また女性会の方々も時々顔を出すようにしている。世代間交流として、公民館行事の「さわやかフェスタ」に3世代の旗源平遊びの世話をしている。また3世代のグラウンドゴルフ大会も行っている。

毎月の行事会報は、公民館だよりの一部を「老人会クラブ便り」欄を設けてもらい、詳細に案内事項を掲載して徹底をはかっている。

今後は健康づくりに留意し、「ねたきりゼロ、痴呆ゼロ、交通事故ゼロ」のスリーゼロ運動を推進すると共に、地域での友愛活動を更に発展させて、明るく楽しい老人クラブ活動を推進していきたい。

3　現在の問題点と将来計画

会員増加に関して、若い人が老人クラブに入会することを何故か嫌がっている。老人クラブは今後益々高齢化するばかりで、良い方法を考えねばならない。

小坂校下女性会

2000年を節目に女性会は一足早く50周年を迎えた。昭和25年「小坂校下婦人会」として結成、諸先輩の方々が情熱をそそがれ戦後の高度経済成長のめまぐるしい変化の時代に婦人会活動の歴史を築いた。平成6年、新たに受け継ぎ、若い世代へとバトンタッチするために「小坂校下女性会」と金沢市で一番先に「婦人会から女性会へ」と改名、ちょうど三社の婦人会館が、女性センターと変わり市や県の窓口も婦人から女性へと変わり始めたときである。

政界でも女性議員が活躍し、公官庁管理職員にも女性が進出してきたころです。お蔭様で女性会と改名後は若い会員の方々にも興味と理解をもって戴き毎年会員も増加している。

小坂校下女性会は現在705名の会員で運営している。

校下の各種団体との連携を図りながら、より良い地域づくりのために貢献している。

21世紀を迎えて次世代を担う子供達のために地球の環境問題として地域からの環境の整備を考えゴミの分別・減量運動の徹底を、また、消費問題や交通安全マナーの啓発運動、婦人防火クラブを結成して地域の防火防災にとあらゆる課題に取り組んでいる。

年度初めに一泊研修会を実施する。各町内の新部長さんと女性会の新役員との親睦を深めて一年間共に活動するために和気あいあいと研修を行う。年間行事として昨年度の代表事業は、高光一生先生の陶芸教室、ワープロ・パソコン教室、手芸教室、料理教室、市政見学バス、小坂小学校の新一年生や地域の方々の交通安全を祈って交通安全マスコットを皆で一個一個手作りする。また、婦人防火クラブでは、春・秋の火災予防運動で校下巡回広報活動・救命救急講習会を行うなど、数々の行事を楽しく学びながら活動している。

広報「はすね」

平成10年念願の広報「はすね」を地域の皆様の熱いエールのお蔭で発刊することが出来た。長い間女性会には広報がありませんでした。年に一度の発刊ですが広報委員の汗と努力の賜物です。まだまだ未熟な広報ですが今年度第4号を発行、私たち女性会の活動内容を広く地域の皆様方に知って戴きたく頑張っている。色々なご意見・ご感想をぜひお聞かせ下さい。

小坂校下婦人会・女性会歴代会長

昭和25年	小村　光子	〃	昭和51年	〃
昭和26年	深山美登里	〃	昭和52年	〃
昭和27年	東円慶美子	〃	昭和53年	〃
昭和28年	〃	〃	昭和54年	〃
昭和29年	井上　アイ	住田・越村	昭和55年	住田・越村
昭和30年	神保　清子	越村喜多子	昭和56年	越村喜多子
昭和31年	〃	〃	昭和57年	多門　佳枝
昭和32年	出島　智子	〃	昭和58年	〃
昭和33年	山本喜久子	吉田　倭子	昭和59年	吉田　倭子
昭和34年	長田　清子	〃	昭和60年	〃
昭和35年	三東　とよ	〃	昭和61年	〃
昭和36年	太田　玉枝	〃	昭和62年	〃
昭和37年	〃	〃	昭和63年	〃
昭和38年	小村美智子	谷村　玉枝	平成元年	谷村　玉枝
昭和39年	〃	〃	平成2年	〃
昭和40年	〃	〃	平成3年	〃
昭和41年	島村　房子	〃	平成4年	〃
昭和42年	村本　邦子	〃	平成5年	〃
昭和43年	〃	竹川　操枝	平成6年	竹川　操枝
昭和44年	住田　節子	〃	平成7年	〃
昭和45年	〃	〃	平成8年	〃
昭和46年	〃	〃	平成9年	〃
昭和47年	〃	〃	平成10年	〃
昭和48年	〃	〃	平成11年	〃
昭和49年	〃	〃	平成12年	〃
昭和50年	〃	〃	平成13年	〃

小坂校下少年連盟

小坂少年連盟の活動は、小坂小学校の校舎が現在の形に整ってから本格的に始まり、少年球技大会や少年剣道教室などが開催されるようになったものと思われる。

金沢市のソフトボール大会では、昭和42年度に御所町子ども会が３位に入賞、翌43年度の大会では高柳町子ども会が準優勝するなどの活躍があった。

また、少年剣道教室の皆さんは、社会体育大会で野試合を披露するなど、心身共に健全な仲間作りをめざしたのである。

その間歴代の委員長を中心として、役員の皆様及び地域各町会の育成委員の献身的なボランティア活動のもと、少連活動の歴史が積み重ねられたのである。

佐々木正樹、林憲次、松本寛、蔵元益男、小竹譲、上出外喜雄氏の各委員長、そして現在は中村勲委員長を中心として、役員13名、町会育成委員33名で活動している。

また、各種団体との連携、協力も大変重要なことであり、女性会、母親クラブ、児童館、小坂小学校PTA、老人クラブをはじめ公民館の各種団体と協調させて頂き、更には「少年消防クラブ」の育成「交通少年団」との関係も、少連活動に欠くことのできない重要なものとしてとらえている。

（１年間の活動）

このように皆様方のご協力を頂いて、少連は多くの行事を主催、協賛している。

◆「城北わんぱくランド」城北児童館　協賛◆「百万石まつり提灯行列」金沢市少連◆球技大会「ソフト・ドッチボール大会」◆「小坂っ子夏祭り　夢・未来」小坂少連◆「社会体育大会・文化祭・立志のつどい」小坂公民館◆「希望ケ丘祭」希望ケ丘◆「親子クリスマスケーキ作り・子ども新年ゲームチャンピオン大会」小坂少連

以上１年間の主な行事の紹介である。

（活動を通して学ぶこと）

私達は各種の行事を通して、地域社会で大人や古老から貴重な体験を学び、仲間作りの活動の中で生かしている。地域との連携を通して、自らの役割と地域愛、郷土愛に根ざした友情を育み、大人や古老を敬う心を育てることが、少年連盟に与えられた大きな役割であると信じて、これからも頑張る所存である。

金沢市少年連盟　地域少年連盟優良育成委員表彰者

昭和50年　本　浄	昭和51年　宮村　賢一	昭和52年　吉野　健二	昭和53年　松田　積一
昭和54年　窪田　健二	昭和57年　蔵元　益男	昭和58年　西村　正美	昭和59年　柳瀬　邦夫
昭和60年　西田　光広	昭和62年　松井　清明	昭和63年　長谷川弘洋	平成２年　田原常四朗
平成３年　松儀　博之	平成４年　大山三喜夫	平成５年　宮野　泰之	平成６年　角地　茂夫
平成７年　三喜　正雄・奥谷　晴介		平成８年　日野　正人	平成９年　北川　光夫
平成10年　斎藤　敏行	平成11年　新保　昌貴	平成12年　神野　順二・田丸　喜博	

金沢市第二消防団小坂分団

消防団の沿革

金沢市第二消防団小坂分団は、小坂、夕日寺両校下を併せての分団で、少年消防クラブ、女性消防クラブ等が校下単位で組織されていることからも、極めて特異な存在である。

1947年、警防団から自治体消防へと組織が移行された頃にはまだまだ田舎で世帯数も少なく、小坂、神谷内、御所、東長江と集落毎にポンプ車を有し、夕日寺校下が旧小坂村の一角として活動していたものが今日まで引継れているものである。

少子化と、人口の郊外流出に伴い、市中心部の小学校が統合され各校下一分団のものが結果として、一校下二分団となる中、城北地区要の小坂校下は、金腐川添の田園地帯の道路網整備、東金沢駅移転（決定）更には稲置学園（星稜高校、金沢経済大学）と新しい街づくりが着々と進んだ。一方、山王、高田団地の誕生により急激な人口増と変貌著しい夕日寺校下を包括して団員数30名（小坂16名、夕日寺14名）市街地から山間部まで広範囲（49分団で１位の管轄）をエリアとし、火災、災害発生時の出動はもとより、ポンプ車操法（火災防御の基本）訓練を始め、地域の特情の把握に努め、少年、女性消防クラブともども啓もう活動に取り組んでいる。

最近では98年最新鋭ポンプ車、99年機材車（震災時対応）を更新していただき、従来の山間地用ジープ型車とハード面は万全である。これを機にソフト面の充実に向けて更に地域に密着した活動を図るため、夏休み中、小坂小学校で開催されている体験学習「Let's go サマースクール」に参加、日頃消防自動車や同機器に触れることの出来ない小学生や若いお母様方に、乗って触れて体験してもらって、防火意識の高揚、理解を得て、後継者育成にもつなげていければと思っている。

これからも住み良い地域、豊かな街づくりに向けて団員一同、自己研鑽を重ね、頑張っていく所存である。

金沢市第二消防団小坂分団
分団長　土田　　満

小坂校下母親クラブ

○結　成

昭和56（1981）年親子クラブとして発足した。（初代会長　宮川国子）その後、母親クラブに改称する。

○母親クラブとは

☆子ども達の健全な育成を願って自分たちの力で、地域社会に根ざしたボランティア活動を実践していく会である。お母さんだけでなく、お父さんも入会できる。

☆子育てや日常生活の問題など、身近なことから気軽に話し合い、みんなで考え、みんなで協力して、楽しく子ども達のための活動をすすめていく。

☆お母さん方が、交流をはかりながら、地域児童のための活動を児童館と協力して行っていく会である。

○母親クラブの４つの活動

・親子及び世代間の交流・文化活動
・児童養育に関する研修活動
・児童の事故防止のための活動
・児童福祉の向上に寄与する活動

○年間行事（平成13年度）

５月　総会
　　親子バスハイキング
　　（大島町総本館、富山市科学センター）

７月　七夕折り紙教室
８月　小坂っ子夏まつり
９月　児童館フェスティバル
　　（市民芸術村）
　　社会体育大会
　　秋の交通安全運動
　　（すすきのみみずく人形作りと配布）
10月　文化祭
　　（プラパン作り、くじ引き、手作り品の販売）
12月　児童館及び公民館の清掃
　　クリスマスのつどい
１月　子ども新年会
３月　反省会

○13年度役員紹介

会　　長	神谷てる子
副 会 長	村上裕美子
	木棚恵美子
会　　計	中白　葉子
会計監査	大森　昌子
顧　　問	斎藤喜代子
	下出　智子

各町会から選出された会員25名と共に活動している。

小坂第１町会

誰もが「おっさかはいいとこやね」と言ってくれる。これは東に古墳の多い緑の山並が連なり、金腐川より取り入れた小坂用水が常に清流を満々と流し、谷間の畑には年中美しい花木が咲いて、而も交通の便の良い事から自然発生の訛言葉と思われる。

特にこの「おっさか」は、小坂第１町会を指して言われてきた愛称である。

往古より、小坂町は小坂村の中心で、村役場を始め、神社、寺、学校、消防分団等があり、行政、教育、文化の機能を果してきた。

小坂小学校（創立130周年）

明治５年に学制令が出てはじめて学校ができ、大正11年に現位置に新校舎落成、昭和11年金沢市に編入「金沢市小坂尋常高等小学校」と改称、以後、「金沢市小坂国民学校」から昭和22年に現在の「金沢市立小坂小学校」と改称、41年に全部の改築工事が終了して現在の校舎になったのである。

野間神社

小坂の野間神社は、且つて金沢城の大手門前にあり、草野比咩命他の大神を祀る延喜式の郷社であったが、一説として前田綱紀公が尾張の町人を呼んで住まわせる為、小坂の地に移らせ「河北一郡総社」の社称を賜ったと聞いているが、また、この事は天正年間、佐久間盛政が尾山城を治めていた時と言う説もある。（加賀古跡考より）

小坂町第１町会会館

平成２年10月21日会館の落成式が盛大に行われた。木造２階建ての同会館は、野間神社の境内にあった倉庫の跡地に建てられ、町会の獅子舞保存会や子ども会、婦人会などの活動の場として、又、小坂町の伝統と歴史を守る拠点として活用されている。

小坂白蓮公園

平成２年から始められた総面積7.5ヘクタールの小坂南地区土地区画整理事業が総事業費14億円をかけて、平成７年５月31日完成した。地内には白蓮公園もあり、すばらしい環境をみんなで大切にして子孫に残して行きたいと大喜びである。

又、この事業に併せて工事に入っていた都市計画線、小坂－御所間が地元住民の理解と協力で、平成８年７月開通し、喜びの中で祝賀会が行われた。

小坂中町会

〔町会名の移り変わり〕

私たちの町会名は４回変わった。

１つ目「軍馬通り」

昭和20年、大東亜戦争終戦近くまで軍馬記念碑が野間神社参道入口左側、国道に面して立っていた。高さ12メートル余りに達する立派な銅像があったことに由来する。現在は野間神社に移されている。

２つ目「小坂本通り」

３つ目「小坂第２町会」

４つ目「小坂中町会」

平成に入り、町会長さんが変わり、新町会名で発足した。

〔金腐川氾濫〕

昭和39年７月８日に金腐川が氾濫して床下浸水にあった。泥をきれいに出してほっとしたところ、18日には床上まで浸水した。床下が乾燥するまで２階で生活したのである。

以来、金腐川は改修され川幅がすり鉢型に広くなったため１度も氾濫したことがない。

〔組　織〕

規約に基づき、小坂中交差点を中心にして町会をA・B・C・Dの４ブロックに分け、役員は会長、副会長、会計、総務、企画、連絡と決めている。班長は１年交替で、会長はじめ、副会長、会計の３役のほか各委員は２年毎にブロック持ち廻りとして、相互扶助しあって運営に当っている。

〔活　動〕

公民館行事には青壮年部、女性会、子供会が積極的に参加している。

町会の行事には「グラウンドゴルフ大会」「縁日ビアガーデンの夕べ」「新年会」などがある。特に縁日のビアガーデンの夕べは大変好評で盛大に行っている。

住民の親睦と融和を図るため１人でも多くの参加を期待している。

小坂三ッ屋町会

○町会名の由来

今、金沢市では旧町名が見直しされていますが、私達の町会名「小坂三ッ屋町会」の**三ッ屋**のいわれは、江戸時代初頭の頃、当時の郡奉行がこの地に近郷から３軒の家を移住させたことから**三ッ屋**と言われるようになったそうである。

○町の変遷

昭和20年代は、まだ北陸街道の松並木の面影が残るのどかな地域だったが、昭和30年代に入ると天然ガス会社の跡地に郵政関係者の住宅が８軒程新築され、この頃から町会の拡大化が始まり、現在では国道159号線を挟み世帯数も140軒程の町になってきた。

○柿乃湯と社会保険健康センター

当時の柿乃湯

一見、何の関係もないような２つの名称だが、当町会の総会を昭和年号時代までは柿乃湯で、平成になってからは社会保険健康センターで開催してきた。

町会独自の集会場の必要性についていろいろ意見のあるところだが、当町会は両施設のおかげで毎年の総会をここで開催してきた。

それぞれにご無理を申し上げご理解を賜ってきたことに対し改めて感謝している。

柿乃湯の発足は、町内に上水道のなかった頃、飲料水を目的に共同井戸を掘削したところ、あまりにも鉄分が多かったことから鉱泉への転用となったとのことである。

神経痛に良い**「みっちゃの湯」**で多くの人に親しまれてきた柿乃湯（昭和27～63年）は当町会にとっても新年会等の憩いの場として今も記憶に新しいところである。

○活動状況

最近では新しい世帯とも一体となり町会の行事運営等の諸活動を展開しているところだが、2001年の９月に行われた小坂公民館創立50周年記念の校下社会体育大会において、見事その成果を初優勝という形で飾ることができたのである。

新しい世紀の最初の、しかも記念すべき大会に優勝できたことは、選手、応援団、役員が一体となり力を結集したことと、日頃からの町会のまとまりの現われであり、大変意義のあることと喜んでいる。

これからも女性会、子供会と協力しながら町会の活性化を図っていくことを基本とし、若者世代にも町会活動に関心を持ってもらい主体的に参加してもらうため、今年度は情報の共有化を目的に三ッ屋町会のホームページを開設したり、下期には班別対抗のボウリング大会などを企画している。

○小坂三ッ屋町会ホームページ

http://mituya.soc.or.jp/

社会体育大会優勝記念

小坂親和町会

わが町は昭和30年代初め小坂地内に市営の住宅が建ち、小坂住宅町会として発足したが、昭和42年に入いり、6世帯が現在地に移転して、小坂親和町会として再発足したのが現在の町内会の始まりである。

昭和49年に公民館が建設され隣接に3世帯の住宅が建ち、その後、つぎつぎと周辺に建物が建ち並び、現在では28所帯、アパート5棟になっている。小坂校下では1番小さい町会であるが、公民館の皆様には何時も、ご配慮戴きながら頑張っている。

近隣は大きく様変わりをし、浅野川病院が昭和62年に、また北鳴中学が昭和63年に、さらに町内に浅野川病院看護学校が平成3年に出来た。

わが町会も、まだまだ変わって行くと思われるが、公民館とともに益々発展することを祈念している。

昭和51年頃の町会

東金沢町会

現況（平成13年）

一般世帯	182
世帯アパート	58
単身アパート	少々
企業	25
商店・自営業	35

町の沿革

昭和初期より東金沢駅周辺は工業地域として栄え、50年代に入り広大な工場跡地等には新しい事業主の進出や道路整備が進み、宅地開発や周辺には武道館等の公共施設も建ち並び、新興住宅街として開発された。

戦前；東金沢駅周辺の住宅は10数軒
　　日本電気冶金㈱の社宅約200世帯
戦後；鳴和～東金沢駅間に市内電車開通
　　（チンチン電車）昭和20年12月１日
　　（昭和41年２月１日廃業）

昭和30年代後半の駅前通りとチンチン電車
　東金沢駅方面より野間神社方面を望む

昭和39年　金腐川にかかる小金橋竣工
昭和51年　日本電気冶金㈱跡地にイトーピアマンション完成
昭和53年　滝川ボウリングセンター跡地分譲開始（６～７班）
昭和55年　一般住宅分譲開始（８～16班）
昭和56年　金沢市立城北児童会館開館
平成６年　町内を北鉄乗合バスが運行開始

町会のあゆみ

昭和25年頃に町会が発足したが、記録が全くなく詳しい事は不明。

昭和35年から町会としての活動が始まる。

昭和30年代は日本電気冶金㈱の人たちが中心で、一般住宅は10数軒しかなかった。

新興住宅地が開発された昭和50年代後半には現在の状態になった。

町会行事

夏の日帰り旅行、盆踊り、バーベキュー会、グラウンドゴルフ大会、新年会

昭和60年から平成３年まで開催

老人会・主婦の会

温泉旅行や食事会、講習会などを開催。

青壮年部

平成12年に発足し、親子バーベキュー会、ボウリング大会、ゴルフ大会等活発に活動。

少年育成委員

夏のキャンプや冬のスキー、子供提灯太鼓行列参加等で子供の健全育成を図っている。

その他

町会の皆さんは、ボランティア活動に非常に協力的で、ごみの分別回収もきれいに行われ、一斉美化デーも沢山の方が参加、特に平成13年１月の大雪では、除雪作業最終日には150人余りの方が参加して除雪完遂。

これから

公園や児童館、学校など住環境が整い、平成14年からは東金沢駅移設と駅前広場や道路等の整備が進み、町の表情も変わってくるだろう。

高齢化も進み、住民同士の心のふれあいを大切に、さらに美しく、住みよい町づくりに住民一丸となって取り組みたい。

夢

町会集会所（コミュニティセンター）建設

御所町会

◆御所町と加茂神社の由来

御所町は建武２（西暦1335）年に京都より二条大納言師基が加賀の国司に任じられ、当地に赴任し巨大な館を築城し加賀の国を治めたことから「御所」と呼ぶようになった。また江戸時代には加賀前田藩が当地の豪農西川家を十村役に任命し旧河北郡小坂村から森本までを統治した大屋敷のあった地でもある。現在は金沢星稜大学、短期大学、高校、中学、幼稚園があり毎日約3,000人が通う学園文化の中心地である。近年は丘陵地の住宅開発が進み、町名も御所町、南御所町（当町会、小坂校下）、御所１、２丁目（夕日寺校下）と増えて約600所帯・人口2,000人が住むベットタウンでもある。

当地の加茂神社は元正天皇の養老年間（西暦720年頃）に京都山城の賀茂神社を分社し創建された古社である。ご祭神の別雷大神は山川及び雷の主宰神であり、当初農耕の守護神として祭られ、後にはこの地方一般の産土神として篤く崇敬されてきた。拝殿左横に古来より「椎の木水」と呼ばれる霊泉が湧き出で、眼病に良く効き、いかなる大かんばつにも枯れたことがないと言う古くからのいわれがある。

◆町会とお宮さんの主な行事

私達の町は、昭和30年代の金沢大学の発掘調査により縄文・弥生土器が出土され、更には御所八塚古墳【垂仁天皇の子孫大兄彦君（おおえひこぎみ）の墓で５世紀前半頃に造られたと推定される】もあり、古代からの歴史を歩み、古くから信仰の深いところである。平成13年の主な行事から私達の生活習慣を紹介する。

◆御所の行事カレンダー

１月１日　元旦祭（加茂神社で町民が集い、新年の家内安全祈願と厄年の御祓い）
　15日　加茂神社左義長
２月４日　町会通常総会（役員改選、決算・予算の審議）
３月４日　春の追善法要（前年下半期物故者の追善法要）
　13、14日　加茂神社春祭り
　25日　ボウリング大会（青壮年部いずみ会）
４月10日　火伏せ祭り（明治の頃、町内ほぼ全域を焼く大火が発生した日。鎮火を祈願し一晩中交替で火の用心の夜回りをする）
５月27日　グラウンドゴルフ大会（青壮年部いずみ会）
６月８日　金沢市祭提灯行列に子供会と町会役員、育成委員が参加
　９日　獅子舞保存会が金沢市祭百万石パレードに参加（御所の黒獅子と河童流棒振りは評判が高い）
８月14日　町民夏祭り「盆踊り大会と夜店の広場」（当地のオリジナル民謡「御所音頭」と「五穀成就祈願・虫送り太鼓」を演技）

　26日　親睦バス旅行「さわやか乗鞍高原・スカイラインの旅」
９月２日　秋の追善法要（本年上半期物故者の追善法要）
10月13、14日　加茂神社秋祭りと獅子舞（町内全所帯を巡回し演技）
　28日　親睦バス旅行「白山の秘境を探訪」（青壮年部いずみ会）
11月26日　加茂神社新嘗祭（収穫した新米を献上）
12月30日　加茂神社大祓い

◆御所町の特産品

金腐川の金気の強い土壌から作られた御所の蓮根、くわい、胡瓜は歯応えが良く加賀野菜の代表格として、京阪神では評価が高い。特に蓮根、くわいは「見通しが良く、芽が出る」といわれ縁起がよく京料理のお節料理には欠かせない。

大樋南親町会

◇町会誕生まで

昭和41年に施行された住居表示変更に伴う町名変更で、当町内の大部分が大樋町となったが、それまでは県道清水・小坂線を挟んで金腐川側は小坂町南地内、桜丘高校の山側は御所町地内であった。町内を通過する県道は、古くから戸室山へ通ずる荷車と馬車の往来する道幅の狭い道路で、周辺に稲田、蓮根田や野菜畑が広がり、道路脇には牛の横たわる牧場や材木置場、肥溜（おけば）などの並ぶ極めてのどかな田園地帯であった。

今は70世帯を超える当町会も当時は６、７戸程度で、小坂町南では西元・窪田・宮村などが「小坂町会」に、棒田・谷村・岡山などが「御所町会」に属していた。

また、当時は昭和11年の金沢市編入までは河北郡小坂村に所属し、当町会の現２班の付近に小坂村役場があり、４班付近には小学校、その周りに「にぐりや」（居酒屋）が２軒（山村家・西元家）も立ち並ぶなど小坂村の中心的位置を占めていたそうだ。

◇町会の設立

昭和20年の太平洋戦争終結時から住宅難解消のため当地内に宅地化が進展し、昭和30年に入り、１班・２班地内に次々と住宅が建設され梶田・東・横山・北村・神戸・野村などの家が増えた。やがて、この人たちから新町会設立運動がもちあがり、小坂町会を脱会してこの地に住む人たちだけの新町会を設立することになったそうだ。古参の方々の記憶をたどると、その時期は昭和30年４月頃、初代町会長は野村六郎氏、小坂町南地の「南」と町民の親睦を願って「南親町会」と名付けたそうだ。

その後の宅地化は、４班・５班・６班・７班・８班にまで及び次第に世帯数も増加し、昭和37年に実践第二高校（現星稜高校）が開校されるや同校近くの宅地化が一段と進み当町会で初めて金腐川を隔てた９班が誕生した。

昭和41年、住居表示変更により小坂町南地が大樋町に町名変更となったので町会名も「南親町会」から「大樋南親町会」に改められた。

また、時同じくしてこの付近の御所町地内も大樋町に町名変更されたので、これが契機で新たな町会「大樋桜丘町会」が生まれたが、その後の県道拡幅に伴う住居移転等により住宅戸数が数戸程度に漸減し、平成２年をもって全戸当町会に編入した。

このような経過のなかで、町会長として活躍された方々は、古い順に野村六郎（２期）、東一臣、窪田秀雄（通算５期）、横山甥吉、東田三次郎、小杉兵衛、西野外喜雄、城川良二、竹沢竜雄、加藤清、本郷慶福、宮上義仁、梶田正夫、西元正雄、石下幸雄、浜野一郎、東武美、岡山新誠、新藤裕の各氏だった。

◇活発な町会活動

当町会には隣接町会から羨望される年間行事がいくつかある。その最たるものは毎年行う新年会である。一流料亭を会場に選び、町内女性の出演する日本舞踊などで宴会を盛り上げる雰囲気は格別だ。隔年ごとに行う日帰り旅行も好評とされている行事で、本年は真脇遺跡・九十九湾海中公園・見附海岸などの奥能登バス旅行となった。

このように、新しいイベントを毎年企画するのは、かつての古いしきたりを破り、新しい発想を重視しようとする新町会設立時の考えが今なお残っているからだと思われる。

また、当町会では周辺環境の美化、改善活動にも積極的に取り組んでいる。かつての金腐川は、随所に清水がムックリとなって冷たく湧き出て、川の水は澄み渡り、ウグイ・ゴリ・ナマズ・フナ・モロコ・ウナギ・コイなどが生息し、蛍が飛び交っていた。しかしながら、昭和28年頃から発生した再三にわたる金腐川の氾濫から大がかりな改修工事で川面は一変し、加えて上流の各種開発工事が起因で川水は汚れ、住む魚も少なくなった。更に、県道の交通量は日毎に増加し、今や極限に達する厳しい車の騒音・震動に悩まされている。

当町会では、これらの環境が昔にもどらぬものかと町会の総力を結集して取り組んでいこうと意気込んでいる。

（資料提供：棒田健治氏・加藤清氏・岡山新誠氏　編集：谷村昭雄）

平成13年度町会日帰り旅行（能登半島見附島海岸）

神谷内本町会

1．はじめに

私達が住んでいる神谷内は天平年間に野蚊神社が建立されてから、この社（やしろ）を中心として生きてきたものと思われる。

歴史の変遷と共に、私達の先祖が苦難の道をたどりながら、現在の神谷内が生まれ育ってきたものである。

2．町の沿革

昭和38年に神谷内町内が５町会となり、平成10年に東部環状道路が建設されてからこれまでの狭い道路が４車線となり（現在も工事中である）、また、神谷内 IC が完成すれば付近一帯は大きく変わることと思われる。

3．かみやち保育園

昭和50年４月１日に陸屋根２階建て、延面積626.51㎡で開園し現在も多数の園児たちで賑わっている。

4．野蚊（ぬずち）神社

天平４年４月３日に建立された土地の神様である。鳥居は毘沙門さまのいわれから朱が使用されており戸室山産の赤石である。

また、元禄２年７月15日に俳人松尾芭蕉が野蚊神社が朝廷から勅使が参拝するお宮さんと聞き自ら野蚊神社に参拝した。

そして次の俳句を詠じた。

「うらやまし　浮世の北の　山桜」

5．神谷内の獅子舞

獅子頭が天保５年９月に作られ現在も神谷内５町会の壮青年部によって３年に１度盛大に獅子舞が行われている。（今度は平成15年の秋祭りに行う）

6．神谷内本町会館

平成５年10月10日に完成した。以来神谷内本町の親睦をはかる所として重要な施設である。

また、みんなの憩いの場所としても大いに活用しているところである。

7．神谷内古墳群

国土交通省が平成12年に発掘した資料である。

神谷内古墳群柳橋川が森本丘陵の谷あいから平野部に出る右側の尾根から派生した小尾根（やせ尾根）上に立地する古墳群である。

・神谷内古墳群最大の円墳12号

直径約23mの円墳、現比高差約４m基本的には丘陵削り出しによる築造である。

埋葬施設は２つ存在したと考えられるが盗掘によりほとんど破壊されている。

一つの施設には管玉（くだたま）が２点確認出来、もう一つの施設では鏡（内行花文鏡）、鉄斧、刀子が確認された。

内行花文鏡は後漢末の中国鏡の可能性が高い。

8．おわりに

これから益々の高齢化に伴い、町会行事の参加者が少なくなることが懸念されるため、お年寄りも気軽に参画できる行事を考えていかねばならない。

この歴史ある町会を大事にし子供会、女性会、老人会、壮青年部とが一体になり活気ある町会としたい。

神谷内西町会

☆町会の発足

昭和38（1963）年４月１日　初代町会長野沢茂一氏の尽力にて神谷内町より独立し、設立された。当時は世帯数41軒、人口200名であった。

☆町内の移りかわり

発足当時は旧道を中心に民家が連なっていたが、現在は神谷内～疋田線の開通とともに、神谷内交差点付近にスーパーマーケット、ファーストフード、レンタルビデオの店が軒を連ね繁栄している。法人も24軒になり、世帯人口283名である。

☆集会所の完成

平成３年（1991）年ごろより議題にのぼり、歴代町会長および町内会員の念願であった集会所の完成式が平成13（2001）年４月８日㈰に行われた。当日は天候にも恵まれ、町内会員、各方面よりの来賓の方々など多数のご出席をいただいた。

建物は、鉄筋３階建て、敷地面積100平方メートルで、今後の町内会活動の拠点としたい。

役員会、女性会のお茶会、子ども会の夏休みバーベキュー大会、社会体育大会の慰労会など、すでに各種の会合に利用されている。

☆町内親睦行事

昭和40年代より、『山行き』と称し神谷内山へ登り、たけのこ飯・めった汁・バーベキューを味わい春の一日町内会員の交流を深め、平成３（1991）年ごろまでは、ほとんど毎年のように行っていた。小学生の子どもたちが多数いた昭和50年代には海水浴にも行き、単発的に「もちつき大会」も催していた。

その後、平成９（1997）年には、15年ぶりに「もちつき大会」を復活させた。蒸籠とうす、きねを使っての本格的な「もちつき大会」は平成生まれの子どもたちには、大変珍らしく、年配の人たちには懐しいということで各世代の評判もよく、町内の交流に役立っている。

今年度は初の試みとして「町内グラウンドゴルフ大会」を開催の予定である。

今後は役員一同の力を合せ、新集会所のもと町内会員がまとまり、積極的な町内活動に取り組める町づくりに努めたいと思っている。

☆平成13年度役員名

町会長	村上　清造
副町会長	谷村　秀明
	柄本　良治
	井野　雅子
会　計	毛利　　茂

神谷内中町会

近くの蓮田

な歌声など、楽しませてくれる。又、町内には、少なくなったが、蓮田、田畑などがありオタマジャクシ、カエル、バッタなど虫取りに、夢中になっている子供たちの姿もみられる。

町会の周辺には、スーパーやファーストフードの店があり買い物には便利になった。

現在も、38世帯の小さな町だが、町民同士の連帯も強く近所同士の付き合いもよく、夜回り、ゴミ回収の当番など積極的に参加し、夏のバーベキュー大会で、町民同士の親睦を図っている。

町会の歴史

昭和38年	神谷内本町の９班として発足
当時の世帯	上田氏　橋本氏　坂本氏　亀田氏
昭和39年	宅地整備が行われ、建売住宅が出来る。
昭和40年	世帯数の増加により、世帯数20全戸で本町会と分離 神谷内中町会として発足　２班制 初代会長　坂本利春氏
昭和38年	大雨により、本町会は浸水、中町会も、床下浸水した。 柳橋川の氾濫により、復旧工事も行われた。
平成元年	下水道、ガスが完備され、近くの川も、きれいになった。

町会の組織

昭和55年４月に、町会規約改正により、町会長、副会長、会計の３役、他の役員、各班長は、１年任期、町会全員参加制度になり、お互いに助け合いながら運営を図っている。

町会の特色

中町会には、目立った建物、公園などの施設はないが近くに、昭和50年に開園した、かみやち保育園があり、可愛い散歩姿や、元気

これからの中町会

何処の町会でも、同じかも知れないが、当町会も子供が少なく、小学生８人、保育園児２人の計10人である。

当町会に、若い人が家を建てて、どんどん来てくださるようお願いしたいものである。

又、75歳以上の高齢者の方は、10人である。散歩や庭木の手入れなど、まだまだ、とてもお元気ですが、近くにくつろげる場所があるといいと思う。

子供たちの遊び場もなく、低学年、保育園児は、家の前の道路で遊んでいる。年々車の交通量も増え、遊ぶのも危なくなった。

将来的に、何処か、遊び場が出来たらいいと思う。

子供がいつも遊ぶ道路

神谷内葵町会

町会名の由来

葵建興社が神谷内町の丘陵地に葵団地の名称で造成し、昭和38年に約30戸で神谷内葵町会を設立した。平成５年の住居表示変更により、神谷内町チ、リ、ヨ○○番地が神谷内町葵○○番地に変更され、葵の文字が住所の小字として表記されたのである。

道路の市道編入と舗装

今では考えられないかも知れないが当時道路の大半は私道で、砂利を撒いてある河原のような道であった。急坂の多い道のためすぐ穴ぼこになり、市にお願いし砂利をトラックで運んでもらい町民が協力して穴ぼこを平らにしていた。このため、市へ何回も陳情し、ようやく昭和43年～46年に順次市道に編入され、昭和45年～50年に道路舗装が完成した。

昭和50年道路舗装完成記念

集会場の建設と増築

町会の集会は葵建興社の事務所で行っていたが、議員さんのお力添えにより集会場建設補助金制度を制定してもらい、制度適用第１号として昭和47年土地を借用し集会場を建設した。その後、12班～15班の団地造成により住民人口が増加したため、再度、増築補助金制度を制定してもらい、昭和54年増築が完成したのである。

防犯・防火対策

当町は町会設立初期の頃から防犯、防火対策のため夜回りを行っており、昭和57年に小坂防犯委員会から表彰された。昭和51年には各戸に消火器を買ってもらい防火対策を強化した。簡易水道の貯水タンクは防火水槽を兼ねているが、貯水量が不足していたので昭和62年に児童公園に防火水槽を設置した。

神谷内児童公園

昔、ここは谷間の山田であったが、ここに葵建興社は堰をつくり釣り堀にした。ここを埋立てできたのが昭和57年完成の児童公園である。公園の水飲場の水は、野蚊神社所有の山の裾から引いてきており、昔、この水を「こがねしょうず」と言っていたそうだ。公園の管理は市から委託を受けて当町が担当し、春には町民で草刈りをしている。

電通グラウンドの変遷

神谷内町葵１番地には、電通の野球練習場があり、当町会の運動会などで使用させてもらっていたが、その後、ゴルフ練習場のフロリカに変更され、現在、住宅地に造成中である。完成すれば21戸が当町会へ編入されるもようである。

神谷内５町会とともに

当町は神谷内５町会に属し、団地造成の経緯から先輩町会や議員さんのお世話になり、互いに協力しながら地域の問題解決や発展と融和を図ってきた。それは、バス停近くの歩道橋の建設、神谷内児童公園の造成、本町－野蚊神社間の道路の拡幅、野蚊神社の修築や社務所の改築、獅子舞などである。

町民の和と輪のために

前記のように道路、集会場などの整備、建設などの事業完成や町会設立の区切りの年には様々な記念事業を行った。その第１回目は、昭和43年の市道編入と町会設立５周年記念式典である。現３班の空き地で市長、市議会議長などの方々をお招きし、記念式典と祝賀会を、午後には、こども会と青年会の設立宣言の後、運動会を行い、町民あげて市道編入を祝い、町会発展を誓い合ったのである。

その後、記念事業には手作りの子供みこしや太鼓行列が繰り出された。毎年行われたのは盆踊りで、現在は納涼の夕べに変更された。

世帯数　225戸（平成13年４月現在）

新葵町会

沿　革

当町会は、金沢市神谷内町ハの部及び小坂町北部一帯に広がる地域を昭和41年から葵建興社が造成し第１期工事が完成、翌年４月より分譲が始まり順次工事の進捗と並行して入居者が増大したものである。

当町会の組織は当初神谷内葵町会に加入していたが、昭和44年に町内独自の問題が山積したため町会の創立総会を小坂小学校にて開催し、全員一致で新葵町会が成立した。班の編成も３班でスタートし、現在では19班となり小坂校下一番のマンモス町会となった。

地形及び位置

金沢市の中心から北北東に4.5キロメートルのところで東側が丘陵地帯でありその山麓を南北に走る国道159号線と西側に北陸本線が走る間に挟まれ、河北潟に注ぐ２級河川の金腐川右岸の湿地帯12ヘクタール余りの範囲に位置している。

道路整備

当町会は民間造成業者が行った住宅地のため道路は全て私道であり、道路幅は４m60cmと狭く、しかも隅切りがありません。側溝も市道認定基準に合致していないため市道に格上げされることが出来なかった。昭和45年に道路整備委員会を設置し、道路を市道に格上げするとともに道路舗装を実現することとなり、委員会は目的を達成するために計画の樹立、資金調達（積立金の徴収）、関係機関への陳情を積極的に推進し昭和49年に排水改良工事及び舗装が全域完成した。

集会所の建設

昭和52年に新葵町会集会所が建設され、役員会・班長会の開催や各部（青壮年部、女性部、少年部、新寿会）の総会や委員会に、又１階広場には卓球台があり誰もが活用出来る様になっているので、地域住民の方々も時折利用し大変喜ばれている。

神谷内北児童公園

長い間待ち望んでいた公園が完成したのは平成元年11月である。1,584平方メートル（480坪）と広く、まわりに木や花が植樹されており非常に美しい公園である。公園の管理運営は町会から新寿会に一任している。近郊からは幼稚園や保育園の子供達が先生に引率されよく遊びにくる。基本的には土曜日、日曜日は子供達に開放しており、それ以外の日は新寿会の方たちのゲートボールに、又町会の催し物、例えば盆踊りやバーベキュー大会などに利用している。

将来にむけて

今後は近郊の発展と相俟って当町会も、疋田－御経塚線の開通と更に159号線をまたいで、東部環状線の完成が２～３年後に迫り、山手線のバイパス化が急速に進むものと思われる。

また現在進行中の新幹線工事も約10年後には完成する予定であり、併せて生活道路が金腐川まで延長され、今後の発展が期待されるところである。今後は近郊町会の協力を賜り、町会としても役員・班長会の充実を図り、又歴代町会長の方々との懇談会を開催し、町会発展に邁進していきたいと思うのである。

三池町会

ルーツ

我が家のことであれ村や町のことであれ、そのルーツを辿るということは何となく胸がわくわくし楽しいものである。

私達の町三池町の「いわれ」はというと子供の頃「昔この町には池が３つあって…」何て聞かされた記憶もありますが、どうやら眉唾のようで、遡れば今から1300年程前、大化の改新後の律令時代に朝廷に任命された「郡司」が政務をとる役所である「郡家」が置かれた所であるらしい。

今で言えば「県庁」ならぬ「郡庁」所在地であったということでしょうか。

昭和46年に小坂農協から出された小坂郷土史「小坂の歩み」の中で「三池」は「郡家神祠の古址」（神のやしろ）として紹介されており、また、昭和38年に御所の八塚山保存会の初代代表であった故米澤龍三郎氏の宮内庁に宛てた書簡（趣意書）においても「三池村が加賀国府所在地なりという確証あり」との自説を述べている。

「郡家を『美夜希』と詠み」（日本書紀）「家」は接頭語の「ミ」と「ヤケ」「ヤカ」が合わさったもので、「ミヤケ」→「ミイケ」「三池」となったという説はうなずけるものである。

明治から現代へ

明治22年の石川県庁発表の人口と戸数調べでは、小金村に属する三池村は人口が178人、戸数が33戸とある。

大正２年には北陸本線の全通によって三池町が上と下とに、面積的にはほぼ半分に分断され、そのことが町の発展の大きな障害になったであろうことは想像に難くない。

それでも町勢の活性化に向けた町民の努力と一丸となった町づくりを進める中、今では一戸建ちの戸数が180戸、アパートも30棟、200戸以上を数え、町の人口も1,000人程となった。

文化、スポーツに団結心

こと球技に関しては扱う「球」の大小を問わず絶対の自信を有しているのが我が三池町会、ほぼ総なめといっていい近年の戦績は他町の視線を背中にひしひし感じるほどである。

また、昨年からは秋季祭「山車」が加わり、三池秋祭りの新しい伝統文化の創出もあり三池町民の団結心の現れと言える。

ただ、金沢の食文化を支えてきた加賀蓮根の代表的産地であった三池町から、宅地化の進展と後継者不足によって、町の象徴ともいうべき「蓮田」がその姿を消していくのは寂しい限りである。

21世紀、伸びゆく三池の夢・未来

今、三池が大きく変わろうとしている。

金沢市が進める東金沢駅周辺整備事業を中心にJR線の移設と新駅誕生、北陸新幹線の建設に区画整理事業や都市計画道路疋田・上荒屋線の建設が予定されている。さらには工場跡地の大規模宅造や隣接地での民間大型マンション群の建設等、三池町、東金沢駅を中心に展開する大小プロジェクトの数は十指に迫る勢いで、さながら東金沢副都心構想といっていいくらいである。

三池町など東金沢駅周辺地域はここ５年程の間で瞬く間に変貌を遂げ、その様相は一変することだろう。

上代、政務の中心であったと伝えられるこの三池の地は、1,000年を超える眠りの中から21世紀の今ようやく目を覚まし、飛躍の時を迎えようとしているように思える。

高柳町北親会

〔**概要**〕昭和25（1950）年に日本冶金の敷地の一角に市営住宅として建設され、平屋トタン葺、棟割等の71戸で発足。当時は三池町に通じる道路はなく、通勤通学には畦道を歩き、上水道はなく簡易水道で共同浴場が住民によって運営されていた。

10年を経て市営住宅は払い下げになり、家族の構成年代が変わり多くが増改築され、隣接地にも住宅が建ち、現在は90世帯となっている。

〔**北親会の歩み余話**〕本来の校下（区）は浅野で同校にしばらく通った児童もいたが、小坂がより近いので変更交渉を行なった。尤も当時はまだ田中町に浅野町小学校の低学年用の分校があり〔昭和15（1940）年開設、昭和35（1960）年バス路線開通のため廃校となる〕低学年は同校に通っても良かったのだろうが、その存在を知らされることはなかったらしい。道路や交通手段が便利になったとはいえ、浅野町はやはり遠く感じ、小坂小学校が最善であったと思う。

しかし、一方他の行政等の区割りは依然として浅野になっていて、たまに浅野町公民館に召集がかかり面くらう。又、今年の機構改革で交番の受持ちが小坂に変ったが、これまでの50年間は千木町交番（駐在所）が担当であった。現在、市の職員といえども、当町会が「市営住宅」であったことを知る人はほとんどいなくなり、あとからの住民は尚更の様である。

〔**世帯の構成等**〕にぎやかに子供達の声が聞こえたのは、昭和55（1980）年頃までで、小学生が60名（世帯数100、人口420）いたが、現在は17名（世帯数90、人口307）に激減し、66歳以上は55名と17%を占めるに至っている。

〔**連帯のために**〕創町以来続けられているのは夜回りで、夜9時をすぎると拍子木が響く。夏休み中のラジオ体操は、もともと青年層が親睦のために始めたのが子供会に受継がれた。

昭和50年代迄続いた盆踊りは、見物人の方が多くなってしまい、住民がより多く参加出来る行事として、真夏の一夜にバーベキュー大会が催され、住民の3分の1強が集う。

昨年春に子供みこしを新調。今年4月に子供獅子の寄贈を受けて、秋祭りにはかわいい「獅子舞」が披露された。

〔**展望**〕三池高柳の土地区画整理事業が昨春着工し、日本冶金跡地が宅地開発にかかり、東金沢駅舎が来秋当町寄りに300m移転する。周囲の状況は一変し、便利さは有りがたいが、静かな町内の住環境は守られてほしい。創町50年で孫の世代（3代目）の若い人達が町会運営に参加する様になった。「明るく楽しいまちづくり」のために、住民の期待すること、役員が行なったことがお互いに理解出来る運営を心がけ、次代に受け渡したい。

（松本　明　記）

神宮寺２・３丁目町会

コミュニティセンター

・神宮寺町の由来

いつの時代か明確ではないが、現在の神宮寺町、元町、山ノ上町などの広範囲にわたり大きな「神宮寺」という寺があったと伝えられている。

この寺が、理由は不明だが、平安時代の末期に源義仲（武将、木曽義仲）により、焼き落され、滅没したとされている。

「神宮寺」という寺の名前をとり、神宮寺という村ができたのではないかと思う。後に神宮寺町と表示されるようになったと推察される。

・神宮寺町が住宅地に変わるまで

神宮寺は以前、殆ど、田や畑ばかりの所であった。

昭和34年３月の第１次土地区画整理（神宮寺町と山ノ上町の合同）に始まり、第２次（神宮寺町と元町の合同）、第３次、第４次（神宮寺町）と続き、昭和44年４月に完了するまで10年かかり、現在の区割となった。

その後、急速に住宅が増え、今では、一般住宅だけでも約300世帯あり、マンション、アパートなどを含めると約570世帯になる。

昭和63年８月には、「神宮寺コミュニティセンター」が建造され、地域住民のコミュニティの場として活用されている。

金沢駅と鳴和町を結ぶ東大通りの道路が開通した際、神宮寺町が住居表示改正により神宮寺１丁目から３丁目までに変更になり、東大通りの北側を２、３丁目町会として発足した。

・町会の組織

平成９年３月に町会規約を大幅に改正、現在町会役員は、町会長、副町会長、会計の３役の他、班長、青壮年会長、婦人会長など35名の役員で構成されている。

町会長は２年毎の交替を原則とし、副町会長、会計などほかの役員は１年毎の持ち回りである。

・活動状況

当町会では、住民の「親睦と融和」を目的に、毎年、バーベキュー、グラウンドゴルフ大会を実施している。

特にバーベキューでは、会場となる運動公園に沢山の参加者が集り、ビールを片手にお互に親睦と交流を図っている。

青壮年会では、毎年、納涼盆踊大会を開催している。町会、婦人会、子ども会も協力し、他町会の踊り子さんの応援もいただき、町会をあげて盛大に実施している。

公民館行事のソフトボール大会、社会体育大会などに積極的に参加し、当町会はどの種目でも毎年上位の成績を挙げている。

社会体育大会

イトーピア町会

当マンションは昭和51年10月に建設され、金沢市内の大型マンションの走りとなったもので当時の販売価格は大変高価な物であった。入居者の募集もままならず、伊藤忠の社員や建設下請け業者、関連企業にお願いしても中々埋まらなかったそうだ。

鉄筋コンクリート14階建、部屋数111室、現在の居住所帯数100名、完全分譲型マンションである。

昭和54年10月自主管理組合の設立は自分達のマンションは自分達で管理して行こうとの総意だった。と同時に小坂校下町会への加入は当時の組合理事さん方が町会役員をかねての参加であった。

当町会はマンション全体の居住者で一町会を形成しており家族構成や年代層も千差万別で、利用形態も社宅用、個人貸、本人所有等で中々面白い組み合わせになっている。

過去には小坂公民館主催の行事にも参加していた事も多々あったが居住者のマンション購入意識の変化の中でだんだん下火になり、ここ数年は活動も限られていた。

平成10年４月、町会長に班長から選出された高橋秀典さんを迎え活動の輪を広げるべく、役員、班長さん方が努力され少しずつではあるが社会参加の機運を作り上げるべく奔走された。

平成12年４月これまで町会費は管理費の中から徴収し一括して町会に繰り入れられていたが、年払いと言う自主徴収方法となり、居住者の皆様に負担を強いる事となった。

又、今年（平成13年）４月よりゴミの分別収集が始まり指定集積場の時間制限を設けての実施は苦渋の選択であって、居住者皆様に不便をかけている。

昨年（平成12年）は小坂公民館主催の社会体育大会に参加すべく準備万端、用意をしていたが残念ながら雨で中止となり、今年（平成13年）は長いブランクがあった中で参加する事が出来た。入賞には届かなかったが全競技に参加できたのも居住者皆様のおかげで、子供達と共に楽しい１日を過ごすことができた。

まだまだ諸行事参加の人員は少ないが町会の対外活動の場を広げる事は社会人の務めと自覚して皆様の参加を待っている。

神宮寺みどり町会

〔概　要〕

昭和55年頃、この地域にあったオリエンタルチェン工業㈱が松任へ移転。その跡地に伊藤忠商事によって２棟～３棟のマンションが建設される予定であった。しかし、現在のイトーピアマンション建設後、急に計画が白紙となり、残りの土地が転売され、みどり町会の方は５社連合宅地として「サングリーン神宮寺」の名称で販売された。

昭和56年、日本経済は高度成長時代で、若いカップル、中年層、老人を問わずマイホームの夢があり、立地条件さえ合えば購入し、次々と新しい家が建ち、やがて小さな町ができた。

〔みどり町会の誕生〕

住民全員が外からの寄り集まりで、いろいろと生活するにつれて問題が生じるようになり、市行政へ相談すると早急に町会を作り活動するようにとの指導があった。

そこで57年春に全員に集まってもらい総会を開き、神宮寺みどり町会が誕生した。私（村松松雄）が初代会長に任命されたが、町会の何から手をつければよいか途方に暮れる毎日だったが、当時の校下連合町会長から暖かいアドバイスをいただきながら町会運営に当り、自信をもてるようになった。

〔親睦を深める活動と行事〕

新しい町会のスタートに当り、町民全体の人間関係をよくするためのコミュニケーションを図ることが大切と考えた。市行政よりミニ公園の管理を委託されたので、毎月、班別に分かれて清掃をすることにした。この活動を通して、互いに顔見知りともなり、話し合うことで心が通い合うようになって、現在も続いている活動である。夏には町会行事として、夏祭りを開催し、夕べのひと時を楽しんでいる。

昭和63年には、町対抗バレーボールに優勝し、その後も３位までの入賞は２回ある。最近では、町民の高齢化が進み、公民館行事に参加できないことが多く、非常に残念である。

〔町会設立20周年〕

平成３年には、神宮寺みどり町会設立10周年記念パーティを開催、盛大に行われた。

本年は公民館は50周年、我がみどり町会は20周年とめでたいことが重なり、大変忙しい年となった。

今後共、校下の皆様の暖かいご指導ご鞭撻をお願いしたい。

資料編

小坂公民館略年表

昭和二七（一九五二）年度

・事務所を小坂小学校に置き発足、初代館長に坂井善雄氏就任
・公民館々報が二回発行された
・社会体育大会、敬老会、成人式
・青年学級、婦人学級、生産物品評会、青年産業研究発表会、スクェアダンス、野球大会などが行われた

昭和二八（一九五三）年度

・初めての公民館祭（一一月中旬）
・巡回映画、魚釣り大会、卓球バドミントン大会

昭和二九（一九五四）年度

・昭和二九年度実験公民館指定研究発表会（三月二六日、中央公民館）で「青年学級における学級生の自治活動をどう取り入れるか」を発表
・洗濯講習会、地区懇談会
・校下世帯数六三八戸、公民館負担金　一世帯一ケ月二〇円

昭和三〇（一九五五）年度

・料理講習会、校下作物品評会

昭和三一（一九五六）年度

・市青年産業研究集会（一二月一六日、中央公民館）で「すきま風に見られる農村住宅の封建制」と題して、小林昭一氏（現、南御所町）が研究発表

昭和三二（一九五七）年度

・六月八日㈯小坂小学校で有料映画会「女の暦」「心に太陽を」「力道山とキングコング」

・第一回百万石まつり開催
・内灘射撃場闘争
・アメリカ文化センター開館

・青年学級振興法公布
・医王山系の集中豪雨で災害救助法発動

・国民健康保険制度が金沢市で実施

・白山が国定公園に指定される
・金沢市の人口二七七、二八三人（国勢調査）

・市内に腸チフス、パラチフスが多発

入場料大人三〇円、子供二〇円
・マラソン大会、ダンス講習会

昭和三三（一九五八）年度
・坂井館長、市公連事務局長に就く
・校下人口　四一五二人、世帯数　八九五戸

昭和三四（一九五九）年度
・坂井館長、市公連事務局長継続
・盆踊り、子供会育成、巡回映画

昭和三五（一九六〇）年度
・坂井館長、社会教育功労賞受賞
・公民館々報の発行（一二月）
・生産研究活動、文化祭、ハイキング

昭和三六（一九六一）年度
・岩本義男運営審議会委員長、社会教育功労賞受賞
・有料映画会（七月二九日、小学校）「紅の翼」「男の中の男一匹」入場料大人子供共二〇円

昭和三七（一九六二）年度
・教養文化事業七七、クループ行事二一、体育・レクレーション六四、映画・観劇・展覧会一二、会議等二〇、その他四、開館日数三百日

昭和三八（一九六三）年度
・成人式該当者（三九年一月一五日）男五八、女五一　計一〇九
・備品の購入　カメラ一、映写機一、テープレコーダ一、体育用具四組

昭和三九（一九六四）年度
・市教育委員会に小学校敷地内に公民館建設の陳情書を提出（七月一三日）

・ＮＨＫ金沢放送局、テレビ放送開始
・北陸初の民間テレビ放送開始
・皇太子殿下・美智子様ご成婚
・東大通り全面開通
・大雪のため北陸線マヒ状態（12／31～1／12）
・北美濃地震、金沢震度3で県内死者8、負傷者34
・台風一八号、金沢地方に被害大
・金沢市の人口三〇万人超す
・住居表示法制定
・金沢東別院全焼
・白山国立公園に指定
・三八豪雪、北陸線不通
・小松―東京便開設
・能登線開通

・小学校新校舎竣工に伴い、校舎の一部使用許可願いを教育長に提出、四〇年二月一七日に承認を受ける
・青年学級　週二回　修了者男一〇名、女五名　計一五名
・婦人学級、成人学級各週一回

昭和四〇（一九六五）年度
・上坂孝治視聴覚部長、社会教育功労賞受賞
・公民館々報の発行（年二回）
・スクェアダンス教室

昭和四一（一九六六）年度
・坂井館長、第七代市公連会長に就任（二年任期）

昭和四二（一九六七）年度
・県健民運動実践公民館の指定を受ける
郷土美化運動「川をきれいに団地に花壇を」
・少年球技大会、生け花教室、町対抗球技大会、園芸講座

昭和四三（一九六八）年度
・家庭教育学級、バレー・卓球大会、ソフトボール大会、少年剣道教室、バスハイキング、麻雀大会
・郷土美化運動二年目

昭和四四（一九六九）年度
・健民運動実践指定公民館三年目
・親子バレーボール大会、歌唱教室、講演会、交通安全教室

昭和四五（一九七〇）年度
・第二代館長に二木由郎氏就任
・島村　隆運営審議会委員長、社会教育功労賞受賞

・新潟大地震
・東京オリンピック開催
・市内バス料金15円から20円に値上げ
・犀川ダム満水式
・小坂小学校改築落成式
・市内電車全面廃止
・市史年表「金沢の百年」刊行
・県中央公園の開園
・自衛隊ジェット機泉二丁目に墜落
・浅野下水処理場始動
・健民海浜公園プール開設
・城北体育館完成
・金沢港開港

・坂井善雄前館長、前市公連会長として市公民館功労賞受賞
・牧野外茂二主事、県公民館優良職員として表彰される
・老人学級の開設
・公民館運営審議委員は各町々会長を含めた各種団体長に編成替えされた

昭和四六（一九七一）年度
・婦人学級が県指定事業として開催
・交通安全講習会の開催

昭和四七（一九七二）年度
・高齢者学級の開設
・水泳大会
・公民館建設についての会合開く（四八年三月一五日）

昭和四八（一九七三）年度
・定例委員総会　小金保育園で開催（五月九日）
・公民館建設委員会臨時総会（十月二四日）
　会　長　二木由郎
　副会長　棒田二作（町会連合会々長）
　〃　住田節子（婦人会々長）
・ボウリング大会、写生会

昭和四九（一九七四）年度
・公民館、児童館が新築落成
　名　称　小坂社会文化センター
　建設費　五、九五〇万円
　床面積　公民館　三三八㎡
　　児童館　一八五㎡
　　合　計　五二三㎡
・成人式を公民館で開催

・河北潟干拓工事完成
・大阪万国博覧会
・北鉄金石線廃止
・北陸自動車道金沢西―小松間開通
・神谷内葵町会集会場建設
・26日間降雨なく県内水不足となる
・日本海博覧会開催
・県立野球場完成
・市内バス料金40円から50円に

昭和五〇（一九七五）年度

・校下少年連盟の再結成（六月二九日）　委員長　松本　寛　以下五五名
・校下団体連絡協議会の発足（八月二四日）　会長　棒田二作
・牧野外茂二副館長　社会教育功労賞受賞
・高齢者サロン、民謡・園芸教室、健全少年まちづくり、親子対話教室、新年互礼会、立志のつどい、第一回町対抗駅伝
・教室（習字、算盤、剣道、人形、生花、料理）
・一七町会、一七四九世帯、公民館負担金　一世帯年額三六〇円

昭和五一（一九七六）年度

・石川県優良公民館賞受賞
・八ミリ映画　小坂特産「松花の出来るまで」を制作
・立山登山（八月一〇日）参加者　九八名
・県指定事業　「せせらぎ婦人学級」
・成人式の出席者　男二四、女三七、計六一（出席率　五五％）
・工作教室（九～一二月）、早朝ハイキング
・公民館利用状況
　館主催　五九一回、利用延人数一六、六八九名
　貸館　一二二回、利用延人数　八、七七二名

昭和五二（一九七七）年度

・小坂公民館表彰規定の制定
・青少年育成を青年部、少年部に分割
・小坂校下連合青年団再結成　団長　蔵元益男
・国の特定事業「親子公民館活動」
　1、スポーツ、工作グループ
　2、歴史探訪クループ
　3、読書グループ
・委託事業「青年セミナー」（ヤングサロン）
・親と子の読書活動　講師　中村房枝先生（小坂小学校）

・高柳住宅町会が「高柳町北親会」に町会名を変更
・北陸自動車道福井―富山間開通
・兼六園有料化
・甲子園で星稜高校がベスト4（県下初）
・金沢市の人口四〇万人超す
・白山スーパー林道開通
・一里野温泉スキー場オープン
・北陸地方大雪、金沢で一二六cm
・新葵町会集会所建設

・校下盆踊り大会（八月二三、二四日）
・指定事業発表会（三月）
・校下歴史探訪、囲碁大会
・定例教室（英会話、煎茶、リフォーム）

昭和五三（一九七八）年度

・竹林健仁運営審議会委員　第二六回社会教育功労賞受賞
・村池久一氏　永年勤続役職員表彰（市）
・市視聴覚教育作品発表会「れんこんと小坂」八ミリ映画
・自主高齢者学級「校下の文化遺産発掘と地場産業の実態調査」
・児童館三階遊戯室の増築完成（五四年三月）
・バスハイキング、版画教室、親子ボウリング教室
・文化祭での表彰者数　団体二、個人二七名

昭和五四（一九七九）年度

・二木由郎館長、社会教育功労賞受賞
・浄化槽の改修
・校下少年連盟からピアノ一台（四二万円）、トランシーバー一組寄贈あり、贈呈式　七月二九日
・同日、小坂児童合唱団の結成
・市ソフトボール大会で優勝
・校下婦人会が自転車教室で団体優勝、西野妙子さんが個人優勝
・立山登山、交通安全教室
・市公民館大会で研究発表「環境浄化活動と健全少年の組織づくり」

昭和五五（一九八〇）年度

・老人憩いの家　増築
・松本　寛　運営審議会委員、社会教育功労賞受賞
・教養講座

・高柳町北親会館建設
・金沢で観測史上二番目の気温三八・〇度（明治三五年に三八・五度）
・県立武道館完成
・金沢市制九〇周年
・金沢市民憲章制定
・東山―東大通り開通
・星稜―箕島延長18回の勝負（3―4）
・冷夏
・イトーピア町会（二一世帯）が結成され、町会連合会に加入

昭和五六（一九八一）年度

・親子クラブ発足　初代会長　宮　川　国　子
・昭和四三年からの少年剣道教室が中止となる（九月）
・尺八、民謡教室、読書会の開催

昭和五七（一九八二）年度

・第三代館長に吉田孝二氏就任
・開館三〇周年記念事業の開催
・一八町会、二、一七八世帯、負担金一世帯年額七百円
・学童保育の発足
・委託事業「バレーボールの振興」
・指定事業「広報活動」「青少年健全育成」
・自主事業「高齢者・成人・婦人教育」
・詩吟教室

昭和五八（一九八三）年度

・島村　隆氏、市公民館優良職員表彰
・駐車場の舗装工事施工（八月）
・特別企画講座「郷土の歴史と産業について」全四回
　1、地名の由来　2、町の変遷　3、産業と交通　4、人物と伝説
　講　師　郷土史家　森　栄松先生
・第一回小坂っ子夏祭り
・ゲートボール

昭和五九（一九八四）年度

・校下クリーンキャンペーン（八月）
・ママさんソフトボール大会（九月）
・ファミリーボウリング大会（三月）
・健康講座、法話会

・56豪雪
・三池町会が一つにまとまる
・金沢市新庁舎完成
・神宮寺みどり町会（三〇世帯）が結成され、町会連合会に加入
・能登海浜道路全線開通
・能登島大橋開通
・日本海中部地震
・第三四回全国植樹祭（県森林公園）
・石川県立美術館完成
・コアラ公開
・新一万円札発行
・長野県西部地震
・兼六園、国の特別名勝に指定

昭和六〇（一九八五）年度
・綱引き大会
・ダンス教室、婦人教養講座

昭和六一（一九八六）年度
・第四代館長に坂本作二氏就任
・文集「小坂文春」創刊号発行
・ゲートボール教室、手まり教室

昭和六二（一九八七）年度
・公民館全体改修工事（四～六月）
・八ミリ映画の制作「小坂とレンコン」
・講演会「親の心、子の心」三回シリーズ

昭和六三（一九八八）年度
・子供工作教室
・文化祭は中止された

平成元（一九八九）年度
・金沢市制百周年記念の太鼓・旗行列に参加
・ヤングサロン、フォークダンス教室、子供礼法教室、蓮の実学級

平成二（一九九〇）年度
・第五代館長に辻　久雄氏就任
・三世代間交流事業「小坂さわやかフェスタ」合同講演会
・国庫補助事業「婦人学級」

平成三（一九九一）年度
・城北ブロックスポーツフェスティバルを企画、開催（八月一八日）
・第四六回国民体育大会「石川国体」秋季大会で野点席（一〇月一二～一七日）

・河北潟干拓事業完成
・全国高校総体、県内で開催
・能登沖地震（M5.9）
・旧小坂村金沢市編入五十周年記念
・四高開学百年祭
・国鉄分割民営化、JR西日本金沢支社スタート
・第三セクター「のと鉄道」開業
・「神宮寺コミュニティセンタ」建設
・北鳴中学校の開校
・オーケストラアンサンブル金沢創設
・昭和天皇崩御
・消費税3％導入
・神谷内北児童公園が完成
・金沢市制百周年記念太鼓・旗行列を行う
・小坂町第一町会会館が落成
・市営球場・サッカー場完成
・雲仙普賢岳噴火
・東部環状道路起工式

・お茶を楽しむ会

平成四（一九九二）年度

・副館長三人制となる
・竹垣補修、煙感知器取換工事

平成五（一九九三）年度

・事務室、二階談話室の改装工事
・新しい公民館の就業規則の承認
・まち推進事業＝小坂さわやか夏祭り（夏祭りとフェスティバルを合せた三世代交流事業）
・校下史跡めぐり　・親子松花つくり教室
・町対抗グラウンドゴルフ大会

平成六（一九九四）年度

・施設整備として、ホールの机の入替
・まち推進事業「グラウンドゴルフ大会・親子ＧＧ大会」
・ポカポカ運動教室、すこやか料理教室、ニュースポーツ大会

平成七（一九九五）年度

・施設整備として、ホールの椅子を新調
・特定退職金共済制度に加入

平成八（一九九六）年度

・第六代館長に石見義之氏就任
・施設整備として、火災報知機の取換工事
・まち推進事業「史跡めぐり・陶芸教室・文化祭＆特産品祭り」
・校下自主防災会の結成（一二月一二日、市内二〇番目）

平成九（一九九七）年度

・町推進事業の継続「地域めぐりウォークラリー・文化祭＆特産品祭り」

・第四六回国民体育大会「石川国体」
・市社会教育課を生涯学習課に改称
・第七回国民文化祭石川'92開催
・神谷内本町会館が完成
・皇太子殿下・雅子様御成婚
・冷夏で大凶作
・北海道南西部沖地震
・第二回全国菓子博開催
・半透明ゴミ袋導入
・阪神淡路大震災（一月一七日）
・星稜高校甲子園で準優勝
・大樋桜ヶ丘町会が大樋南親町会と合併校下の町会数一七となる
・中核市に移行
・第十六回全国豊かな海づくり大会
・消費税５％にあがる

・スポーツの振興・ソフトバレーボール大会

平成一〇（一九九八）年度

・小坂地区市民震災大訓練（八月二三日）
・小坂さわやか夏祭り、マナーを良くする運動、健康づくり教室

平成一一（一九九九）年度

・まち推進事業「八塚山探訪・小坂さわやかフェスタ」
・マナーを良くする運動　・健康づくり教室

平成一二（二〇〇〇）年度

・まち推進事業「華麗なる獅子舞の競演・世代間交流グラウンドゴルフ大会」
・自主防災訓練
・マナーを良くする運動　・健康づくり教室

平成一三（二〇〇一）年度

・校下赤十字奉仕団の結成（七月二二日）
・公民館五〇周年記念社会体育大会（九月二三日）
・公民館五〇周年記念文化祭（一〇月二八日）
・自主防災訓練（消防・赤十字救護奉仕団との合同研修）一一月一八日
・小坂公民館創設五〇周年記念式・記念史誌の発行（平成一四年三月一七日）
・小坂小学校々下町会数一七、公民館登録世帯数二、五五五

・長野冬季オリンピック
・県畜産センターで世界初「クローン牛」二頭誕生
・旧町名「主計町」が全国初復活
・いしかわ動物園開園
・一五年ぶりの大雪（金沢積雪八五㎝）市民生活・交通網混乱（一三年一月一五日）
・神谷内西町会集会場完成（四月九日）
・夢みどりいしかわ２００１
・金沢城址公園「菱櫓」「五十間長屋」「橋爪門続櫓」が再建、金沢城公園に改称
・ニューヨーク中枢同時テロ（一三年九月一一日）

歴代館長名簿

坂井善雄　昭和27年4月1日～昭和45年1月31日　17年10カ月

二木由郎　昭和45年2月1日～昭和56年3月31日　10年2カ月

吉田孝二　昭和56年4月1日～昭和61年3月31日　5年

坂本作二　昭和61年4月1日～平成2年3月31日　4年

辻　久雄　平成2年4月1日～平成8年3月31日　6年

石見義之　平成8年4月1日～

歴代副館長名簿

樋口友重　昭和32年4月1日～昭和39年3月31日　7年

上坂孝治　昭和43年4月1日～昭和44年6月26日　1年3カ月

牧野外茂二　昭和48年4月1日～昭和56年3月31日　8年

松本　寛　昭和56年4月1日～昭和57年9月30日　1年6カ月

坂本作二　昭和60年4月1日～昭和61年3月31日　1年

上出外喜雄　昭和61年4月1日～昭和63年3月31日　2年

辻　久雄　平成元年4月1日～平成2年3月31日　1年

谷村玉枝　平成4年4月1日～平成6年3月31日　2年

林　劭　平成4年4月1日～平成8年3月31日　4年

松井清明　平成5年4月1日～

竹川操枝　平成8年4月1日～

小嶋外志夫　平成8年4月1日～

児童館館長名簿

二木由郎（兼務）　昭和50年4月1日～昭和56年3月31日　6年

吉田孝二（兼務）　昭和56年4月1日～昭和61年3月31日　5年

坂本作二（兼務）　昭和61年4月1日～昭和62年5月31日　1年2カ月

延村茂憲　昭和62年6月1日～

歴代主事名簿

谷村邦子　昭和27年4月1日～昭和27年11月17日　7カ月

延村外志栄　昭和27年11月18日～昭和28年1月　2カ月

田中外江　昭和28年1月～昭和31年3月31日　3年

中島啓誠　昭和32年4月1日～昭和35年3月31日　3年

大窪長義　昭和35年4月1日～昭和39年3月31日　4年
牧野外茂二　昭和39年4月1日～昭和46年3月31日　7年
延村茂憲　昭和46年5月1日～昭和50年1月31日　3年9カ月
小坂忠一郎　昭和50年2月14日～昭和55年3月31日　5年1カ月
竹川良一　昭和55年4月1日～昭和58年3月31日　3年
宮本潔　昭和58年4月1日～昭和60年3月31日　2年
蔵元益男　昭和60年4月1日～平成元年2月28日　3年11カ月
小竹譲　平成元年4月1日～

歴代事務員名簿

池田セツ　昭和50年4月1日～昭和54年3月31日　4年
角谷翠　昭和54年4月1日～昭和57年3月31日　3年
森田代利子　昭和57年4月1日～昭和61年3月31日　4年
滝幸子　昭和62年4月1日～平成4年3月31日　5年
山下明子　平成4年4月1日～平成9年3月31日　5年
北本節子　平成9年4月1日～平成13年3月31日　4年
小坂恭子　平成13年4月1日～

歴代各部長

昭和27年
総務　山口喜一
教養　出坂一衛
図書　平石利親
産業　棒田伊一郎
厚生　樋口友重
生活改善　東円慶美子
視聴覚教育　神保外巳雄
総務　山口喜一
教養　出坂一衛
図書　出島功
産業　棒田伊一郎
厚生　樋口友重
生活改善　東円慶美子
視聴覚教育　神保外巳雄
総務　樋口友重
教養　出坂一衛
図書　山口喜一
産業　西野九蔵
厚生　上山時雄
生活改善　井上アイ
視聴覚教育　神保外巳雄
総務　出島時夫
教養　山口喜一
図書　出坂一衛
産業　出島功
厚生　樋口友重
生活改善　井上アイ
視聴覚教育　上坂孝治
総務　出島時夫
教養　根布正治
図書　辻久雄
産業　出島功
厚生　樋口友重
生活改善　神保清子
視聴覚教育　上坂孝治
総務　牧野外茂二
教養　島村隆
図書　小堀次覚
産業　出島功

昭和33年
厚生　新川栄作
生活改善　出島智子
視聴覚教育　上坂孝治

昭和34年

昭和35年
総務　北川三秋
教養　谷村喜代志
産業　本甚三郎
厚生　小坂市之丞
生活改善　三東とよ
視聴覚教育　上坂孝治

昭和36年
厚生　小坂市之丞
生活改善　太田玉枝
視聴覚教育　上坂孝治

昭和37年
視聴覚教育　上坂孝治

昭和38年
視聴覚教育　上坂孝治

昭和39年
視聴覚教育　上坂孝治

昭和40年
視聴覚教育　上坂孝治

昭和41年
総務　小坂永吉
教養　谷村喜代志
産業　長東茂雄
厚生　宮川健一
生活改善　安島美津江
視聴覚教育　上坂孝治

昭和42年
総務　谷村喜代志
教養　佐々木正樹
産業　長東茂雄
厚生　竹田仲吉
視聴覚教育　上坂孝治

昭和43年
総務　谷村喜代志
教養　佐々木正樹
産業　長東茂雄
厚生　小竹譲
生活改善　出坂スミ子
視聴覚教育　上坂孝治

昭和44年
総務　長東茂雄
教養　佐々木正樹
厚生　小竹譲
生活改善　菊田絹子
視聴覚教育　池下長蔵

昭和45年
総務　掛場一雄
一般教養　谷村喜代志
社会体育　上出外喜雄
老人福祉　林伊一郎
青少年育成　佐々木正樹
婦人　住田節子
交通安全　田中古一
総務　小竹譲

昭和46年
一般教養　谷村喜代志
社会体育　上出外喜雄
老人福祉　林伊一郎
青少年育成　佐々木正樹
婦人　住田節子
交通安全　田中古一
総務　小竹譲
一般教養　谷村喜代志
社会体育　上出外喜雄
老人福祉　林伊一郎
青少年育成　林憲次
婦人　坂野かおる

昭和47年
総務　小竹譲
一般教養　谷村喜代志
社会体育　上出外喜雄
老人福祉　林伊一郎
青少年育成　上出外喜雄
婦人　住田節子
交通安全　高窪信雄
総務　小竹譲
一般教養　谷村喜代志
社会体育　山内喜代志
青少年育成　上出外喜雄

昭和48年
交通安全　高窪信雄
総務　小竹譲
一般教養　谷村喜代志
社会体育　長東茂雄
老人福祉　林伊一郎
青少年育成　上出外喜雄
婦人　住田節子
交通安全　高窪信雄
総務　小竹譲
一般教養　谷村喜代志
社会体育　長東茂雄
老人福祉　林伊一郎
青少年育成　上出外喜雄
婦人　住田節子
交通安全　高窪信雄
総務　小竹譲
一般教養　谷村喜代志
社会体育　山内喜代志
青少年育成　上出外喜雄

昭和50年
総務　小竹譲
一般教養　谷村喜代志
社会体育　山内喜代志
青少年育成　上出外喜雄
婦人　吉田倭子
視聴覚　延村茂憲

昭和51年
総務　中野清
一般教養　谷村喜代志
社会体育　山内喜代志
青少年育成　蔵元益男

昭和52年
総務　小竹譲
婦人　吉田倭子
文化　谷村喜代志
社会体育　山内喜代志
青年　蔵元益男

昭和53年	婦人	住田節子
	少年	上出外喜雄
	総務	小竹譲
	文化	小竹譲
	社会体育	山内喜代志
	青年	蔵元益男
	婦人	住田節子
	少年	上出外喜雄
昭和54年	総務	中野清
	文化	小坂外雄
	社会体育	竹川良秀
	青年	蔵元益男
	婦人	住田節子
	少年	上出外喜雄
昭和55年	総務	中野清
	文化	谷村喜代志
	社会体育	竹川良秀
	青年	蔵元益男
	婦人	住田節子
	少年	上出外喜雄
昭和56年	総務	山本栄一
	文化	上出外喜雄
	社会体育	井上寛司
	青年	田原常四朗
	婦人	越村喜多子
	少年	蔵元益男
昭和57年	総務	山本栄一
	文化	上出外喜雄
	社会体育	井上寛司
	高齢者	中野清
昭和58年	青年	田原常四朗
	婦人	前明美
	少年	蔵元益男
	総務	竹川良秀
	文化	上出外喜雄
	社会体育	林劭
	高齢者	坂本作二
	青年	小嶋外志夫
	婦人	田中茂子
	少年	西村正美
昭和59年	総務	竹川良秀
	文化	小嶋外志夫
	社会体育	林劭
	高齢者	坂本作二
	青年	林助三郎
	婦人	田中茂子
	少年	柳瀬邦夫
昭和60年	総務	竹川良秀
	文化	小嶋外志夫
	社会体育	中条進
	高齢者	新田外志男
	青年	林助三郎
	婦人	田中茂子
	少年	西田光広
昭和61年	総務	新田外志男
	文化	境雅幸
	社会体育	中条進
	高齢者	加藤健三
	青年	近本嘉彦
	婦人	谷村玉枝
昭和62年	少年	小嶋外志夫
	総務	新田外志男
	文化	境雅幸
	社会体育	中条進
	高齢者	増井賢次郎
	青年	近本嘉彦
	婦人	谷村玉枝
	少年	小嶋外志夫
昭和63年	総務	新田外志男
	文化	山下義見
	社会体育	中外茂男
	高齢者	林劭
	青年	田中邦夫
	婦人	川尻節子
	少年	山田正一
平成元年	総務	新田外志男
	文化	船木義忠
	社会体育	中外茂男
	高齢者	林劭
	青年	田中邦夫
	婦人	川尻節子
	少年	山田正一
平成2年	総務	林劭
	文化	山田正一
	社会体育	田中邦夫
	高齢者	東一臣
	青年	棒田剛
	婦人	竹川操枝
	少年	大山三樹夫
平成3年	総務	林劭

文化　山田正一
社会体育　田中邦夫
青年　棒田剛
婦人　竹川操枝
少年　大山三樹夫

平成4年
総務　棒田剛
文化　山田耕一
社会体育　田中邦夫
青年　小林雅治
婦人　竹川操枝
少年　角地茂夫

平成5年
総務　小嶋外志夫
文化　山田耕一
社会体育　田中邦夫
青年　小林雅治
少年　角地茂夫

平成6年
総務　小嶋外志夫
文化　山田耕一
社会体育　田中邦夫
青年　小林雅治
女性　町田由美子
少年　角地茂夫

平成7年
総務　小嶋外志夫
文化　山田耕一
社会体育　田中邦夫
青年　小林雅治
女性　町田由美子
少年　長谷川弘洋

平成8年
総務　小嶋外志夫
文化　山田耕一
社会体育　田中邦夫
青年　小林雅治
女性　町田由美子
少年　長谷川弘洋

平成9年
総務　小嶋外志夫
文化　山田耕一
社会体育　田中邦夫
青年　村上豊
女性　町田由美子
少年　長谷川弘洋

平成10年
総務　小嶋外志夫
文化　山田耕一
社会体育　田中邦夫
青年　村上豊
女性　町田由美子
少年　長谷川弘洋

平成11年
総務　小嶋外志夫
文化　山田耕一
社会体育　田中邦夫
青年　村上豊
女性　町田由美子
少年　長谷川弘洋

平成12年
総務　小嶋外志夫
文化　山田耕一
社会体育　田中邦夫
青年　村上豊
女性　町田由美子
少年　長谷川弘洋

平成13年
総務　小嶋外志夫

歴代運営審議会委員

文化　山田耕一
社会体育　田中邦夫
青年　村上豊
女性　町田由美子
少年　松田和之

昭和27年
吉田喜三郎　岩本義男
村上金雄　掛場与一
宮下磯永　田形平八郎
笠間外次　橘あや
宮口正義　深山みどり
下坂小一郎　村上正久
森田勝久　山田仁作
西村清次郎　竹内英雄
入口久治　山本敬三
表豊次郎　東円三郎

昭和28年
吉田喜三郎　岩本義男
掛場一雄　東円慶美子
北川三秋　藤沢義雄
宮下磯永　越川保太郎
平石利親　西野九蔵
出坂一衛　小坂永吉
三村忠孝　神保外巳雄
森田勝久　山田仁作
高野善太郎　小坂幸一

昭和29年

山本敬三　本田健吉

清水清治　岩本義男

井上アイ　北川三秋

上宮次作　掛場与一

宮下磯永　山田初清

山口喜一　樋口友重

小坂永吉　坂本利春

山田仁作　上山時雄

棒田伊一郎　長東茂雄

山本敬三

昭和30年

清水清治　岩本義男

北川三秋　牧野外茂二

小林昭一　井上アイ

石見幸作　本　甚三郎

山口喜一　樋口友重

出坂一衛　小坂永吉

辻久雄　大野松治

山田仁作　棒田伊一郎

昭和31年

清水清治　岩本義男

高村政章　神保清子

北川三秋　牧野外茂二

石見幸作　本　甚三郎

樋口友重　出島功

小坂永吉　辻久雄

出島時夫　山田仁作

上宮次作　棒田伊一郎

野村六郎　本田健吉

昭和32年

清水清治　岩本義男

高村政章　神保清子

北川三秋　石見幸作

本　甚三郎　小堀次覚

樋口友重　出島功

小坂永吉　西門勲

宮村誠一　山田仁作

上宮次作　東川三郎

池下長蔵　本田健吉

昭和33年

木下久雄　岩本義男

山本喜久子

昭和34年

木下久雄　岩本義男

長田清子　北川三秋

昭和35年

木下久雄　岩本義男

山田実　三東とよ

北川三秋　多門千秋

山口喜一　小坂外次郎

山田仁作　東　正久

窪田秀雄　島村　隆

松本信久　本田健吉

西門勲　西野九蔵

神保外巳雄

昭和36年

木下久雄　岩本義男

太田玉枝　北川三秋

島村隆　本田健吉

昭和37年

木下久雄　岩本義男

太田玉枝　北川三秋

島村隆　本田健吉

昭和38年

西浦源次郎　岩本義男

宮川健一　小村美智子

土田義則　出島敬識

中茶六郎　西村太一

宮本貞吉　中野茂

横山甥吉　島村隆

野沢茂一　松本信久

本田健吉　松田外喜雄

棒田二作　掛場与一

昭和39年

西浦源次郎　岩本義男

島村隆　上出外喜雄

小村美智子　土田義則

出島敬識　小坂善作

中茶六郎　西村太一

宮本貞吉　中野茂

濱田秀雄　西村二初

野沢茂一　吉田久直

石見幸作　北村勇

牧野外茂二　棒田二作

掛場与一

昭和40年

松原潤一　島村隆

小村美智子　山本敬三

土田義則　出島敬識

昭和41年

小坂善作	二木由郎	棒田二作
西村太一	宮本貞吉	北村勇
高窪信雄	横山甥吉	牧野外茂二
西村二初	野沢茂一	吉田久直
吉田久直	石見幸作	神保外巳雄
北村勇	牧野外茂二	棒田二作
棒田二作	神保外巳雄	松原潤一
松本明	島村房子	島村隆
山本敬三	小坂善作	二木由郎
二木由郎	笠島栄三郎	宮本貞吉
宮本貞吉	高窪信雄	神保外巳雄
神保外巳雄	東田三治郎	西村二初
西村二初	野沢茂一	吉田久直
吉田久直	石見幸作	藤沼忠七
藤沼忠七	牧野外茂二	棒田二作

昭和42年

由雄次吉	村池久一	山本敬三
宮野宗一	宮本貞吉	掛場一雄
宮村誠一	野沢茂一	石見幸作
品田末治	棒田二作	中山宏
吉田久直	才田外次	東田三治郎
高窪信雄	新保良一	小坂善作
村本邦子	島村隆	

昭和43年

由雄次吉	村池久一	武内与八
小坂善作	宮本貞吉	林伊一郎
宮野宗一	宮本貞吉	新保良一
中越繁利	東一臣	高山政次
吉田久直	幸崎繁雄	由雄次吉
住田節子	土田義則	宮本貞吉
神保外巳雄	照田武男	山下孝敏
高林直松	竹林健仁	田形平八郎
谷口久信	村池久一	住田節子
林伊一郎	土田義則	宮本貞吉

昭和44年

由雄次吉	村池久一	棒田仁作
島村隆	棒田二作	竹林健仁
野沢茂一	六斗兵治	掛場一雄
宮本貞吉	宮野宗一	小坂善作
村本邦子	島村隆	駒崎稔
武内与八	林伊一郎	駒崎稔
小坂善作	中越繁利	東一臣
高山政次	高窪信雄	高窪信雄
掛場一雄	宮本貞吉	林伊一郎
駒崎稔	高窪信雄	住田節子
村池久一	上口映治	東川三郎

昭和46年

寺島英吾	三浦孝一	坂本利春
高山政次	高窪信雄	窪田秀雄
神保外巳雄	細川敏夫	高林直松
山下孝敏	竹林健仁	根布正治
島村隆	棒田仁作	武内与八
志賀吉政	掛場一雄	宮本貞吉
多田馮児	山下孝敏	加地甚蔵
竹林健仁	竹川良一	寺島英吾
西野九蔵	上口映治	村池久一
住田節子	棒田仁作	島村隆

昭和47年

村池久一	田中古一	小坂藤衛
駒崎稔	新田義雄	小杉兵衛
高山政次	高窪信雄	林伊一郎
宮本貞吉	掛場一雄	棒田仁作
島村隆	志賀吉政	宮本貞吉
多田馮児	山下孝敏	竹林健仁
加地甚蔵	坂本利春	吉田孝二
寺島英吾	竹川良一	棒田仁作
村池久一	上口映治	島村隆
住田節子	武内与八	棒田二作
駒崎稔	宮本貞吉	岡山新一男
林伊一郎	掛場一雄	田中千秋
坂本利春	高林直松	竹林健仁
高山政次	山下孝敏	細川敏夫
高窪信雄	神保外巳雄	棒田二作

昭和48年

上田東司　加地甚蔵
吉田孝二　竹林健仁
田中徹　竹川良一
西野九蔵

若崎一郎　島村隆
村池久一郎　神川利男
竹林健仁　棒田仁作
多門千秋　田中古一
住田節子　林伊一郎
山田初雄　加藤俊一
小坂藤衛　宮野宗一
河内吉雄　出坂嘉彦
西元正栄　小杉兵衛
住田節　新田義雄
神野伊佐美　高山政次
野沢一男　上田東司
高林直松　吉田孝二
竹林健仁　田中徹
田形平八郎

昭和49年

若崎一郎　島村隆
村池久一郎　神川利男
竹林健仁　棒田仁作
田中古一　住田節子
林伊一郎　松本寛
加藤俊一　小坂藤衛
宮野宗一　河内吉雄
西元正栄　西野外喜雄
小林吉明　神野伊佐美

昭和50年

高山政次　野沢一男
高林直松　吉田孝二
長東茂雄　荒井政英
若崎一郎　島村隆
山田初雄　竹林健仁
米澤利久　村池久一
田中古一　住田節子
棒田仁作　多門千秋
山田初雄　竹林健仁
米澤利久　村池久一
林伊一郎　松本寛
加藤俊一　小坂藤衛
山瀬登　河内吉雄
宮本貞吉　武内外志夫
西野外喜雄　住田峰
小林吉明　伊藤武男
坂本利春　高林直松
高山政次　野沢一男
坂本利夫　長東茂雄
松下利春　高林直松
西田外志男　薮内象一郎

昭和51年

洲崎明　島村隆
米澤利久　村池久一
山田初雄　竹林健仁
棒田仁作　多門千秋
田中古一　住田節子
林伊一郎　松本寛
加藤俊一　小坂藤衛
野川義雄　河内吉雄
宮本貞吉　武内外志夫
城川良二　山本一郎

昭和52年

洲崎明　島村隆
米澤利久　村池久一
山田初雄　竹林健仁
棒田仁作　多門千秋
田中古一　住田節子
林伊一郎　松本寛
加藤俊一　小坂藤衛
野川義雄　河内吉雄
宮本貞吉　武内外志夫
坂本利春　高林直松
大谷勇蔵　樋爪豊吉
小林吉明　伊藤武男
北野外二　宮松信重
坂本利春　高林直松
大谷勇蔵　樋爪豊吉
小林吉明　伊藤武男

昭和53年

洲崎明　島村隆
米澤利久　村池久一
山田初雄　竹林健仁
棒田仁作　西野俊男
田中古一　住田節子
林伊一郎　松本寛
加藤俊一　出坂一衛
野川義雄　西村太一
渡瀬進　柴田徳二
前寿時正　宮川健一
坂本利春　高林直松
大谷勇蔵　樋爪豊吉
小林吉明　神保巳雄外
城川良二　谷村昭雄
宮本貞吉　山村直松
野川義雄　西村太一
加藤俊一　出坂一衛
林伊一郎　松本寛
田中古一　住田節子
棒田仁作　西野俊男
山田初雄　竹林健仁
米澤利久　村池久一
洲崎明　島村隆

宮本貞吉　山村直松
窪田秀雄　谷村昭雄
小林吉明　神保外巳雄
入口久雄　樋爪豊吉
坂本利春　高林直松
川北秀雄　谷内田一男
小松謙二　石原正

昭和54年

堀内修三　島村隆
米澤利久　村池久一
山田初雄　竹林健仁
棒田仁作　西野俊男
田中古一　住田節子
林伊一郎　松本寛
加藤俊一　出坂一衛
野川義雄　西村太一
長東茂雄　越村喜多子
高林直松　西野俊男
山田初雄　竹林健仁
米澤利久　村池久一
堀内修三　島村隆
谷内田一男　西田外志男
田形平八郎　長沢湘治

昭和56年

村田健一　吉田孝二
入口久雄　樋爪豊吉
小林吉明　宮川達夫
竹沢竜雄　谷村昭雄
宮本貞吉　棒田好雄
宮丸嘉男　西村太一
松本寛　出坂一衛
小竹譲　加藤俊一
池田良幸　島村隆
米澤利久　村池久一
山田初雄　竹林健仁
亀田五一　谷畑宗一
赤尾史郎　二階堂行史
村松松雄　蔵本松雄
高窪信雄　加藤松太郎
加藤清　谷村昭雄
西三郎　米沢外男
小坂金行　小坂永吉
松本寛　出坂一衛
加藤俊一　久保田昌子
林伊一郎　谷内田一男
長東茂雄　多門佳枝
高林直松　西野俊男
竹林健仁

昭和58年

山田初雄　竹林健仁
高林直松　西野俊男
長東茂雄　多門佳枝
林伊一郎　谷内田一男
加藤俊一　久保田昌子
松本寛　出坂一衛
小坂金行　小坂永吉
西三郎　米沢外男
加藤清　谷村昭雄
高窪信雄　加藤松太郎
蔵本松雄　樋爪豊吉
村松松雄　蔵本松雄
堀内修三　島村隆
米澤利久　村池久一
竹林健仁　高林直松
西野俊男　田中古一
住田節子　林伊一郎

昭和55年

堀内修三　島村隆
米澤利久　村池久一
山田初雄　神川利男
竹林健仁　高林直松
西野俊男　田中古一
小林吉明　宮川達夫
窪田秀雄　谷村昭雄
入口久雄　樋爪豊吉
坂本作二　高林直松
吉田孝二　谷内田一男
北野外二　時女渥夫
宮本貞吉　棒田好雄
野川義雄　西村太一
加藤俊一　出坂一衛
林伊一郎　松本寛
田中古一　住田節子
棒田仁作　西野俊男
山田初雄　竹林健仁
米澤利久　村池久一
堀内修三　島村隆
谷内田一男　西田外志男
田形平八郎　長沢湘治
村田健一　吉田孝二
入口久雄　樋爪豊吉
小林吉明　宮川達夫
竹沢竜雄　谷村昭雄
宮本貞吉　棒田好雄
宮丸嘉男　西村太一
松本寛　出坂一衛
小竹譲　加藤俊一

昭和56年

堀内修三　島村隆
米澤利久　村池久一
山田初雄　竹林健仁
高林直松　西野俊男
長東茂雄　越村喜多子
林伊一郎　小竹譲
加藤俊一　宮川国子
松本寛　出坂一衛
宮丸嘉男　小坂永吉
西三郎　棒田与一
竹沢竜雄　谷村昭雄
高窪信雄　高橋与朔
蔵本松雄　樋爪豊吉
蔵原喜一　谷畑宗一
谷内田一男　松本明
真田哲

昭和57年

堀内修三　島村隆
米澤利久　村池久一
高林直松　竹林健仁
西野俊男　田中古一
住田節子　林伊一郎
北野外二　時女渥夫
吉田孝二　谷内田一男
坂本作二　高林直松
窪田秀雄　谷村昭雄
小林吉明　宮川達夫
入口久雄　樋爪豊吉
坂本利春　高林直松
川北秀雄　谷内田一男
小松謙二　石原正
宮本貞吉　山村直松
窪田秀雄　谷村昭雄
小林吉明　神保外巳雄
入口久雄　樋爪豊吉
坂本利春　高林直松
川北秀雄　谷内田一男
小松謙二　石原正

昭和59年

池田良幸　島村隆
米澤利久　村池久一
山田初雄　神保外巳雄
高林直松　小坂一郎
長東茂雄　吉田倭子
林伊一郎　上田寿一
加藤俊一　小竹譲
渡辺キミ江　出坂一衛
小坂金行　小坂永吉
西三郎　関正雄
本郷慶福　青木新兵衛
村本久雄　掛場一雄
高島与喜男　谷村秀夫
坂本作二　前夛時正
谷内田一男　中野清
二階堂行史　村松雄

昭和60年

池田良幸　島村隆
米澤利久　村池久一
山田初雄　本間勝美
神保外巳雄　高林直松
吉田倭子　林伊一郎
小坂一郎　長東茂雄
上田寿一　加藤俊一
小竹譲　酒井雅江
上出外喜雄　出坂一衛
小坂金行　小坂永吉
宮丸守　加藤俊一
西三郎　西村正為
本郷慶福　棒田勇
村本久雄　高島与喜男
谷村秀夫　本田善隆
石見義之　松本明
二階堂行史　村松雄

昭和61年

池田良幸　島村隆
米澤利久　村池久一
山田初雄　本間勝美
小坂一郎　長東茂雄
吉田倭子　林伊一郎
神保外巳雄　高林直松
宮丸守　加藤俊一
小竹譲　酒井雅江
上出外喜雄　出坂一衛
小坂金行　小坂永吉
北村富正　中本貞行
宮上義仁　棒田勇
村本久雄　石見義之
村松雄　松本明

昭和62年

山本仁　島村隆
米澤利久　村池久一
山田初雄　本間勝美
神保外巳雄　高林直松
吉田倭子　林伊一郎
小坂一郎　長東茂雄
宮丸守　加藤俊一
小竹譲　酒井雅江
上出外喜雄　出坂一衛
小坂金行　駒崎稔
村松雄　松本明
村本久雄　高島与喜男
谷村秀夫　本田善隆
石見義之　松本明
二階堂行史　村松雄

昭和63年

山本仁　島村隆
米澤利久　村池久一
山田初雄　中村勲
高林直松　小坂一郎
本間勝美　神保外巳雄
林伊一郎　宮丸守
加藤俊一　小竹譲
町田由美子　小坂市之丞
小坂金行　駒崎稔
北村富正　山上久男
梶田正夫　棒田勇
村本久雄　徳野与男
池下善義　谷村秀夫
山田洋明　須藤克行
石見義之　上田寿一
石川裕二　村松雄

平成元年

山本仁　島村隆
米澤利久　村池久一
山田初雄　中村勲
神保外巳雄　石見義之
北村富正　長井実
宮上義仁　棒田勇
村本久雄　村田和男
高島与喜男　谷村秀夫
西川満州夫　畷林正樹
石見義之　田形平八郎
中山幸男　村松雄

長東茂雄　延村茂憲
谷村玉枝　掛場与一
加藤一男　加藤俊一
宮丸守　町田由美子
小坂市之丞　小坂金行
駒崎稔　北村富正
西村浄一　梶田正夫
棒田勇　村本久雄
米沢龍信　池下善義
村上金雄　橋本栄太郎
佐々木賢行　松下利夫
水井正一　松儀博之
村松松雄

平成2年

藤木正義　米澤利久
村池久一　山田初雄
中村勲　神保外巳雄
石見義之　長東茂雄
加藤俊一　宮丸守
東一臣　加藤一男
延村茂憲　谷村玉枝
斎藤喜代子　小坂市之丞
山田孝　駒崎稔
岩本外臣　山村外志男
西元正雄　棒田勇
柳橋夏雄　能崎明夫
池下善義　村上金雄
普和章　佐々木賢行
中島照男　中山一秀
松儀博之　村松松雄

平成3年

藤木正義　米澤利久
村池久一　山田初雄
中村勲　神保外巳雄
石見義之　長東茂雄
延村茂憲　谷村玉枝
東一臣　村池敬一
加藤俊一　宮丸守
斎藤喜代子　長井金正
山田孝　駒崎稔
岩本外臣　山村外志男
西元正雄　米林敏行
柳橋夏雄　宮本弘
池下善義　村上金雄
瀬長衛　佐々木賢行
前多時正　松多秀樹
松儀博之　村松松雄

平成4年

藤木正義　米澤利久
村池久一　山田初雄
中村勲　田中仁
神保外巳雄　石見義之
長東茂雄　延村茂憲
谷村玉枝　東一臣
村池敬一　小坂一郎
宮丸守　斎藤喜代子
長井金正　小原芳信
駒崎稔　岩本外臣
山本喜佐雄　石下幸雄
米林敏行　武苗恒之

示野直政　高島與四衛
村上金雄　菊田克実
大森弘　金曽年雄
松多秀樹　安井敏壽
村松松雄

平成5年

若林節夫　米澤利久
中村勲　田中仁
村池久一　山田初雄
神保外巳雄　石見義之
山内喜代志　延村茂憲
谷村玉枝　東一臣
棒田剛　斎藤喜代子
長井金正　小原芳信
駒崎稔　岩本外臣
山本喜佐雄　石下幸雄
米林敏行　武苗恒之
吉村修　高島與四衛
村上金雄　西村操
大森弘　垣内一郎
柴田徳二　中山幸男
村松松雄

平成6年

若林節夫　米澤利久
村池久一　山田初雄
中村勲　田中仁
神保外巳雄　駒崎稔
山内喜代志　延村茂憲
東一臣　竹川操枝
棒田剛　飛鳥井久雄

平成7年

斎藤喜代子　長井金正
岩本外臣　村上金雄
村松松雄

若林節夫　米澤利久
山田初雄　中村勲
田中仁　神保外巳雄
駒崎稔　山内喜代志
延村茂憲　東一臣
竹川操枝　中野博雄
飛鳥井久雄　斎藤喜代子
龍瀧弘美　岩本外臣
高島與四衛　大森弘
村松松雄

平成8年

若林節夫　米澤利久
山田初雄　中村勲
田中仁　村池敬一
神保外巳雄　駒崎稔
山内喜代志　延村茂憲
小坂金行　野崎義則
飛鳥井久雄　斎藤喜代子
龍瀧弘美　岩本外臣
清谷暁外　大森弘
村松松雄

平成9年

谷口仁一　米澤利久
山田初雄　中村勲
田中仁　村池敬一
神保外巳雄　駒崎稔

山内喜代志　延村茂憲
小坂金行　野崎義則
飛鳥井久雄　斎藤喜代子
下出智子　岩本外臣
清谷暁外　大森弘
村松松雄

平成10年

谷口仁一　米澤利久
山田初雄　中村勲
田中仁　村池敬一
神保外巳雄　駒崎稔
山内喜代志　延村茂憲
小坂金行　村上紀代美
小林雅治　飛鳥井久雄
清谷暁外　中島照男
村松松雄

平成11年

谷口仁一　米澤賢司
山田初雄　中村勲
田中仁　神保外巳雄
駒崎稔　山内喜代志
延村茂憲　小坂金行
村上紀代美　小林雅治
飛鳥井久雄　清谷暁外
中島照男　村松松雄

平成12年

谷口仁一　米澤賢司
山田初雄　中村勲
田中仁　神保外巳雄
駒崎稔　山内喜代志
延村茂憲　小坂金行
村上紀代美　長田龍夫
飛鳥井久雄　神谷てる子
清谷暁外　中島照男
村松松雄　能沢文栄

平成13年

谷口仁一　米澤賢司
山田初雄　中村勲
田中仁　神保外巳雄
駒崎稔　山内喜代志
延村茂憲　小坂金行
喜多栄子　長田龍夫
飛鳥井久雄　神谷てる子
清谷暁外　山岸昭博
村松松雄　能沢文栄
土田満

お断わり

歴代各部長、歴代運営審議委員につきましては、一時期において正確な記録がありませんでしたので、分かる範囲内での記載といたしました。

社会教育功労者表彰

昭和32年度　樋口友重（副館長）
昭和35年度　坂井善雄（館長）
昭和36年度　岩本義男（運営審議会委員）
昭和40年度　上坂孝治（副館長）
昭和45年度　島村　隆（運営審議会委員長）
昭和50年度　牧野外茂二（副館長）
昭和53年度　竹林健仁（運営審議会委員）
昭和54年度　二木由郎（館長）
昭和55年度　松本　寛（運営審議会委員）

公民館視聴覚教育功労者表彰

昭和39年度　上坂孝治（視聴覚部長）

公民館優良役職員表彰

昭和45年度　坂井善雄（前館長）
市長表彰
昭和45年度　牧野外茂二（主事）
県会長表彰
昭和46年度　牧野外茂二（主事）
市長表彰
昭和52年度　棒田二作（運営審議会委員）
会長表彰
昭和58年度　島村　隆（運営審議会委員長）
市長表彰
平成2年度　坂本作二（館長）
会長表彰
平成4年度　長東茂雄（運営審議会委員）
会長表彰
平成10年度　小嶋外志夫（副館長）
会長表彰
平成13年度　小嶋外志夫（副館長）
市長表彰

金沢市青少年健全育成功労者表彰

昭和62年度　神谷内葵町育成委員会
平成元年度　小竹　譲
平成4年度　石川県知事表彰
平成4年度　延村茂憲
平成7年度　石川県知事表彰
平成5年度　山内喜代志
平成11年度　石川県知事表彰
平成6年度　高林健二
平成7年度　松井清明
平成9年度　長谷川弘洋
平成10年度　宮野康之
平成11年度　小林雅治
平成13年度　野崎義則

永年勤続表彰

昭和42年度　坂井善雄（勤続15年）
昭和44年度　樋口友重（勤続10年）
昭和45年度　谷村喜代志（勤続10年）
昭和46年度　長東茂雄（勤続15年）
昭和46年度　上出外喜雄（勤続10年）
昭和49年度　島村　隆（勤続15年）
昭和50年度　宮本貞吉（勤続15年）
昭和50年度　牧野外茂二（勤続10年）
昭和51年度　長東茂雄（勤続20年）
昭和53年度　谷村喜代志（勤続15年）
昭和54年度　小竹　譲（勤続10年）
昭和55年度　上出外喜雄（勤続15年）
昭和55年度　山内喜代志（勤続20年）
昭和56年度　島村　隆（勤続20年）
昭和56年度　牧野外茂二（勤続20年）
昭和53年度　井上寛司（勤続15年）
昭和53年度　棒田二作（勤続10年）
昭和54年度　村池久一（勤続10年）
昭和54年度　小竹　譲（勤続15年）
昭和55年度　二木由郎（勤続10年）
昭和55年度　住田節子（勤続10年）
昭和55年度　牧野外茂二（勤続25年）
昭和55年度　上出外喜雄（勤続20年）
昭和55年度　山内喜代志（勤続15年）
昭和56年度　延村茂憲（勤続10年）
昭和56年度　島村　隆（勤続25年）
昭和56年度　井上寛司（勤続20年）

昭和57年度	高林直松	（勤続10年）
	竹林健仁	（勤続20年）
	林伊一郎	（勤続15年）
昭和58年度	蔵元益男	（勤続10年）
	村池久一	（勤続15年）
昭和60年度	長東茂雄	（勤続30年）
	上出外喜雄	（勤続25年）
昭和62年度	照田繁隆	（勤続10年）
平成63年度	高林直松	（勤続15年）
	山田初雄	（勤続10年）
平成元年度	島村隆	（勤続30年）
	村池久一	（勤続20年）
	加藤俊一	（勤続10年）
	米澤利久	（勤続10年）
平成2年度	小竹譲	（勤続25年）
平成3年度	小嶋外志夫	（勤続10年）
	林劭	（勤続10年）
平成4年度	村松松雄	（勤続10年）
平成5年度	山田初雄	（勤続20年）
	延村茂憲	（勤続15年）
平成6年度	安田紀行	（勤続10年）
	村池久一	（勤続25年）
	米澤利久	（勤続15年）
平成7年度	神保外巳雄	（勤続10年）
	田中邦夫	（勤続10年）
平成8年度	小嶋外志夫	（勤続15年）
	西なが子	（勤続10年）
平成9年度	石見義之	（勤続10年）
平成10年度	駒崎稔	（勤続10年）
	山田初雄	（勤続25年）
	延村茂憲	（勤続20年）
	村松松雄	（勤続15年）
	中村勲	（勤続10年）
	山田耕一	（勤続10年）
平成11年度	東円桂子	（勤続10年）
平成12年度	田中邦夫	（勤続15年）
	北川光夫	（勤続10年）
平成13年度	斎藤喜代子	（勤続10年）
	小嶋外志夫	（勤続20年）
	西なが子	（勤続15年）
	村上豊	（勤続10年）

読書連絡会の記録

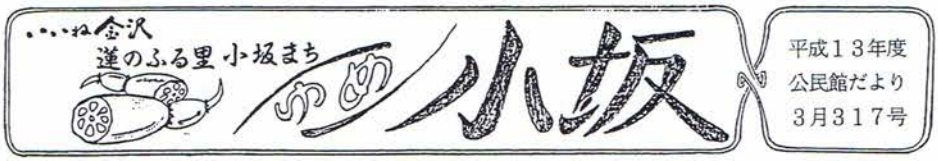
読書会名	（結成日）	代表
はすの実読書会	昭和48年	山本弘子
山茶花読書会	〃48年	山片喜美子
第二はすの実読書会	〃55年	本田光恵
雲読書会	〃57年	永井真寿子
御所読書会	〃60年	安田清子
読書会花野	平成2年	西村邦子
葵読書会	〃3年	林和子

文集発行

昭和53年	文集「山茶花」 山茶花読書会
〃63年	文集「翠」 はすの実読書会
平成4年	きき書き抄「明治生まれの女」 〃
〃6年より	読書会だより 年一回八号まで発行 継続 小坂読書会連絡会

表彰関係

昭和58年	全国読書推進賞	個人 山本弘子
昭和58年	真柄読書推進賞	団体 山茶花読書会
昭和60年	真柄読書推進賞	団体 はすの実読書会
平成2年	〃	個人 本田光恵
〃4年	〃	団体 雲読書会
〃6年	〃	団体 第二はすの実読書会
〃6年	〃	個人 西村邦子
〃8年	石川県文化功労賞	山本弘子
〃11年	真柄読書推進賞	団体 読書会花野
〃11年	石川県社会教育功労賞	山本弘子
〃11年	金沢市文化賞	山本弘子
〃12年	文部大臣賞	山本弘子



昭和27（1952）年、当公民館が発足した年に公民館報「館報こさか」が年２回発刊され、それが３～４年続いたが休刊となり、昭和44（1969）年に再発刊された。以後51年７月頃まで年２回発行が続いたが、その当時、毎月の行事を知らせてほしいとの要望があり、ガリバン刷りで毎月「おたより」として発刊するようになったのである。

これが昭和60（1985）年頃からワープロ打ちになり、現在のＡ３版中折４頁となり「いいね金沢　蓮のふる里　小坂まち」のフレーズを冠し、公民館だより「ゆめ・小坂」として毎月発行し校下全戸に配布、各町内会や各種団体の活動の指針となっていて、本年３月で317号の発行となった。

参考文献

。角川日本地名大辞典　17石川県　昭和五六年七月八日発行　㈱角川書店
。世界大百科事典　昭和四六年発行　平凡社
。こども石川県史―地名編―　昭和四四年七月二〇日第三版　石川県児童文化協会
。いいね金沢　城北ものがたり　二〇〇〇年五月発行　金沢城北ライオンズクラブ
。小坂の歩み　昭和四六年二月一〇日発行　小坂農業協同組合
。金沢北地域誌　香我の譜　昭和五八年一〇月一五日発行　金沢北ロータリークラブ
。金沢市公民館五十周年記念誌　平成十三年二月二十四日発行　金沢市教育委員会　金沢市公民館連合会
。石川県公民館五十年史　平成十一年三月一〇日発行　石川県公民館連合会

あとがき

本誌発刊にあたり、金沢市当局をはじめ、関係機関各位のご祝辞をいただき誠に有難うございました。

五〇年間の足跡を編集するにはあまりにも短期間でありましたが、執筆を依頼しました方々の精力的なお力添えで、原稿が届くごとにその歴史の重みを実感いたしました。そして戦後の混沌とした社会情勢の中にあって、地域の人々の心をつなぎ支えあう場として果たしてきた公民館の役割の大きさを再確認いたしました。

また、小坂公民館の五〇周年を語るに、これを支えてきた単位町会を忘れてはならないとの思いから、わが町会を紹介するコーナーを設けました。古い歴史をもつ町会、まだ新しい町会と色々ですが、どの町会も我が町に誇りと愛着をもち、より住みよい町づくりをめざして前進しつつある点で共通していました。新旧問わず互いを認め、学びあう場としても公民館はなくてはならない存在であり、我が校下の公民館として着実に発展していくものと思います。

編集期間中にニューヨークでの同時多発テロが起き、世界を震撼させました。「戦争の世紀」と言われた二〇世紀が終わり、「生命と人権の世紀」と期待された二一世紀の幕開けにしてはあまりにも悲しい出来事でした。本誌が、地域の方々には身近なところから戦後の五〇年をふりかえり平和の尊さを感じ、子供たちには次の五〇年を創る明日への希望をつなぐ一冊となればこれに過ぎたる喜びはありません。

最後になりましたが、この記念誌の発刊にあたり原稿の執筆、資料提供等ご協力を賜りました皆様に厚くお礼申し上げます。

公民館の更なる発展を祈りつつ…

編集委員一同

五〇周年記念誌
編集委員（順不同）

水井正一
池村由紀子
皿井孝義
松井清明
松多秀樹
松本明
小竹譲

創立五〇周年記念誌　こさか

平成十四年三月十七日発行

編集　小坂公民館五〇周年記念誌　編集委員会

発行　金沢市小坂公民館
〒920-0811　金沢市小坂町北三一二番地
TEL　〇七六―二五二―三〇六七

印刷　田中昭文堂印刷株式会社
〒920-0377　金沢市打木町東一四四八番地
TEL　〇七六―二六九―七七八八